
永遠のフィレーナ
8
海の狼
作/首藤剛志
絵/高田明美
AM
JuJu

登場人物

フィレーナ	デビス帝国に滅ぼされた国、フィロセラ王国の王女。灯台の光の方向へ旅を続ける。
リラ	フィレーナの元・妻。ネストが倒れた後、首都ボーを脱出し、フィレーナと合流。
ネスト	元・闘技作家。帝国警察に殺されたかに見えたが、密かに更正病院へ収容される。
テス	帝国人民心理更正病院勤務の新米の心理病理観察看護人。ネストの調査をする。
ラズル	帝国のエリートだったが、リラによって全てを失い、首都ボーの反乱軍に加わる。



アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 8

海の狼

首藤剛志

絵/高田明美

Pocket Editions of Animage
by Tokuma shoten

目次



口絵・本文中さしえ／高田明美
帝国地図／道原しょう子

プロローグ

フィレーナは夢を見ていた。
白く泡だつ波がうちよせてくる。
頭から波をかぶる。
泡の感触がここちよい。
フィレーナは、泡に弄ばれ、上へ下へ転がる。
鼻をくすぐる甘い潮の香り。
舌を刺す汐の刺激……。
揺れる。たゆたう。
フィレーナは波濤をすべり降りていく。
青い空。
白い波。
フィレーナのふるさと……海……。
だが、夢の心地良さはそこまでだ。

一転して、海は赤黒く汚潮にまみれ、ざらついた泥のような波に飲み込まれ、フィレーナはもがきながら沈んでいく。
フィレーナは、息ぐるしさに目を覚ます。
隣の寝台にはリラがいる。
波の音がする。
それは、夢の中で聞いた青い海の音だ。
獣皮で作られた天幕の外に出てみる。
降るような星。
そして、星明かりに青白く浮かび上がった氷の崖。
その足元に、波が泡だっている。
頬に触れる汐風は絶えず動いている。
そうか……。
フィレーナはほっと息を吐き頷く。
僕は今、海の上にいる。
北辺の半島からちぎれるように切り離され、流されていく氷の島にいる。
船出は始まった。
だが、どこへ向けて旅立っているのか……。
いく先が、今見た夢の結末、汚潮に満たされた泥沼ではないと言い切れるはずがなかった。



フィレーナは北辺の半島から切り離された巨大な氷山の島とともに漂流していた

しかし、ともかく、フィレーナの戦いの舞台に、フィレーナが幼いころから、意識無意識にかかわらず憧れ続けていた海が加わったことは確かだった。

波は、フィレーナの乗る氷の島に、何も語らずうちよせていた。

第1章

首都壊滅

ラズルの率いる首都反乱軍「ボーのフィレーナ」は、帝国統治下で聖地とされていた病院を攻撃目標にした。
ラズルは、攻撃目標として最重要視していた帝国人民心理更正病院に突入した。
その攻防戦のさなかだった。
首都ボーの上空で何かが炸裂した……。
次の瞬間……。
心理更正病院の中庭には、ラズルとネスト、テス、そして、十数人の心理障害患者しか残っていなかった。
「いったい、何が……何が起こったんだ」
ラズルの悲鳴に近い叫びに、答える反乱軍はひとりもいなかった。
心理更正病院に突入した反乱軍は、ラズルを一人残し、一瞬のうちに消えた。
どの兵士も武装した鎧や武器は、突入したそのときのままだった。
鎧の中の衣服や下着もそのまま残っていた。

人体だけがまるで蒸発したかのように消えたのだ。
文字通り抜け殻になった兵士たちの鎧姿は、そのほとんどがその場で崩れ落ちた。
中には器用に、鎧のまま仁王立ちの姿勢でいた兵もいたが……。
「大丈夫か！」
ラズルが駆け寄り、肩をゆすると、たちまち鎧は音をたてて倒れた。
鎧の中はからっぽだった。
それまであたり一面に満ちていた悲鳴と怒号、硝子剣の響き……はなかった。
血の沸き立つような戦いの気配はかき消されていた。
動いているのは、燃えている心理更正病院の炎と煙だけだった。
聞こえるのは風の音だけだ。
そこには、死さえなかった。
あるとしたら無だけだった。
テスが我に返って叫んだ。
「……病棟の患者を！」
テスは、病棟に駆け込もうとした。
「よせ……間に合わない」
ネストが、テスを抱きしめるように引き止めた。
炎を吹き上げて病棟の天井が崩れ落ちた。

「私の患者が……」

テスはがっくりと膝をついた。

ネストは首を振った。

「反乱軍の体は跡形もない。建物が焼け落ちなくても、患者が助かっていたかどうか」

テスは頷いた。

「……そうかもしれません」

テスには、何が上空で炸裂したかおおよその見当はついていた。

ネストとテス、そして、一部の心理障害者が残っているのがその証拠だった。

彼らは、特殊変形とは呼ばれても、優秀種には違いなかった。

そして、優秀種の他は消えた。

根こそぎ跡形もなく……。

帝国上層は、種を選別して消す兵器を使用した。

帝国上層がそんな類の研究をしているだろうことは、感じていた。

だが、兵器として反乱暴徒のみならず、同じ帝国人にまで使用するとは……。

「なんてことを……」

テスの頬から涙がしたたり落ちた。

「本当にこんなことが……」

もう、言葉にならなかった。

「人間のすることじゃない……」
ネストは、それだけ言って、黙ってテスを抱きしめてやるしかなかった。
もちろん反乱軍のラズルには、何が起こったのか理解はできなかった。
だが、すべてを失ったことは、直感できた。
ラズルは、訳のわからない虚脱感に襲われその場にしゃがみこんだ。
ラズルはほんの遊び心がきっかけで狐の仮面をつけた小娘に股間を蹴られ、それが理由で生殖能力を失い、優秀種という帝国の指導階級の立場を自分から脱落した男だ。
あの時も、似たような虚脱感があった。
それでも、とりあえずは、狐の仮面の小娘をさがしだすことを、生きていく口実にした。
みっともない生きざまだと自嘲しながらも、これもまた、ほんのふとしたきっかけで紛れ込んだ反乱軍の指導者に成り上がり、彼なりに懸命に作りあげた反乱組織が、「ボーのフィレーナ」だった。
考えてみればいき当たりばったりだった。
生粋の帝国人であるラズルが、なりゆきとはいえ、帝国に反乱する異人種を率いて戦う矛盾に満ちた馬鹿ばかしさ……なにしろ、ラズルが異人種に対して持っていたのは、並の帝国人と変わらぬ嫌悪と軽蔑だけで、なんら味方する義理も感傷もなかったのだ。
それでも、帝国の脱落者が生きていく、その口実として帝国への反乱を続けていた。
やがて反乱軍は、いつしかラズルの生きがいになっていた。

その反乱軍が、今、唐突に消えてしまった。
まるで、ひととき夢中になっていた玩具を取り上げられた子供のような気分だ。
しかも、玩具に夢中とはいえラズルは、玩具がしょせん、玩具にすぎないことを知っているひねた子供のように冷めた気持ちで反乱軍を扱っていた。
どう考えてもラズルにとっては本物ではないのだ。
本物の遊びにすらならなかった。
だが、本物であろうとなかろうと生きる口実にはなった。
ラズルはわずかな点数の差で最優秀種になりそこなった帝国優秀種だった。
ラズルは最優秀種になれなかった代わりに、税務局の役人としての出世を望み、最優秀種の資格のある子孫を作ることを、自分が生きていくことへの口実にした。
そして、帝国から脱落した今は、反乱軍の存在が生きる口実になっていた。
だが、なんであれなりゆきで目の前に現れたものを生きがいにしただけで、ラズル自身が望んだものではなかった。
では、望むものは何だ？……。
と……聞かれても答えられはしなかったが……。
ともかく、生きがいを失っても、喪失感が希薄だった。
……どうも、おれはなくしものが多すぎる……なくすことに慣れちまったようだ。
帝国への反逆が、ラズルの人生を賭けた目的であったなら、この事態になって、泣きわめく

か、絶望するか、それとも潔く死を選ぶか……それなりの反応があったかもしれない。

だが、反乱軍が消滅した一時的な衝撃から我にかえると今のラズルは、ただもうしゃがみこみ、呟くだけだった。

「なんでこうなるんだ」

……ひとりか……

ただ、取り残されたような孤独は十分に感じていた。

そして、そのときいまさらながらに気がついた。

……どうして、おれは、生きている？……

ラズルは、ネストとテス……そして患者たちを見すえた。

……そして、こいつらは……なぜ……生きている？……

ラズルはふっと溜め息をついた。

そして、硝子剣を握り立ち上がった。

……まあいい。とりあえず、やることができた……おれは、ここを攻撃にきたんだ……こいつら始末してやる……それがけじめだ……

こちらはひとり。

相手は武器をもっていないが数で勝ち目はなかった。

一度に飛びかかられたらひとたまりもない。

しかし、何もしないでいるよりは、少しは気が紛れる気がした。

ラズルは硝子剣（グラススオード）を構えネストに言った。

「何が起こったかしらんが、こうなった以上、敵のあんたたちには死んで貰（もら）う」

ネストが首を振った。

「これ以上の殺戮（さつりく）はたくさんだ」

「止（や）めてください。私たちは敵も味方もないわ……私たちは帝国の実験で生きる方を選ばれた実験鼠（ねずみ）にすぎないんです」

テスが言った。

「実験？」

ラズルが聞き返した。

「あなたは、帝国の優秀種ですね」

テスはラズルを見つめた。

ラズルは、呆然（ぼうぜん）とテスを見返した。

「馬鹿な……おれは反乱軍だ。帝国人のはずがあってたまるか」

テスは首を振った。

「反乱軍であろうとなかろうと、ここで生きているのが証拠です。今、ここで、消えずに息をしているのは、帝国の優秀種だけのはずです」

「優秀種だけ……？」

「あなたは優秀種でしょう……？」

ラズルは構えた剣を降ろした。
「だったらどうだというんだ」
テスはラズルに言った。
「帝国の上層は、次の実験を必ずするはずです。そのとき、だれかが消えるとしたら、私たち優秀種です。そして、最優秀種だけが残る」
ネストは頷いた。
「何が理由で、優秀種の帝国人が、反乱軍をやっているか知らんが、生きていたいなら、この街から一刻も早く離れることだ」
ラズルは、ふっと笑った。
「忠告はありがたいが、そう言われただけでは生きていく気にならんね。どうやら、あんたたちは、帝国の上層に詳しいらしい。この、馬鹿げた無差別抹殺の意味を教えてもらいたいもんだな。それとも、これは、一度知ったら生きていられない噂の帝国機密ってやつかな？」
「帝国機密には違いありません」
テスが答えた。
「おれは、こうなった以上、いつ死んだって構わない。あんたたちもそのつもりでいてくれ。いいか、話したくないなら殺す」
ラズルは再び、剣を構えた。
テスは毅然とした表情でラズルを見すえた。

今まで、聡明ではあったが、ひかえめだったテスが、見せたことのない硬い意志が見てとれた。

「私たちに帝国機密を守る義理などありません。私が守らなければならないのは、私の患者です。私は死んでも彼らを守ります」

「彼ら？」

ラズルは、テスの後ろに立っている心理障害者たちに目をやった。

彼らは焦点のあわないうつろな目で、心棒だけで支えられているやじろべいのように、体をゆらしながら、かろうじて立っている。

泣いているのか笑っているのか、その、表情に人間らしい意識があるとは思えない。

「彼らを守る？　命懸けで……？」

ラズルは、呆気に取られて、テスを見返した。

「ええ……だれにも手を触れさせはしません」

「そいつらは、心理障害者だろう……人間の意志を失った……。そいつらはもう人間じゃない……それを、守るというのか？」

「帝国の基準でいえば、この人たちは人間ではないかもしれません。帝国は、不良品や劣等と見なされる人間は、それが同じ帝国人であっても、疎外し排除し始末する。それが、帝国人自身、当然のことだと思っています。でも、心理病理観察看護人……いえ、私だけじゃない。病院で患者を看護するものにとってはそうじゃない。それが、どんな人間だろうと、たとえ、回

復の見込みのない不治の病であろうと、その人が生きている限りは守ります」
テスは、きっぱりと言い返した。
ラズルの握っている剣を恐れているそぶりはまるでなかった。
ラズルはテスの態度に気圧されて、苦笑した。
「何、考えてんだ。あんたは……。
患者なら、敵も味方も人種も心理障害もないってのか……？」
「敵も味方も人種も、その人がどんな障害をおっていようが、看護を妨害するものにはなりません」
ラズルは肩を竦めた。
「こんなのがありか。今時……」
そして、声をあげて笑った。
「あんた、おれもちょいとした障害者でね……望みもしないのに子供が作れない体になっちまった。あんた、守ってくれるかね、このおれを」
だが、テスは、眉ひとつ動かさず、話を続けた。
「無駄口を叩く暇はないわ。帝国機密と、帝国上層がこれから何をやりたいのかをあなたが聞きたいのならお話ししましょう」
テスは、同意を求めるかのようにネストをちらりと見た。
ネストは頷いた。

剣を持っている男と一歩も引かずにわたり合っているテスに、ネストは何も言う気はなかった。

ただ、ラズルが、剣を振り上げたらどんなことをしてでもテスを守る気でいた。

テスは、ラズルを見据えていった。

「ただし、その前にお願いがあります」

「条件か……」

「いえ、看護する者としての、敵味方にかかわらず、この戦場を作り出したあなたたち、軍隊への当然の要求です。あなたたには、この患者たちを安全な場所へ避難させる責任があるはずです」

「責任？……そんな責任聞いたことがない」

「聞いたことがなくてもあなたたには責任があります。彼らは反乱軍でも、帝国軍でもない。病人としてここに隔離されていた人たちです。この戦いとは一切関わりのない人の安全を損なう権利はだれにもない。違いますか？」

ラズルは肩を竦めた。

「おいおい……こりゃ何だ。今時、伝説の人道主義の講義かい？」

「無駄口はいらないと言ったはずです。私のお願いに答えてくれますか？」

ラズルは、テスの顔をまじまじと見つめた。

そして、いささか間が抜けていたが改めて驚いた。

……こんな娘が、病院で看護を……？
それは、ネストが、初めてテスにあったときの驚きそのままだった。
とにかく美しい娘だった。
個人の趣味とか好みを越えて、美しいと言う表現が似合っていた。
美しいだけではない。
子猫のような目は、しっかり個性を主張していた。
ラズルへの口調はあたまごなしだったが、表情は違っていた。
懸命に説得しようという真摯なものがひしひしと感じられた。
それでいながら、ラズルにすがるように見つめる瞳は、危なげですらあった。
この娘なら本当に患者を守るために生命を投げ出しかねない。
ラズルはそう思った。
帝国人の女に、これほどひたむきな表情を見たことはなかった。
どの女も怠惰で軽薄だった。
ラズルは、ふと、自分を子供を作れない男にした狐の仮面の娘を思い出した。
あの娘にも帝国人にないなにかしら本物らしさがあった。
だが、テスの表情にはさらに生真面目な叫びがあった。
男は、そんな女に出会うと照れる。
どうしていいかわからなくなる。

ラズルは呟いた。

「このおれに何をしろというんだ」

「この人たちを街から連れ出す手伝いをしてください。この人たちは自分が何をしているか、どこに行ったらいいかもわからない心理障害なんです。これだけの数を、私たち二人だけでは、とてもこの街から連れ出せません」

「おれたち三人で、こいつらを……」

ラズルは、ネストを見た。

「その代わり、私たちが知っていることは、みんな話してやろう」

ネストが言った。

ラズルは、剣を見つめた。

「反乱軍を率いて乗り込んで、心理障害の群れを連れて出ていくか……。しょせん、それがおれの器かもしれん」

ラズルは溜め息をつき、剣を鞘に収めた。

＊

心理更正病院で起きた事件を、首都ボーの全体から見れば以下のようになる。

首都上空で、炸裂した新爆弾は、住民のほとんどを一瞬のうちに消滅させた。

人間の中で何の被害も受けずに生き残ったのは、特殊変形優秀種も含む帝国の上級種である優秀種以上の人間と、動物たち……そして、首都の建造物にはなんら影響はなかった。

別の言い方をすれば、新爆弾は帝国の上級種以上を除く人間全てを、他の生物に影響を与えず消滅させたのだ。

新爆弾は、人間の遺伝子を選別して、ある特定の種だけを残し、他の人間を根こそぎ跡形もなく消してしまう兵器だった。

新爆弾の成果は皇帝種のほぼ満足できる結果に終わった。

皇帝種の一人は、この結果に思わず呟いた。

「画期的です。おそらく、長い人類史上ではじめて完成した清潔な兵器です。この星の自然環境をなに一つ傷つけず、人間だけを消せるのですからね」

もう一人が頷いた。

「確かに自然にやさしい兵器ではありますね……もともと、この星の生物で、殺し合いの戦争をするのは人間だけだ。だが、そのための武器は、人間を殺すと同時に、自然環境も破壊する。他の生物にとって、はた迷惑このうえない道具だったのですから」

両性の皇帝種が皮肉っぽく言った。

「人間の使う道具など、しょせんどんなものも自然を破壊する作用を免れはしませんがね」

女の皇帝種が肩を竦めた。

「それを言っては、実も蓋もありませんわ。少なくとも、核爆弾から超爆弾にいたる環境破壊兵器を終わらせる兵器が完成したことは確かです」

もう一人の女が首をふりながら言った。

「でも、遅すぎましたわ。もはや、この星は……」
　最年長の皇帝種が後を続けた。
「そう、二千万人弱しか生きてはいけない。一年もすれば、その半分の一千万がこの星の許容限度でしょう。今回の新爆弾は、帝国の優秀種以上を生き残らせました。しかし、この爆弾が完成したということは、匙加減ひとつで、帝国の優秀種だけを消滅させ、他の人種を生き残らせることも可能だということです」
　一番若い皇帝種が一同を見回して言った。
「われわれはこの星を継ぐ可能性のある人種を残す。このことをもう一度、確認しておきましょう。われわれは皇帝種まで進化したとはいえ帝国人の末裔です。もしも、われわれの期待する超皇帝種に見込みがない場合……帝国人種ではない別の人種のために、われわれはあの爆弾を本当に使うかどうか……自らの手でわれわれ帝国人種に終止符をつけるられるかどうか」
　両性の皇帝種が肩を竦めた。
「もったいぶった言い方はよしましょう。人類の生存に不用なものは、たとえ自分自身であろうと消滅させる。われわれにその覚悟があるかどうか……どうです？　みなさん」
　最年長の皇帝種が言った。
「この星に生まれた人類という生物を生存させる。いかなることがあろうとも……。そのためにわれわれは生まれてきたのです。それが果たされなければ、われわれは存在している価値はない」

両性は一同を一人一人見据えた。

「やれやれ、われわれの存在の価値のためには、われわれ自身の存在がないほうがいい……そういうこともありうるということですね」

一番若い皇帝種が頷いた。

「それが必要ならば、それをやりとげるのが、われわれの存在価値でしょう」

女の皇帝種が沈んだ笑みを浮かべて言った。

「自身の存在よりも存在価値のほうが優先する……観念的ですよね……でも、私たちは本気でそう思っている……生物は、なにより自身の生存そのものを望むと言うのに……そうは思わない私たちは、生き物と呼べるんでしょうか」

「われわれがどんな生き物であろうと、人類は存続させなければならない。たとえ、われわれが、人類の域を逸脱した生物だとしても……違いますか」

一番若い皇帝種が、静かな口調で言った。

最年長の皇帝種が、気を取り直すように言った。

「ともかく、新爆弾は完成し、超皇帝種の誕生ももうすぐです。事態は最終段階に入ったといっていい。もはや、首都ボーに首都の機能はありません。新爆弾の更なる実験場でしかない」

皇帝種の一人が言った。

「新爆弾が、最優秀種に影響を及ぼさずに優秀種を消滅させられるかどうか……」

「それだけではありません。帝国人種のみならず、他人種も、もっときめ細かく狙い撃ちでき

るようにならなければ、微妙(びみょう)な人口調整は望めません」
　両性の皇帝種が呟いた。
「そのきめ細かい狙い撃ちに、皇帝種の両性という種が、当てはまらないように願いたいですな」
「両性。雌雄種(しゅうしゅ)。どちらにしろ、皇帝種まで消えねばならぬ事態になれば、帝国はおろかこの星自体も終わりでしょうな」
「いずれにしろ、われわれが、空気の清浄(せいじょう)とはいえないこの首都にいる必要はなくなった。われわれは最終段階に歩を進めましょう」
　皇帝種の前に、帝国の地図が浮かびあがった。
　大陸の中央の高原地方が拡大された。
　皇帝種の一人が呟いた。
「ここを出て、ジャンガーに行きますか」
　デビス中部高原地方ジャンガー……そこは、北と南を険しい山岳地帯(さんがくちたい)に囲まれたこの星の屋根とも呼ばれている地方だった。
　高さ六千を越える高山地帯のため、空気が希薄で住む者はほとんどいず、古くから人跡未踏(じんせきみとう)と呼ばれている土地だった。
「この星で、最も星に近い場所ですな」
　両性が言った。

「あそこに住んでいるのは、われわれを産み選び出した最優秀種……帝国最高の人種だけです」

最年長の皇帝種が呟いた。

「帝国最高の人種……それが人類最高と言い切れるかどうか……」

一番若い皇帝種は、その呟きがまるで耳に入らなかったように言った。

「ジャンガーで、われわれの進化型、超皇帝種は完成段階を迎えます。帝国への指令はあすこからで、十分できます。この首都にいる必要はない。答えはもうすぐ出るのですから……」

一同は頷いた。

だれの表情にも、期待に満ちた明るさはなかった。

＊

その日、国立帝国病院の周辺が、異様な地鳴りに襲われた。

地上には何の影響もなかった。

もっとも、地上は、超爆弾による恐慌状態で、そんな異変を気にしている余裕のある者はいなかった。

それは、国立帝国病院の最下層が爆破された震動だった。

地下は跡形もなく土砂に埋もれ、そこに帝国を支配していた皇帝種がいたと気づく者は、だれもいなかった。

その日から、帝国上層の指令は首都の政治機関に届かなくなった。

首都圏の帝国軍部にも、さらに帝国機密情報兵団にも、何の指令もなかった。
首都圏外からの救援も来なかった。
首都は完全に見放されたのだ。
指令を失い、優秀種だけしか生き残っていない首都の混乱はひどいものだった。
首都の人間のほとんどが消滅した恐慌状態は、ほどなく収まったもののもともと、優秀種は、支配監理階級に属している。
部下や兵隊や奴隷がいてこその支配階級だ。
支配するものがいなくなれば、お山の大将の寄せ集めでしかない。
生産性はゼロ……三日もすれば、深刻な食糧危機がやってきた。
都庁、警察、軍部、帝国機密情報兵団、それぞれの優秀種が、それぞれの立場、それぞれの思惑で、勝手に動き始めた。
互いに疑心暗鬼に陥った彼らは、帝国優秀種同士で衝突を繰り返し、裏切りや暗殺、掠奪、暴行が頻繁に起こった。
あっという間の無政府状態だった。
一週間もたたぬうち、首都の優秀種は、餓鬼の群れになった。
さらに、帝国各地に定期的に起こる神女団の行列は、相変わらずボーの神殿を目指し、首都に流れ込んできた。
月の光に踊り続ける女たちの群れは、地獄の亡者を思わせた。

そんな首都の混乱は、各地の反乱軍の格好の餌に見えた。

ラズルの率いる「ボーのフィレーナ軍」が新爆弾によって消滅させられた事実は、生存者が優秀種のラズルただ一人では、広まりようがなかった。

第一、新爆弾の存在自体が、だれにも知られてはいなかったのだ。

反乱軍は、先を争うようにして、ボーに侵入した。

反乱軍と神女団と浮浪化した優秀種の群は、伝説の黙示録や終末……「最後の審判」そのままの姿だった。

やがて、どこからか新爆弾が飛来して彼らの姿を消滅させた。

新爆弾は、何回も首都の上空で炸裂した。

そして、とうとう優秀種だけが消えた日もあった。

帝国上層部は、人種別に作用する新爆弾を、ほとんど完成の域にまで磨き上げたようだった。

……首都に踏み込んだら二度と戻ってこれない……

そんな噂が全国に広まり、だれも首都に近寄らなくなるまで、首都ボーは、実に数億を越す反乱軍や神女団、帝国人暴徒の生命をくりかえし奪っていった。

＊

夏の日差しが、氷の荒野で光の飛沫を上げている。

抜けるような青空に、幾重もの虹が、極光さながらにそれぞれの色帯の饗宴をしている。

あの火山の噴火から二か月がたっていた。

北辺のフィアイの民の地から切り離された巨大な氷の半島は、あまりに巨大過ぎて、乗っている人々にはその速度は体感しづらかったが、大洋の海流に乗り、かなりの速さで動いていた。
急速に種を進化させた帝国人は体質的に海水が苦手で、海の上には出てこない。
こちらが帝国本土に上陸しないかぎり、当分の間は安全なはずだった。
食料も、フィアイの民が食べて生けるだけの糧は、海から手にいれることができた。
切り離された氷の半島には、アザラシやトドの類の海洋動物が住んでいた。
もともと、帝国の自然保護地区だったこの地には、帝国内で唯一、野生動物が、細々ではあるが生き伸びている地域だ。
土地の痩せた極地に住むフィアイの人々は、農耕で生活する民ではなかった。
何万年も昔から、あるがままの自然の糧を採取して生きる狩猟民族だ。
少ない植物の類の栄養素は、動物の生肉や海藻を食べて補っている。
肉類に熱を加えて調理することは、肉を食べやすくし旨味を増す効果はあるものの栄養価を損ねるだけだということを、フィアイの人々はよく知っていた。
海面下には、極北の地でもしぶとく生きている苔や藻の類があった。
そして、氷の上には、小規模だが、自然の花畑さえ、点在していた。
何千万年もの間、溶けることのなかった氷の上に、火山活動や、嵐などの大気の変動で降り積もった栄養分を含んだ土が、風によって飛んできた花々の種子を芽生えさせたのだ。
「石の上にも三年。……じゃなくて氷の上にも何千年か……しぶといよね……生きものって」

リラが、しみじみと呟く。
「でもって、しぶとく生きてる私もフィレーナも十分、生きものしているってことか」
奴隷という、自分の生命の保証のない生まれにしては、ほんとうに、しぶといというかあきらめが悪いというか、偉いもんだと、リラは自画自賛したくなる。
危なっかしいたとえに、薄氷の上という言葉があるが文字どおり、氷の上でも生きてしまっているんだから、フィレーナは、そんな自分がすごいとしみじみ思ってしまう。
だが、フィレーナは、自分のしぶとい命に、いまさら感心している余裕はなかった。
……このままが続きはしない。今後を、どうすればいいのか……
フィレーナは、自問自答を繰り返していた。
今、フィレーナは、フィアイの民の指導者的な位置にいる。
望んでなったわけではない。
望んでいるどころか、フィレーナは、そんな立場になるのは本来まっぴらのはずだった。
その気持ちは、反乱集団「狼のフィレーナ」の指導者になったところも、今も変わりはない。
帝国に対する集団の指導者でいるかぎり今までもこれからも、自分の後を振り向いてみれば、死神ですら呆きれはてるに違いない死屍累々の荒れ野が続くだろう。
だが、もう、フィレーナは以前のように悩みはしなかった。
今まで何度、戦いを、殺しあいを避けようとしたろう。
けれど、フィレーナはまるで目に見えない何かの力が仕組んだように、気がつけば戦ってい

た。

そして、今、フィレーナは長い戦いの末に、自分がこの世界の存亡にかかわっている自覚があった。

少なくとも、現在は、フィアイの民の生死を握る位置にいることは確かだ。

帝国の軍隊は、明らかに、フィアイの民と出会えば、明らかに抹殺しようとするだろう。

だが、フィアイの民は、戦いの方法を知らない。

帝国と戦う能力と方法を持っているのはフィレーナしかいないのだ。

……このまま、氷の上で波にまかせて漂っている訳にはいかない。だいいち、いつまで、海の上、氷の上で、ぼくらは耐えられるか……

そんなフィレーナの気持ちを知ってか知らずか、自然の花畑の花を食料として摘んでいたフィラーレが呟いた。

「今年は、いつになく花が沢山咲いているわ。知らない花もいっぱい……綺麗だけど……こういうのを狂い咲きっていうんでしょうね。これは、いい兆しなのか、不吉のしるしなのか……」

「この際、貴重な栄養資源で占いはやめましょ。花より団子だもん、この際、この花は食料としての団子としてながめちゃおう」

リラが、不安をうち払うように、自分に頷いた。

「だって、お花のめちゃ咲きにはちゃんと原因があるものね。わたしの相棒、携帯通信電算機



「今年は、いつになく花が沢山咲いているわ」フィラーレは花を摘みながら呟いた

ちゃんによれば……この、氷の地面の進行方向は南。気温がどんどん暖かくなってる。今まで寒くて芽生えができなかった花の種が、今年は解凍されて、咲いているだけ。原因のわかっているることで占いするのは、つまんないわ」

リラの言うように巨大な氷の浮き島は、南下を続けている。

そして、明らかに外気の温度が上昇していた。

「確かに面白くはない……このまま南にいくのはね」

フィレーナが呟いた。

見た目にはわずかだが、しかし、全体としては膨大な量の氷が、海に溶け出している。

遠くで、間断なく地鳴りが聞こえている。

外気と水温に耐え切れなくなった氷の崖が、絶えず崩れ落ちていく悲鳴だった。

「大丈夫。私の計算だと、赤道直下の炎天下にさらされ続けたとしてもこれだけの量の氷ですもの、十分一年はもつわ」

「一年か……仮に一年持ってそれからどうなる？……」

「どうなるって……行き場がなければ、足場が溶けて流れて、海にボッチャン……どざえもん……みんなでおぼれりゃ恐くない……てね」

リラは、肩をすくめた。

どんなに暗い話でも、無理せず楽に言ってしまうのが、リラらしさだ。

「行き場はないわけじゃない」

フィレーナは、そろそろ決めねばならないと思っていた。
生き残る可能性を求める道はどう考えてもひとつだった。
……やはり、帝国と戦うしかない……
陸地がそこにしかないのなら、帝国から奪いとってでもそこで生きるしかない。
それに、今の僕らは、波まかせで流されているにすぎない。
元の大陸に戻ってしまう可能性は十分ある。
そこがフィアイの土地のように僻地である保証はない。
最悪の場合、帝国軍事基地の目の前に漂着する危険性もある。
そうなれば、たちまち戦いが始まる。
帝国は超爆弾を持っている。
巨大な氷の島は、格好の標的になるだろう。
やられるのをみすみす待っている訳にはいかない。
やられる前にやるしかない。
こちらが帝国が出てこれない海にいる間に機会を窺い、こちらから仕掛けるしかない。
それしか生き残る道はないと、フィレーナは考えていた。
しかし、闘いを避けることをピッツ（生き方）としているフィアイの民に、戦いの同意をえられるだろうか……？
「これからの行き場……？」

フィラーレが、尋(たず)ねた。
「ああ……行き場はひとつだよ」
……帝国への反撃……それしかない……
フィレーナは、フィラーレに答えた。
フィラーレは、頷いた。
「そうかもしれません」
けれど、続いて呟いたフィラーレの言葉は、フィレーナの考えとはまるで違っていた。
「ドラゴニアがほんとうにあればいいのですけれど……」
「ドラゴニア……？」
フィレーナとリラは、フィラーレを見つめた。
「ええ……ドラゴニア。フィアイの民……いいえ、海洋民族全般に古くから伝わる幻の大陸の名です。南の果てに、われわれの住む大陸と同じ大きさの陸地がある。その、大陸をめざして多くの船乗りが船出したがだれも帰ってこなかった」
「ドラゴニア……か」
二人は氷の灯台に記された海図を思い浮かべた。
その海図には、確かに、南方洋上に巨大な大陸が描かれている。
「ドラゴニアね。海洋民族の言葉だと、新しい可能性ってな意味かな。でも……」
リラが携帯通信電算機の鍵盤(けんばん)を叩いた。

「帝国にはそんな記録も……名詞さえないわ……もっとも、フィレーナの故郷のフィロセラだって帝国の記録からは消されているけれどね」

「帝国はともかく、フィロセラの海図には……」

リラは首を振った。

「あの海図は伝説をそのまま描いたのかもしれないわ。

だって、フィロセラの資料にもドラゴニアの記録はまだ見つからないし、あの海図からだと、フィアイの土地からの距離もわからない。今のところ、私たちの氷の土地は南に向かっているけれど、この先、海の流れがどう変わるかもわからない。仮にドラゴニアが実際にあったとしてもわたしたちが辿り着ける保証はないわ。もっとも、まだ、解読していない資料は山ほど残っているから、新しいことがわかるかもしれないけれどね」

「もしも、そんな土地があったにしても……」

フィレーナはフィラーレに言った。

「いつ出会えるかわからないものに、期待はできないよ。それに今の僕らは、波まかせで流されているにすぎない」

「いいえ」

フィラーレは、首を振った。

「波まかせとはいいきれません。風を操って海を走る船をあなたは持っていますもの」

「一隻ではどうにもならないさ」

「一隻だけじゃありません。フィロセラの船はすべてあなたのものですわ。船は、目覚めさせてくれる勇者の来る日を待っていた。フィレーナ。あなたがその勇者のはずです」

確かに、氷の崖の中には、何百という船が、閉じ込められていた。

「でも、あの船は氷の中だ。凍って身動きできない」

「溶かせばいいじゃない」

リラがこともなげに言った。

「溶かす……？」

「氷は熱に弱い。これ、常識。現に南に向かっている今だって氷はどんどん溶けているわ」

リラはにっこりほほ笑んだ。

フィレーナは、肩を竦めた。

「ここで、焚き火でもしろっていうの……？　燃やす薪も燃料もない。だいいち、溶けきるまでどれぐらい待てっていうんだい？」

「たぶん解凍する方法があるにちがいないわ」

「真面目に言ってる？」

フィレーナはリラに聞き返した。

「もち……私、フィレーナの船を調べてみたわ。古風な帆船のように見えるけど、なかなかどうして、よくできているの。灯台の資料には、造船技術の記録もあってね。どうやら、あの船はフィロセラで、最新の造船技術が使われているらしいの」

「最新といったって、フィロセラが滅びたのは二十年以上も前のことだよ」
「海の嫌いな帝国には、碌な造船技術なんてないと思う。だから、二十年前の技術でも、船としては最新だっていえるわ」
「風の力で走るだけの帆かけ船の、どこが最新だっていうんだい？」
リラは、人差し指をフィレーナの目の前につったてて首を振って、偉そうに舌打ちした。
「甘い甘い。君はわかってないなあ……覚えていないかな。氷山の中のあの船が、フィアイの土地まで流れてきたときのこと……最初、上下逆さまで、船底が上を向いてた。それが、氷が溶けてくると、あっというまに、帆柱を上にして元の姿勢に戻ったでしょう」
「ああ……きれいに宙がえりしたね」
「ただの船がそんな芸をできると思う？　いくら、水に浮く軽い材料でできた船だからって、ひっくりがえったら、普通は沈没するわ」
「仕掛けがあるっていうの？」
「そういうこと……」
リラは携帯通信電算機の画面に、帆船の設計図を映し出した。
「あの船の船体には、もの凄く計算された空間がいくつもあるの。そして、その中に入っている空気が、船がいつも正しい姿勢を取れるようにバランスをとっているらしいの。あの船はどんな風が吹いても波をかぶっても沈まない。万が一、ひっくりかえってもすぐ元に戻るようにできているの。しかも、動力は、風と波の力、燃料はいらない。おまけに、記録によれば、あ

の船の材料は、材木や金属じゃなくて、水の中でも呼吸できる藻の種類で作られているんですって」
「藻……藻って、水の中にはえているあのへなへなの……」
藻に船体の材料になるほどの強度があるとは、とても思えなかった。
リラは肩を竦めた。
「それが、私もようわからんのよね。フィロセラの言葉ではフィウィ……海の杉っていう藻らしいんだけど……」
「海の藻が必ずしもへなへなとは限らないわ」
フィラーレがほほ笑んだ。
「海の中の藻は、ワカメや昆布だけじゃない。木よりも丈夫で長生きなものもあります」
リラが肩を竦めた。
「海の専門家、フィアイのフィラーレさんが言うんだからたぶん確かよね。ともかく、その藻、フィウィは、地上の材木のように水の中で腐ることもない。もともと海の中に住んでいるんだものね。要するに、あの船の船体は今でも海の中で生きているの」
リラは、灯台の資料が教えてくれた帆船の仕組みを話し続けた。
「歳をとって藻の一部が死ねば、その分だけ増殖する。植物だから、海中の二酸化炭素を吸って酸素を作る。汚れて酸欠状態になった海であっぷあっぷしている魚も集まってくる。だから、それを、釣って食べれば船の乗員は食料に困らない。あの船は、海がある限り、走り続けるこ

とができるってわけ。おそらく、氷の中に閉じ込められている大勢さんの船も、同じ仕組みになっていると思うわ。みなさん、燃料なしの自給自足でがんばろうっていうんだから、これが本当の原始力船よね」

「生きている船……あれがみんな……」

フィレーナは驚嘆ともいえる溜め息をついた。

「生きている船か……うん、うまい言い方」

リラは頷き返した。

「あの船は、ちょっと見は、原始的でも、人間が設計し造船するには、そうとう海を知っていて、海についての優れものの科学力のある人たちじゃなきゃできないはずなの。海の苦手な帝国が、こんな技術を持っているとは思えないし……」

「私たちにもあんな船を作れる力はありません」

フィラーレが、つけ加えた。

「たぶん、海で生きるフィロセラだからこそ、あんな船を作りだせたんだわ」

「でも、今は、凍りついて動かない」

リラは首を振った。

「凍りついいんたんじゃないわ。わざと凍りつかせたんだと思う。だって生ものを長期保存するには、冷凍するに限るもん。きっと、あの大勢さんの船はフィロセラの科学で凍らせて、自然の冷蔵庫、北の果てにしまわれていたのよ。そして、あんたのような帝国に逆らう勇者さんが

きて、氷を溶かしてくれる日を待っていた」
「僕は冷凍食品を解凍するような電子調理機なんか持っちゃいない。それとも、このまま南へ流れていって、太陽の光と熱で溶けるまで待っていろというのかい？」
フィレーナは、そう言って肩を竦めた。
「それもいいかも……でも、氷の半島が火山の噴火で切り離されて、暖かい南に下っていくなんてことまで、あの船を冷凍させた人たちは予測していたかしら」
フィラーレが、呟いた。
「あの火山を爆弾で噴火させたのは、じいさまだわ」
「でも、それは、帝国が襲ってきたからでしょう？　何十年も前に、船を作って凍らせた人たちが、フィレーナの到着と、帝国の襲撃と、爆弾による火山の噴火、その他もろもろが同時期に起きるなんてことを、予想できるかしら。あの船を作れる科学力のある人たちが、そんな未来に起こる偶然(ぐうぜん)の重なりあいを、期待するとは思えないわ」
「何をいいたいんだい」
フィレーナは、リラに聞いた。
「別に南に行って暖かくなる気温に頼らなくても、氷を溶かす方法があるんじゃないかってこと。北の果ての寒い土地にいても、あの船団を海に浮かばせる方法があるはずだと思うの。だいいち、解凍法もなしで、凍らせるなんて、そんな無責任なこと、普通する……？」
リラは、幾重にも重なる虹の向こう、燦々(さんさん)と降り注ぐ太陽の光を見上げた。

「何か方法があるはずなのよ。北の果て、寒くて太陽の光の弱い、あの土地でも、凍った船を溶かすやり方が」
　リラは、にっこりと笑った。
「探しだすわ。灯台の資料は、まだ、山ほど残っているもの」
　そして、言葉どおり、リラは不眠不休で、資料の解読を続けた。

＊

　首都ボーから、帝国の僻地、南部海岸地方までの幹線道路ぞいには、幾つもの都市がある。
　だが、どの都市も、実情は首都ボーの混乱と大差なかった。
　ほとんどが、壊滅状態だった。
　反乱軍と帝国軍の戦闘に暴徒化した民衆が加わり、敵も味方もなく掠奪暴行を繰り返していた。
　首都ボーとの違いといえば、大地を根こそぎ焦土にしてしまう超爆弾や、瞬時にして特定の人種を消滅させる新爆弾が使用されていないだけだった。
　そんな中を、夢遊病者のようにおぼつかない歩みで、南に向かっていく一団がいた。
　首都ボーで生き残った心理更正病院の患者たちだった。
　患者たちを連れたネストの目的地は、「狼のフィレーナ」軍が帝国からもぎ取り、勢力下においている南部海岸地方だった。
　他の大規模な反乱軍が、勢力争いや帝国軍との戦いに疲れ果てて共だおれになっていくうち

にいつの間にか「狼のフィレーナ」軍は、帝国の大陸で最大の反乱組織になっていた。
それでも、「狼のフィレーナ」軍は、一歩も南部海岸地方から動かなかった。
「フィレーナ」軍は、帝国の集中攻撃を避けるため、兵力を相変わらず分散させていた。
反乱組織全軍の頂点に立つために、他の反乱軍との勢力争いをすることも避けていた。
地理的に帝国の僻地にあり、首都攻略にやっきとなる他の反乱軍のとおり道から外れているのも幸いしていた。
他民族同士や帝国住民との間にこぜりあいはあったが、それは、他地域の反乱軍内で起きたことに較べれば、取るに足らぬ規模だった。
今、現在、南部海岸地方は帝国内で最も平静で安定した地域と言えた。
身を守る術はおろか、食物を探す能力もない心理更正病院の患者が、平穏に過ごせるのは、帝国中を探しても南部海岸地方しかなかった。
テスの意見も同じだった。
「たぶん帝国皇帝種は、今のうちは、帝国軍に『狼のフィレーナ』への攻撃はさせないはずです。少なくとも、フィレーナが代表する種に、人類を継ぐ可能性が残されている限りはフィレーナの勢力を弱める真似はしないと思うんです。おそらく皇帝種は、フィレーナたち、旧人類に可能性があるなら、自らの手で帝国人を絶滅させてもかまわないとすら思っている。それほど、彼らは、人類の存続を望んでいるに違いありません」
「フィレーナに人類を継ぐ資格があるかどうか……決着をつけるのはそう遠くない。この星

には、まだまだ人間が多すぎる」
テスは頷く。
「ええ、帝国人かフィレーナたち異人種か、それとも他の何かか……どれかに決断し、他を整理しなければ、共だおれになる。少なくとも皇帝種はそう思っています」
ネストは肩を竦め、そして吐き捨てるように言った。
「そうまでして存続すべきなのか……人類という生き物は……」
「皇帝種は、優秀種以下の帝国人を存続に不用なものとして切り捨てることにしたようです。でなければ、首都であんな兵器を使いはしない……」
「そして、優秀種もいずれいらなくなるわけだ。やがて新しいのが生まれりゃ最優秀種もお払い箱になる」
ラズルが呻くように言った。
ラズルはネストとテスから、二人の知りうるすべてを聞いた。
それはラズルが今まで生きてきたすべての価値と自己の存在を崩壊させるに十分だった。
ラズルは最優秀種に、今一歩でなれなかった男だ。
それだからこそ、人一倍、種の違いを意識していた。
ラズルには最優秀への劣等感と同時に、少なくとも帝国の他の優秀種よりは最優秀に近いという優越感もあった。
種に対する劣等感と優越感が、複雑に入り混じってラズルの人生を形作っていた。……そし

て、自らの存在の意味を、最優秀種の子供を作る可能性にすがろうとした。
だが、それが女の一蹴りでその能力を失った。
帝国での野心も希望も喪失し、なかば自棄になって、帝国人でありながら反乱軍の頭目になった。
それもまた、種を意識するラズルの、反抗というかたちで、帝国の種に対する自己存在を、感じていたかったからだ。
ラズルの生きざまは、種への意識から一時も離れたことはなかった。
それをラズル自身も最近、自覚してもいた。
だが、敵対しようとした帝国の最高であるはずの最優秀種さえ、人類生存のための進化の過程で作り出された中途半端な過程の種にすぎないとしたら、そんな種にこだわり生きてきた自分の人生とはなんだったのか……。
子供をつくれぬことを知ったときは、泣き笑いでごまかせたが、今度ばかりは涙どころか苦笑すら漏れなかった。
……いったい、おれは、何を生きるためにこの世に生まれてきたのか……少なくとも、人類存続のための実験道具として生まれてきたつもりはない……おれは、今まで何を生きてきたんだ。
テスは、ラズルに言った。
「おっしゃるように皇帝種が、帝国人種の進化が存続にとって無意味と判断すれば、帝国の種

をこの星から消すでしょう。この星は無駄な種をおいておける余裕はない……帝国は人類の存続を最大の目的としてつくられた国家です。でも、あの人たちは今、生きている生命の尊厳を忘れている。生まれてきた生命はどんな種であれ、生きるべきことを忘れている」

口調は静かだったが、猫のような目にはやりきれない怒りがあった。

……帝国は生命の尊厳を忘れている……？

この女は本気でそれを怒り悲しんでいる。

ラズルは生命の尊厳などという言葉は忘れるどころか考えたこともなかった。

ラズルがいつも考えていたのは種の優劣でしかなかった。

だから、ラズルは、そんなテスの目が眩しかった。

「先はともかく、とりあえず今を、われわれが生きるとしたら……南部海岸地方に行くしかなさそうだ」

ネストが言った。

そして、いまさらながらに呟いた。

「『狼のフィレーナ』……あのフィレーナのいるところか……」

ネストは、フィレーナが「狼のフィレーナ」の指導者の座をオルカたちに預けて、北に向かったことは知らない。

ネストにとって、南部海岸地方に行くことは、二度と会うことはあるまいと思っていたフィレーナと、再会するかもしれない可能性があるということだった。

テスは、少しだけうつむいて言った。

「余程、ネストさんはフィレーナって人と縁があるんですね」

「だが、南部海岸地方まで辿りつけるかどうかが問題だ」

患者の一団の中で、人並みの判断力のあるのは、二人の他にはラズルしかいない。

たった三人で患者たちを率いて、戦場と化した南部海岸地方までの道のりを行けるかどうかわからなかった。

ラズルが言った。

「問題があろうとなかろうと行くしかなければ行くしかないのだろう。やることがあるというのは、ありがたいもんだ。暇つぶしにはなる」

ラズルは、一行の先頭に立って歩き始めた。

何かをしていなければ、自分の存在が消えてしまいそうだった。

*

デビス中部高原地方ジャンガー。

連なる山脈の奥……おそらくこの星でもっとも空に近い盆地に、三つの月の光に浮かび上がる巨大な硝子の城塞があった。

その様相は、かつて南部海岸地方にあって、新爆弾によって無人の街と化した要塞都市デビに似ていた。

大きさは二分の一ほどで、デビのようなぎょうぎょうしさはない。

だが、月の光を見事に反射する硝子の壁面は磨きすまされ、デビと較べてはるかに硝子自体の完成度は高かった。
それだけに、硝子のするどさが強調され、周囲の山脈に突きささる刃のような凄みがあった。
城に名はなかった。
名など必要なかった。
そこに住むのは最優秀種の帝国人だけだった。
帝国で生まれた最優秀種は、親元から離されるとすべてがこの城に集められ隔離された。
その硝子の城だけが、彼らの全世界だ。
あえて呼ぶべき名が必要だとすれば、帝国の中枢という漠然とした名で十分だった。
首都からジャンガーのこの城までの道のりを、最優秀以下の帝国人で知っているものはいなかった。
彼らをここに連れてくる帝国の優秀種の役人たちは、そのたびに洗脳され、往路に城の位置を教えられ、帰路はその記憶を失って戻っていく。
彼らは、最優秀種を遠く中部高原地方のジャンガーまで運びながら、首都の各病院まで送り届けたとしか思っていない。
帝国人のだれもが、帝国上層部の中枢は首都のどこかにあると信じていた。
だが、現実に首都にいたのは帝国の最高上層部である七人の皇帝種だけだった。
城は水も空気も食料も自給自足で作られ、最優秀種は上級の皇帝種として選ばれない限り、

この城から出ることはなかった。
外部とは首都の皇帝種とだけ、通信回線によってつながっていた。
彼らは帝国の内政とも、関わりは持たなかった。
最優秀種の存在する目的は、自分以上の進化した形の種を生み出すこと……存続できる人類を作り出すことの一点だった。
そのために自身の体を実験に使い、生命を落とすこともいとわなかった。
そして、そんな考えを持つ、自分たちに疑問すらいだかなかった。
生命は存続を望む。
人類もまた生命である。
だが、この星は、このままでは人類の存続を許してくれない。
星の環境を保護するかまたは変化させて、人類を存続させる方法は、人口が爆発的な増加をし環境を汚染しつくしたこの時代では、もう手遅れだ。
ならば、人間が存続可能な種に進化するしかないではないか。
人類はどんなことがあろうと滅亡を望まない。
どんな人間も人類の存続に反対しはしない。
そして、今、人類にとって最大の問題は、存続か滅亡かなのだ。
かつてこの星を席捲した恐竜のように絶滅してはならない。
そのために最大限の努力をする。

これほど単純明快で、疑問の挟(はさ)みようのない目的はなかった。
帝国はけっして、特定の民族や、国や、利害の共通する集団や、宗教……を存続させようとしているのではない。
種の存続のための選択に、帝国は、民族的な差を持ち込むつもりはない。
この星の、今の環境に存続できる民族人種ならば、なんでもよかった。
だが、存続するに足る決定的な要素を持つ民族も人間も見当たらなかった。
人類が農耕を始め、富というものが生まれ、それを奪いあう戦いが始まってから今まで……どんな民族も、やることは、その膚(はだ)の色ほども違いはなかった。
世界の歴史を見れば、どんな民族も、興亡を同じように繰り返す。
だが、今の時代、それぞれの民族の興亡は、科学技術の発達と人口増加と環境破壊で、その民族はおろか、この星全ての人類の滅亡に関わってくる。
そして、帝国は判断した。
人類の存続を安心してまかせられる民族も人種もいないのなら、作り出すしかない。
帝国は種の進化によって、存続を図ろうとした。
種の進化によって存続するに足る人類を作り出そうとしたのだ。
それが、帝国人種のはずだった。
その意識は過去の歴史にある、わが民族こそ選ばれた優れた民族であるという民族主義とはかなり違っていた。

種の存続のために、帝国は民族的な差を持ち込むつもりはなかった。
生き残れる種であればよかった。
そして、人類の生き残りの妨げになる種は、消えてもらうしかない。
その割り切りには、確かに、過去に祭り上げられた人道主義的な生命尊重はない。
耳に優しく、手前勝手な人道主義こそが、人類を異常に増大させ、今、人類を滅亡の縁にまで追いつめた元凶のひとつだと、帝国は冷徹に判断していた。
最優秀、優秀……帝国は種にあたかも優劣のある呼び名をつけているが、そこにあるのは、過去にある民族的、職業的、性的な差別ではなかった。
ひとえに、生存できる種への進化の過程の呼び名にすぎなかった。
だが、この星の急速な汚染に進化はついていけない。
星の自浄作用も期待できそうにない。
帝国は判断した。
この星で人類が生き残れないなら、別の天体にいってでも存続すべきだ。
この星でなくても存続できる人種を作り出す。
かつて、空に浮かぶ人工の月で失敗した人類の宇宙進出を可能にする人種……それが、帝国の種の進化の目標になった。
彼らの存続への指向性と種の進化への欲求はそこまで進んでいた。
しかし、夾雑物のない宇宙での適性と、この星の上での適性は矛盾もあった。

どんなに進化を調整しようとしても、この星への適応性が柔軟でなくなっている。明快に現れるのは、空気や水にふくまれている不純物への拒絶反応だった。
もともと、この星の上では不純物のない空気や水はなかった。
それが、さらに汚染されている。
不純物と不純物がまじり、さらに複雑な汚染をつくりだす。
帝国人は種が進化するたびに、汚染への抵抗力が低くなっていく。
帝国人は知力も体力も優れているが、体質がもろくなっていたのだ。
だが、一度始めた進化への方向は、止めることができなかった。
生物は進化の程度が高くなればなるほど、さらに高度の進化を望むもののようだ。
人類を存続させるため、種を高めようと言う意識はたかまるばかりだった。
帝国において最高の段階である最優秀種が、種の進化を目指し全力を費やすのも当然のことだった。
種の進化は、彼らの献身的努力でますます早まっていった。
だが、優秀種のさらに上の段階……帝国の指導者、皇帝種たちは、その延長にいながら、根本的な疑問にぶつかっていた。
こんなふうにして作られた進化種が、はたして人類と呼べるのだろうか。
いくら汚染されたとはいえ、生命にはその地で生きようとする、なにがしかの適応力があっていい。

その適応力がどんどん失われていくことが、進化なのか……。

仮に宇宙で適応できても、故郷である母星で生きられない人種が人類と呼べるのか？……

そして、進化と同時に認められる性格の変化……闘技試合という名の殺し合いを最上の娯楽の一つにする暴力への過度な嗜好……芸術や美術に対する情緒の画一化と、明らかな感性の低下。

かつては原始人の洞窟の壁画にすら見られた美的創造力が、帝国人には消えている。

皇帝種自身、過去の芸術美術の一級品を見ても、添えられた解説書に書かれた理屈でしかその美を理解できない。

頭で理解できても、感性で素晴らしいと感じたことはない。

帝国の目指す進化は、人間という生物が持つ何かを確かに喪失させていた。

この進化は人類の進化と呼べるのだろうか……。

現在、帝国が望みうる最高の進化種である皇帝種自身が、人類としての自分の存在に、疑いを持ち始めたのだ。

そして、今の皇帝種の三代前から、皇帝種の間で、密かに種の見直しをすることが決められた。

これこそが、数ある帝国機密の中で、中部高原地方ジャンガーの硝子の城の中の最優秀種さえ知らない、最大の機密だった。

最優秀種は、今も帝国人の進化を信じ、皇帝種のさらなる進化形……超皇帝種を完成させよ

うとしている。

だが、皇帝種の見直しの結果によっては、最悪の場合、デビス帝国のもくろんだ人類の進化は間違っていたということにもなりかねない。

それは、そもそも人類を存続させるために作られた帝国と帝国人の成立自体を否定することだった。

この世に生まれてきた帝国人のすべてが、人類にとって無駄な実験にすぎなくなってしまう。

それでも、皇帝種は、見直す事を決断した。

帝国の成立と帝国人を否定しても、人類を存続させると言う目的だけは、成し遂げようとしたのだ。

人類を残すためなら、どんな種であろうと問わない。

帝国人の進化以外に、存続を模索すべきではないか。

だが、その決断は、かなり遅すぎた。

環境の破壊は加速度的に進み、この星に許容できる人口が極端に減っていったために、帝国は不用と思われる種族を征服と言う名で処分し過ぎていた。

見直すに足りるだけの十分な他人種も、時間も残っているとはいえなかった。

しかも、急速に人口の削減を続けなければ、すべての人類に絶滅の危機が迫っていた。

人類が存続するか絶滅するかの瀬戸際がいまだと言えた。

「こんな時期に、皇帝種に生まれなければならないとは……」

首都ボーから撤退し、硝子の城に入った七人皇帝種の一人が、思わず呟いた。
「いちおうやるだけのことはやっているのです。だれが人類を継ぐか……それが帝国人種だとしても、少なくとも私たち、皇帝種の任ではない。次の超皇帝種の役目です。それだけが気休めといえば気休めですかね」
もう一人が言った。
「気休めね……」
「だれが継ごうと、人類の存続は容易ではない。私は、進化の過程での存在で結構です。次に託すその選択だけは間違いたくはないのですがね」
最年少の皇帝種が言った。
「すでに間違えたかもしれません」
両性の皇帝種が、言った。
「今のわれわれには、超皇帝種か、反乱軍の娘フィレーナか、それとも、超皇帝種並に急速育成させた実験用の奴隷の子供か……今は、こんなものしか札が残っていない」
「不用意に札を抹殺していったのは、われわれの責任ではない。責任があるとしたら帝国を作りだし動かしてきた私たちの先祖です」
「だが、どんな札が残っていようと、この期に及んで勝ち負けは、私たちの責任でしょう。配られた持ち札に文句を言っては勝負とはいえません。結果はどうあれ、どの札を残して最後の勝負をするかですわ」

女の皇帝種が言った。

「あなたに言わせると、人類の存続はまるで博打遊戯のようだね」

最年長の皇帝種が言った。

「そうとでも思わなければ耐えられますか？　負ければ人類のすべてが滅亡するのですよ」

もう一人の女が、無表情に言った。

「ところで当てにならない隠し札は、どうなるのかな」

最年少の皇帝種が言った。

「特殊変形優秀種……帝国人の先祖返りのことですね」

それはネストやテス、そして心理更正病院の患者たちのことだった。

「心理更正病院の外にでたら、結果は目に見えています。彼らは病院の中にいてこそ、われわれの参考資料として価値があった。優秀種は帝国の進化の過程にすぎません。進化の方向が正しかろうが間違っていようが始まった進化は止められません。先祖返りは、しょせん、種の郷愁にすぎませんわ」

女の皇帝種は沈んだ声で言った。

「隠し札にはなりそうもない」

両性の皇帝種が肩を竦めた。

「結果はもう出ているころです」

女がそう答えると、最年長の皇帝種がぽつりと呟いた。

「なにもかも結果はもうすぐだ」

*

数か月後……。

南部海岸地方の見通しのいい街道の真ん中を、浮浪者風の三人が南の方角へ歩いていた。

かつては、南部海岸地方の街と首都を繋ぐ唯一の幹線道路として、僻地のこの地方では最も交通量の多い道だったが、今は、壊された車両が所々に転がっているだけで、全く人影はなかった。

無理もない。

反乱軍と帝国軍、そして掠奪暴徒が入り混じる混乱の時に、目立ちやすい幹線道路を歩く人間がいるはずがなかった。

いつだれから狙い撃ちされるかわからない、的になるようなものだったからだ。

だが、三人は、そんなことを気にする様子もなく歩き続けていた。

最も、三人のうす汚れた格好を見れば、わざわざ、狙って襲いかかったところで、なんの得にもなりそうもないことも確かだった。

三人は、なにもしゃべらず、ひたすら歩を進めた。

だが、その重い足取りは、かなり疲れていることを物語っていた。

いきなり白熱光線が、三人の足元で炸裂した。

三人はたいして慌てる様子もなく、足を止めた。

ひっくりかえった車両の陰から拡声機の声が聞こえた。

「動くな。ここは、『狼のフィレーナ』の領域だ。立ち去らなければ、生命の保証はない」

三人の一人がいきなり剣を出し、地面につき立て叫んだ。

「武器は捨てる。狼のフィレーナにお取り次ぎ願いたい。私は首都反乱軍ボーのフィレーナだ。狼のフィレーナにおめどおり願いたい」

その男はラズルだった。

残りの二人はネストとテスだ。

拡声機が答える。

「三人だけか？……」

テスは、首を振った。

三人だけのつもりはなかったからだ。

だが、現実は三人だけだった。

＊

テスの患者はだれも残らなかった。

心理更正病院で、十万年前の空気に慣れていた患者たちには、病院の外の空気は汚れ過ぎていた。

しかも、彼らは環境に対する適応性の衰えた優秀種の体だった。

心理障害者の彼らは病気になっても身を守ろうという意識がない。

心理更正病院での体操のように、深呼吸を止めず、次々に倒れていく。
そうでないものもテスがいくら止めても、汚れ腐った食物を幾度（いくど）も口にやりそのたびに中毒を起こし衰弱（すいじゃく）していった。
さらに暴徒に襲われても逃げようとしない。
帝国軍と反乱軍の戦いに巻き込まれても、ただ呆然と立ち竦（すく）んでいる。
ネストとラズルが、いくら腕に自信があっても守り切れるものではなかった。
患者たちは次々と倒れ、ついに最後の患者も、一か月前に息を引き取った。
テスは、必死だったし、彼らへの看護が間違っていたわけでもなかった。
やれるだけのことはやり、結果として救えないものは救えなかった。
テスは無力だったが、それでも負けてはいなかった。
気丈（きじょう）に一人一人の手を握り締め、一度も涙を見せず、一人一人の最期を見とった。
「大丈夫です。がんばって……」
その言葉とほほ笑みを絶やさなかった。
そんなテスの後姿にネストもラズルも何も言えなかった。
彼女をなぐさめることすら軽薄に思えた。
まして、だれの目にも死が明らかな患者を、あきらめろとは言えなかった。
ただテスを見守ることしかできなかった。
そして、テスを危険から守ることだけはやりとげようと思った。

最後の患者が息を引き取ったとき、テスは、初めて泣いた。

テスの看護の担当は心理病であり、患者が直接生命に関わる病気や怪我(けが)をすることは少なかった。

いや、それは、テスのいた帝国人民心理更正病院に限らない。

帝国の一般病院はどこでも、医学によって助からないと判断された患者は、すみやかに、処理する。

病院は治る可能性のある患者のためにあり、可能性のない患者は、葬儀院(そうぎいん)の範疇(はんちゅう)だった。

だから、医者さえも、直接患者の臨終に立ち会うことはほとんどなかった。

テスにしても、患者の死と向かい合ったのは初めてだった。

それも、大勢の患者の死……誰(だれ)一人救うことができなかった。

手のほどこしようのない患者を看護していくせつなさ。悲しさ。悔(くや)しさ。やるせなさ。

患者の手のぬくもりがしだいに消えていくそのあっけなくも峻厳(しゅんげん)な時。

生命の消滅のいとおしさ。

すべてが身体中(からだじゅう)を駆け抜け、涙になって吹き出してきた。

だが、患者をどうすることもできなかった自分に、テスはうちのめされてはいなかった。

テスは、一日泣き続けてから泣くのを止めた。

そして唇(くちびる)を噛(か)みしめて、自分自身に何度も頷(うなず)いた。

……わたしは、生きている限り、看護をやめない……

それまでどんなに真剣にむきあおうとしてもどこか、頭の中の理屈で考えていた、生命の尊厳という意味……傷つき弱っていく生命を看護することの価値……今まで観念の中で生きていた自分の信念に血が通ったような気がした。

だれも救えなかった。これからも誰一人、救えないかもしれない。

だが、病人を看護するという、今はもうだれもやりたがらない仕事……いや、生き方を、自分自身が選んで、けっして悔いは残さない確信ができていた。

テスは呟いた。

「今は、私たち、三人だけになってしまった。……でも、いつか、救うわ。だれかを、わたしの看護で……」

＊

三人を足止めした車両の陰の拡声機がもう一度聞いた。

「本当に三人だけなんだろうな」

車両の陰の拡声機が、もう一度聞いた。

ラズルは、苦笑して答えた。

「そんなことは、すでにそちらの探知機が調べ上げているはずだ。この剣の他に武器のないことも知っているはずだ。隠れていずにでてきてほしい。重要な情報がある」

車両の向こうでは何事か相談しているらしく、しばらく拡声機から声が聞こえなかった。

やがて、剣を握りしめた男たちがぞろぞろと現れ三人を取り囲んだ。

男たちのひとりが、じろじろと三人を嘗(な)めまわすように見てから言った。
「フィレーナって名は、山ほどいるんでね。どこの馬の骨だかわかったもんじゃない」
ネストが答えた。
「ならば、そちらのフィレーナに必ず伝言してくれ。反乱情報誌フィエーブのネスト……いや、ドラの闘技作家(バトルライター)ネストが来て、おまえの妻のリラはおまえに会いに来たかと、聞いているとな……」
いきなり、男の胸元から声がした。
「ネストと言ったね」
男は、あわてて胸元から携帯通信機(トランシーバー)を出した。
声は通信機から出ていた。
「私の名はナスカ……狼のフィレーナの参謀(さんぼう)の一人だ。闘技作家としての名は聞いている。だが、その名の作家は何年も前にドラで死んだはずだが……」
ネストはふっと笑った。
「死んだのさ。しかし、死んだのは最近だ。それもボーでね。それを知っているのはリラだけのはずだが……リラがいるなら、ネストはあんまり酒臭いんで柩(ひつぎ)から追い出されて生きかえったといってくれ」
「なるほどね。そういうことなら、フィレーナの前にとりあえず私に会ってもらおうか。あんたには、個人的にも興味がある」

通信機の向こうでナスカが言った。
「わたしはあんたを知らんがね」
ネストが答える。
「そりゃそうだ。私は南部海岸地方のしがない闘技評論家（バトルクリティック）だったことがあってね。北の田舎街（いなかまち）だが、ドラの演出家と作家がえらく気になったことがあった」
ネストは苦笑した。
地方闘技専門紙で妙につっかかってくる批評を書く男を思い出したのだ。
「あんた確かナスカといったね。よくもその節は悪口を書いてくれたね」
「あれを読んでくれたのかね。わたしは見込みがあると思わなきゃ酷評（こくひょう）は書かない。何年も昔のことをよく覚えているね」
「田舎の評論でも、悪口は忘れんよ。特に鋭い悪口はね」
「光栄だ」
それから、ナスカの声は、男たちに命じた。
「たぶん、その三人は『狼のフィレーナ』の大切な客だ。こちらにお連れしてくれ」
三人は、「ナスカ」の野営地に案内された。
ナスカは、三人の事情を聴取してから、にこやかに言った。
「どうやら、あんたたちの素性は信じていいようだ」
そして、ラズルを見つめ肩を竦めた。

「しかし、ボーのフィレーナがあんたかね……帝国の優秀種まで、反乱軍の指導者になっちまう時代か……」

その口調に、皮肉は感じられなかった。

「種の差をうんぬんするような集団なのか？　『狼のフィレーナ』は」

ラズルの口調は、いささか皮肉を込めて聞いた。

ナスカは、こともなげに答えた。

「こんなにぐちゃぐちゃになってしまった今の時代……帝国人も、奴隷(クレチア)も、異民族もない。いるのは生き残れる人間と、生き残れない人間の二つだけだ。……『狼のフィレーナ』が生き残るためには、優秀な闘技作家も、反乱軍の指導者をやれる帝国人も必要かもしれない……」

それから、テスを見て首をかしげた。

「心理病理観察看護……？　何だそれは……」

ネストが言った。

「心理病はともかくとして、病人や怪我人(けがにん)を看護する仕事だ」

「軍医のようなものか」

ネストは、首を振った。

「看護には敵も味方も。生き残れる人間も残れない人間もない。ともかく傷ついた人間や病んだ人間を救おうとする」

ナスカは肩を竦めた。

「そいつは強いな。どちらにも通用するわけだ。ま……、美しい女性は、いるだけでなんにでも通用するがな」

ナスカは軽くテスに片目をつぶって見せた。

「彼女は、それだけの女じゃない」

ラズルが語気強く言った。

ナスカは、むきになるな……とでもいいたげにいなした。

「あ……冗談だよ」

だが、笑っていないネストの顔を見ると、真顔になった。

「失礼した。あなたたちがそこまでいうなら、この女性には、それなりの能力があるのだろう。きっと、他の、参謀も会いたがるはずだ」

ネストが言った。

「だれより先にフィレーナとリラに会いたいのだが」

ナスカは、ふっと息をはいた。

「会えるさ。たぶん……きっとな……わたしもそれを願っている」

やがて、三人は、ナスカの紹介で「狼のフィレーナ」の他の参謀、鯱のオルカとパンニルに会った。

種の進化に関する帝国機密も、新爆弾らしきものの存在も、もはや隠すべきものは何もなかった。

それを聞いた策士バンニルは、「狼のフィレーナ」軍の今後の方針を決めた。
……今まで通り、「狼のフィレーナ」は南部海岸地方から動かない……
……帝国上層が、「フィレーナ」に人類存続に関しての何かを期待しているなら、少なくともその間は、南部海岸地方を攻撃することはないだろう……
……だが、参謀である彼らが下手に動き、それが帝国上層を刺激し、「フィレーナ」に対して失望すれば、帝国の切り札、新爆弾が飛んでくる危険性がある……
次に「狼のフィレーナ」軍がどう動くべきか、それは、フィレーナの帰還を待つしかなかった。
いつ戻ってくるのか、生存すら定かではないフィレーナを待つ。
だが、帝国が何かを期待して、フィレーナをこれまで生かしてきたのなら、「狼のフィレーナ」軍も、フィレーナに期待するだけだ。
その日がいつ来るのか……。
少なくとも、世界の状況をみれば、帝国の待てる時間がそう残されていないことは確かだった。
この星に生存できる人間の許容数はどん減っている。
フィレーナになんの期待があるにせよ、いずれ南部海岸地方の反乱軍が人口削減の対象にならざるをえない日が来る。
その日までに、フィレーナは現れるのか？

ともかく、今は待つしかなかった。

第2章

艦隊は蘇（よみがえ）るか？

今日もまた、海辺から空気を震わせる轟音が響いてくる。
波打ち際の氷壁が崩れ落ちる音だ。
大洋を漂う氷の島は絶えず溶けていた。
それでも、島全体の大きさは、まだ十分の一も減っていなかった。
帝国の通信網から漏れる帝国領土の荒廃は、氷の島の、フィレーナたちにも、届いていた。
だが、何が起こっていようが動きようがなかった。
ただ、ひたすら、海の流れに身を任すしかなかった。
リラは、その間、灯台の書庫にこもりっきりだった。
氷の島は南下して気温が上昇しているはずなのに、氷の洞窟の中は、薄暗く、息が凍りつくかと思うほど寒かった。
リラは、ありったけの防寒具で身をかため、だるまのような格好で、記録の解読を続けていた。
すでに、ほとんどの資料は解読済みだった。

しかし、今までのところ、凍った船の解凍法はどこにも書かれていない。
解読の進み具合を聞きに来たフィレーナに、リラは肩を竦めて言った。
「簡単にみつかる棚の記録に解凍法がないっていうのは、たぶん、ここが帝国に見つかったときの用心だと思う。……ってことはさ……。凍った船の中には、ここの資料にはないもっと重要な物があるかもしれないって、期待、どんどんだよね。けど、氷もどんどん溶けていく。あ～ららってなもん」
「いよいよ、自然解凍を待つしかないか？」
フィレーナがリラに聞いた。
「そりゃ駄目。なんたってあの船はなま物……しかもどでかい。小さな冷凍肉じゃないんだから、暑いところでのんびり溶かしてたら、端からくさっちゃうよ。やるんだったら、一気に解凍しなきゃ」
そして、溜め息をつく。
「解凍法ってたぶんそう難しい方法じゃないはずなのに……くやしいなあ……」
「解凍法が見つからないのに、なぜそれが簡単だとわかるんだい？」
「だって、このあたりには溶かすためらしい機械は見つからない。このあたりに住んでいるのは、原始的な生活のフィアイの人たち……おまけに、氷を溶かしてくれる伝説の勇者フィレーナさんは、これだもん」
「これだもんってなんだよ」

「難しい方法だったら、あんたにできっこないじゃない」
フィレーナはこけた。
「そりゃ確かに、僕は難しい科学はわからない。自慢じゃないが、リラの持っている計算機の仕組みもわかりゃしない。だけど、船を凍らした人が、僕みたいな、しかも女の僕が……」
「女であることが、難しい科学がわからないと同意語であるというのは、ちと偏見。私を見なさい。難しいのがだいじょーぶ少女もおるのだ」
「口が減らないのは、女と同意語か……」
フィレーナは勝ち目のなさそうな逆襲を呟いてから真顔になった。
「ともかく、船を凍らした人たちが、僕のような人間がフィレーナとして現れると予想したわけじゃないだろう」
リラはあっさりと言った。
「予想しているわよ……大なり小なりフィレーナは、あんたみたいな人だってことはね」
「あん……？」
「いい、フィレーナは、フィロセラの後継ぎでしょう？　指導者でしょう？　しかも、勇者でしょう。予定としちゃ帝国と戦える人でしょう？　そんな人は緻密で科学的な頭は、期待されちゃいないわ」
「そいつはありがとう」
「あなたに求められているのは学者じゃなく勇者……それは合格。だからこそ、船の解凍は、

簡単にできなきゃ困るのよ。どこかに簡単な手掛かりがあるはずだわ。あ〜あ」

　リラはもう一度、大きな溜(た)め息をついた。

「こんなことなら、推理小説をもっと読んでおきゃよかったわ」

「推理小説？」

「接待用奴隷(エンターテインメントクレチア)の科目にあったの。本を読まないで犯人を知りたがる人って多いでしょ。そんな帝国人(エンパイアラー)には、推理小説の結末を知ってる奴隷(クレチア)って需要(じゅよう)があるのよ。でもね、わたし、いつだれに殺されるかわかんない奴隷(クレチア)じゃない。殺しの犯人さがししたって文句もいえない生活してて、なにが推理小説よ……ってんでいいかげんにやっちゃったんだ」

　そして、しみじみと言った。

「やっぱり、勉強はしないより、やっといたほうがいいわ。きっと、簡単に解ける答があるはずなのよ。簡単に解けなきゃ解凍じゃない。なんて……だじゃれじゃ、謎(なぞ)も氷も溶けやしないか……」

　ふーっ……今度はフィレーナが溜(た)め息をついた。

「難しい顔はしてないで……」

　フィラーレがそう言いながら、花束を抱えて資料庫に入ってきた。

「明日はソレーナのお祭り。元気を出して……」

「ソレーナ……？」

　フィレーナが聞いた。

「太陽のお祭り……明日は、太陽が一年で一番空高く昇る日……帝国語では夏至っていったかな」

「夏至って昼が一番長い日ね」

リラが聞いた。

「南の土地ではね。私たちフィアイの土地は北の果て、夏は、白夜で一日中明るい昼……だから、一日中、踊るの……花を撒き散らしてね。……でも、今年は、ずいぶん、南に来たみたいね。最近は夏なのに暗い夜がある。夜のあるソレーナの祭りって生まれて初めてだわ」

フィラーレが言った。

「フィアイの人たちには、夏至って、太陽が一番高く昇る日なのね」

リラは呟いた。

「ええ……特別の日」

フィラーレが何気なく言った。

「特別の日か……」

「さあ、こんなお日様の届かない寒い倉庫は飛び出して、明るい太陽の下でお祭りの準備をしましょう。そうしたら、元気になるし、いい考えも浮かんでくるわ」

「お日様が届かない……」

リラはフィラーレの台詞を繰りかえした。

確かにそうだった。

北辺の地で、この灯台を発見したときは、洞窟の天井の割れ目から、直射日光ではないにしろかなりの量の陽の光が差し込んできていた。
灯台は光を浴びて宝石のように輝いていた。
だが、今、天井の割れ目は、洞窟の外の明るさを、ぼんやりと内部に伝えるだけだ。
「太陽の光線の強いはずの南へこの島は流れているのに、なぜ……」
リラは呟いた。
「さあ、早く、みんなのところへいきましょう」
フィラーレが、ふたりを促した。
リラは頷いた。
「うん……でもその前に、ちょっと見ておきたいところがあるんだ」
リラは、上を指差した。
リラが指差した先……それは、洞窟の天井にある割れ目の場所だった。

＊

洞窟の外側から見た天井の割れ目は、島の中でひときわ高い丘の連なりの麓にあった。
そこは、まるで、隕石が落下した後のように窪地になっていた。
中央にたて穴が、ほぼ垂直に落ち込んでいた。
たて穴のあたりは、日の光を丘の頂きが遮って影ができていた。
「なるほどね」

リラは、頭上の太陽と、たて穴を見くらべ、したり顔で頷いた。
「洞窟が暗くて寒いわけがわかったわ」
リラはフィレーナとフィラーレに説明した。
「空の太陽のとおり道……たしか黄道っていうんだけど、その角度が、北の果てにいたところと違っているのよ。南に移動して太陽の角度が違っちゃったから、あの穴から日が差し込まなくなったんだわ。本当なら、お日様はもっと高いところにいるはずなのよ」
リラは、自分の言った言葉をもう一度繰り返した。
「もっと高いところ……あららら……するとだね」
リラはいきなり携帯通信電算機を開くと、鍵盤(けんばん)を叩(たた)きだした。
「そか……そか……なるほど……」
電算機の画面に、太陽の位置と、たて穴の図が現れた。
「もし、この島があのまま北のはずれにいたら……夏至の太陽はこの位置……。ほれほれ」
リラは、指の動きがもどかしそうに鍵盤を叩く。
画面の太陽が北辺の位置に仮想移動した。
「で……そのときの太陽光線は」
太陽光線を示す線が画面を走る。
たて穴の位置をすり抜けて、洞窟の中に入っていく。
そして、灯台の頭部の位置で止まった。

リラは、ぱちんと指を鳴らした。
「やったぜ。……やっぱりだわ、夏至の日、太陽は、あの穴を通して、灯台の鏡玉(レンズ)に直射日光を浴びせかけるはずだった。うひ……リラちゃん、えらい。うひひのひ」
リラは、頬(ほお)に両手をあてて、声をあげてほくそえんでみせた。
フィレーナが肩を竦めた。
「おめでとう。でも、一人でお喜びは……しらけちゃう」
「ごめん」
リラはぺろりと舌を出した。
「ではでは、お喜びのおすそわけ……いい。フィレーナが、ここまで辿(たど)りつけたのはなんのおかげだったっけ……そりゃ、いろいろあったけど、一番偉かったのは、海の希望(フィ・ホーパー)。灯台の光のお導きよね。文字通り、灯台が、フィレーナに希望を与えてくれた。でも、最近、めだった活躍の場がなかったじゃない。これじゃ、灯台さん。すねちゃうわよ。どう考えたって、役不足。でも、本当は大事な役目があったのよ。もしも、あのまま、北の果てにいたならね。灯台くんは、フィレーナに希望を差し示す。灯台さんはきっとそのつもりだったんだわ」
いささか、リラの得意な、強引な決めつけのような気もしないではない。
しかし、決めつけではあっても他に頼るものもない。
フィレーナは頷いた。
「確かに、僕は灯台にずいぶんはげまされ、導かれてきた。でも、こんどは、どんなことを教

えてくれるっていうんだ?」
「私たちが、いま欲しいのは船の解凍法。だれが考えたってそうのはず……。この仕組みを考えた人だってそう思うに決まっている……うん」
リラは、きっぱり決めつけて頷いた。
そして、ちょっと不安になったのか、付け加えた。
「もし船の解凍法じゃなくったって、それなりに重要なこと……教えてくれるに決まってます……よね?」
リラは、話しているうちに自信がなくなったのか、フィレーナの顔色を窺(うかが)ってしまった。
フィレーナは、頷いた。
「だね。きっとね」
フィレーナの答えで元気づいたリラは腕まくりをして言った。
「さあ、そうとなったら、善は急げ。フィレーナ、あなたが太陽をやって」
「太陽……?」
「ここは、もう北の果てじゃないわ。夏至になったって、太陽の光は灯台に届かない。あなたが、あの穴のそばにいって、太陽がわりのものを光らせてみて」
「光らせる?」
「いつも持ってる。光もの」
リラは、フィレーナの腰の剣を指差した。

「光線のエネルギーは、灯台の鍵(かぎ)がわりにしたときにたっぷり充填(じゅうてん)されているはずよ。太陽さんの光よりは、ものたりないかもしれないけれどね、光が灯台の鏡玉(レンズ)の中で、どう変化するかはわかるはずだわ」

「やってみよう」

フィレーナは剣を抜いた。

「一デビス時間後にあそこから剣を光らせて。わたしは灯台に戻って光を待つわ」

そして、フィラーレに言った。

「お祭りの準備、手伝えなくて御免なさい」

フィラーレはほほ笑んだ。

「手伝うのは私。できることを言ってください。船は私たちの希望でもあるわ」

「だね……ありがとう」

リラはニッコリ笑った。

それから、フィレーナに向きなおって言った。

「やっぱ、フィレーナは勇者でよかったね。その剣は、勇者じゃなきゃ持っていないものね。うん。めでたい、めでたい。うん」

リラは何度も頷いて、満足そうに自分に頷いた。

＊

「なぜ、わざわざ試してみるの?」

灯台の鏡玉（レンズ）の前で待機しているリラに、フィラーレが聞いた。

「ソレーナの日の、太陽の光線の進み具合、あなたの計算機のほうが正確に計算できると思うんですけど……」

「はい……最初は私もそう思ったの。でも、この灯台に使われている鏡玉（レンズ）は硝子（ガラス）でできているわ」

「普通、鏡玉（レンズ）は硝子でしょう」

「だから難しいの。硝子は、金剛石（ダイヤ）のように純粋（じゅんすい）な炭素の固まりじゃないわ。透明に見えてもいろいろ不純物が混じっている。不純物の質とその量次第で光の屈折率が違ってくるの」

「透明な硝子ってみんな同じように見えるけれど」

「精密に言えば、世の中にひとつとして、同じ硝子はありえないわ。たとえ、どんなに正確に同じカットをして、同じ磨（みが）き方をしてもね。だからこそ、透明の硝子は同じ透明な金剛石よりずーうっと個性的で綺麗（きれい）だっていう人もいるのよね」

「確かに宝石は、純粋なものよりも不純物の混じっている方が私は好きだわ。みんな、それぞれ違う魅力（みりょく）があるもの」

「だから、計算機の資料（データ）だけでは、一個一個それぞれの正確な屈折率は計算できないの。なにが不純物として含（ふく）まれているかわからないもの。計算機が計算苦手なのは、硝子と人間の行動。どちらも不純物がいっぱいで、おまけにもろい……。なんてね。ともかく、この鏡玉（レンズ）の中で光がどう変化するか、実際にやってみるのが一番なの」

リラは、携帯通信電算機の時計を見た。
「そろそろ、時間だわ」
天井の割れ目の向こうで青白い光が走った。
フィレーナが剣の光線を放射したのだ。
「きれい……」
フィラーレが思わず呟いた。
フィレーナの剣の光線は、普通の硝子剣（グラスソード）の白熱光と違い、殺傷能力はない。中程度の大きさの水槽に入った汚潮を浄化できる、奇妙な能力があるだけだった。
リラがフィラーレに言った。
「あの光は不思議なの。そんな力があるのに、私が計算機で測定したら光の波長は、大気中を進む太陽光線……つまり、自然光と変わりがないの」
光線は、灯台の鏡玉（レンズ）に吸い込まれると、一瞬七色の光に膨れ上がった。
そして、一条の光に集束し、船つき場に近い氷の洞窟の壁の海面すれすれを差し示した。
「あそこだわ」
二人は頷き合うと、獣皮艇（カヌー）に乗り壁に近づいた。
氷を透かして、片手で持てるほどの白く四角いものが見えた。
緑の光が当たらなければ、海面の照り返しと氷で、だれも気づくはずのない大きさだった。
二人は、獣皮艇（カヌー）に備えてあった捕鯨用の銛で氷をこそぎ落とすと、埋もれていた白い物を取

り出した。
それは、白い毛皮の表紙でできた本だった。
「素敵な毛皮。何の毛でできているのかしら」
リラは、こびりついている氷を払いながら呟いた。
「それが、本当に動物の毛皮だったら……たぶん。信じられないけど、レッゴッ……」
フィラーレが言った。
「レッゴッ……？　フィアイの言葉だと……え〜っと……なんだっけ。御免。フィロセラ語はなんとか読めるようになったけれど、フィアイの言葉までは、手が回らなくて」
リラは、携帯通信電算機を出し、辞書鍵盤を押そうとした。
「白い神」
押すまでもなく、フィラーレが訳してくれた。
「大昔に死に絶えた白い熊のこと。陸地で一番強い獣で、夏に盛んに活動するから夏の神。白夜の神。ソレーナの祭りの守護神に祭り上げられています」
リラは、目を輝かした。
「わっ……夏至のお祭りの神様？……ますます、らしくなってきたぞ」
本の置いてあった場所の裏側は小さな空洞が開いていて、祭壇の模型のような物がおいてあった。
「わたしたちのしきたりだとソレーナの日には、こんな祭壇で火を焚くの。その炎を目印にし

て、亡くなった御先祖様が、地の底から蘇って、私たちと一緒にお祭りを祝いに来るっていいつたえがあるの」

「御先祖様が蘇る……？　うん。いいぞいいぞ。御先祖が蘇れば、凍ったお船が蘇ってもいいじゃない。ってなものよね。ますます、らしいらしい。能書きを読んでみよう」

リラは、白い毛皮の表紙の本を開いた。

本の厚い扉の裏がくりぬいてあり、小さな凸鏡玉がしまってあった。

「またまた鏡玉か……。よっぽど鏡玉が好きなのね。フィロセラの人って。でも、文字は、眼鏡なしでも十分読める大きさだわ。どれどれ？」

リラは、本を読み始めた。

「伝説の時代。敵軍船、鰊の群のごとく押しよせ、祖国フィロセラ、未曾有の危機に襲われし時あり。されど、我らに大学者キメデルスアの鏡玉あり。

キメデルスア、巨大なる鏡玉をば、フィロセラの港に、備えつけ、太陽の光を鏡玉に集め、敵軍船悉く、炎上……敵兵ことごとく太陽の炎に焼かれるか、波にのまれ死せり。

我らの科学の始祖、伝説の大学者キメデルスアは、こうして鏡玉にてフィロセラを救えり。

故事にならい、フィロセラを救わんと志したる勇者。鏡玉にてそれをなすべし。

まず、鏡玉にて祭壇に炎を作り、時を待つべし……だって」

「鏡玉で炎を？」

フィラーレが聞いた。

「ようするに、鏡玉（レンズ）で、ここに差し込んだ火の光を集めて、祭壇に火をつけろってことでしょう？　まるで、運動競技の聖火だね」
「鏡玉（レンズ）で火をつけられます？」
「ここに本当の太陽の光が差し込んでいるならできるかもしれないけど、フィレーナの剣の青い光線じゃ……」
　リラは、鏡玉（レンズ）を光に当てた。
　祭壇に光が集まったが、何の変化も起きない。
「フィレーナの剣の青い光線じゃ……ちょっとおとなしすぎるみたい」
「火をつければいいんですよね」
　フィラーレは、懐（ふところ）からつまようじのようなものを取り出した。
　そして、獣皮艇（カヌー）の木の部分に擦（こす）りつけた。
　たちまち、火がついた。
「なにそれ」
　リラは目を丸くした。
「しらないんですか。燐寸（マッチ）……棒の先に、火山で取れる発火性の粉がついているんです。昔の人はみんな使っていたそうです」
「スイッチなし危ないじゃん」
「子供はみんな燐寸を持って火遊びします。フィアイでは火を友達のように使いこなせなけれ

ば大人にみなしてくれませんわ。フィアイの民は、爆弾や武器は使えないけれど、自然からもらった火は、親しい友達です。つけましょうか……？　祭壇に火を」
「燐寸で聖火か……雰囲気でないけど……燃える炎に変わるわけじゃなし……ま、いいか」
「では、点火」
フィラーレは、祭壇に火をつけた。
ぼっ……。
祭壇は、まるで火薬が仕掛けられたように燃え上がった。
そして、あっという間にくろこげになって燃え尽きてしまった。
それだけだった。
数分が経った。
何も起こる気配はなかった。
リラとフィラーレは、顔を見合わした。
「これで終わりなの？」
フィラーレが聞いた。
「みたいね……やっぱ、燐寸じゃ役不足だったかな。参ったな」
リラはこつんと自分の頭を叩いた。
ぐらっ。
いきなり、獣皮艇が揺れた。

二人は、悲鳴をあげて抱きあった。
海面が泡だつ。
腹の底に響くような地鳴りが洞窟に響きだした。
燐寸は、決して役不足ではなかった。
祭壇は、導火線だった。
氷の中で、爆発が起こり、何かが起ころうとしていた。

＊

洞窟の中、灯台の周辺は、揺れただけだった。
だが、氷上のフィレーナの前で、起こったのは生易しいことではなかった。
フィレーナは、地下からの激しい衝撃で、たて穴の中に飛ばされた。
手に持った剣を、咄嗟にたて穴の壁につき立てなければ、そのまま、たて穴の底に落ちて、リラとフィラーレの頭上に降っていったかもしれない。
たとえ、洞窟の海面に落ちても、たて穴からの高さではとうてい助からなかっただろう。
そして、たて穴の内側の壁にへばりついたのが、幸いでもあった。
外につったっていたら、吹き飛ばされた氷片でなぎ倒されていたかもしれない。
なにしろ、目の前の大きな氷の丘の連なりの表面が、次々に薄皮を剝ぐようにはじけ飛んだのだ。
そして、それぞれの丘の内側から姿を見せたのは、雪の台座の乗せられた巨大な氷の鏡玉だ

った。
全部で七つあった。
それぞれの鏡玉は、青空を背に、海岸の同じ崖を見据えていた。
それは、二百を越える艦隊が氷にとじ込められ眠っている崖だった。
それぞれの鏡玉は、太陽の光を集め、崖の一点に浴びせかけた。
台座は、太陽の運行に合わせ、時間が経つに連れ少しずつ向きをかえ、光線の照射を調整していた。
地下で、何かの動力が働いているに違いなかった。
しかし、七つの鏡玉の一斉照射は長く続かなかった。
太陽は、それぞれの鏡玉の中央をそれ、集光された光は崖の一点からずれはじめついには海を照らすだけになった。
やがて、日は翳り、この時期、北の果てでは来るはずのない夜の闇がやってきた。

＊

「太陽の光を氷の鏡玉で集め、崖の氷を溶かすんです」
リラは、ソレーナの祭りの集会場に集まったフィアイの民の代表たちに船の解凍方法を説明した。
フィアイの民の指導者格の一人、フィラーレの恋人が手を上げた。
「氷を溶かすような熱い光を通して、氷の鏡玉自体は溶けないのか？」

リラが答える。

「光は、焦点に集まって熱を発します。光を屈折させる鏡玉(レンズ)本体は熱くなりません。でも、問題は光の温度よりむしろ気温です。

ここはもう北の果てではありません。気温が上がれば、鏡玉(レンズ)は表面からどんどん溶けていきます。

すぐに、光の屈折率が変わり、やがて、鏡玉(レンズ)の役目すら果たさなくなるでしょう。それに、もう一つ、太陽の高さが、北の果てのようにはいきません。あの鏡玉(レンズ)を作った人の考えた太陽の光の角度と、ここの太陽の照射角度は違うんです。このままでは、満足に光を集められません。そこで、みなさんにお願いがあるんです。せっかくのソレーナのお祭りだというのに、申し訳ないんですが……」

フィラーレが首を振った。

「気にしないで……あの船と一緒にフィレーナとあなたが来たときから、私たちはあなたたちを手伝うつもりだった。私たちはあなたを待っていたんです」

フィラーレの恋人が頷いた。

「われわれは何をすればいいのかね。遠慮(えんりょ)なくいってくれ」

リラは、フィレーナの顔を見た。

フィレーナは、先刻(さっき)から一言も話さないでぶっきらぼうに立っていた。

唇(くちびる)を噛(か)み締めてこわいぐらいの表情をしている。

かたわらの狼犬ギャッピーも所在なく横たわるだけだ。
でも、潤んでいるその瞳を見て、リラにはフィレーナの気持ちがよくわかった。
何の疑いも持たず、フィレーナを手伝ってくれるというフィアイの人たち。
フィレーナは感動していた。
くやし涙。悲痛な涙。絶望の涙。
リラは、さまざまなフィレーナの涙を見てきた。
だが、こんな涙は初めてのはずだ。
だから、どうしていいのかわからず一生懸命、涙を耐えているのだ。
……そのまま、じっとがんばってこらえてなさい……ここは、わたしが引き受けるから……
リラはフィアイの人々に向きなおった。
「幸い、夜はまだ気温が低いです。日が昇れば気温が上がり、いつ、鏡玉が、不能になるかわかりません。今のうちに鏡玉の角度を変えたいんです。角度は私が計算しました」
フィラーレの恋人は黙って頷くと、立ち上がった。
フィアイの代表たちも立ち上がる。
「今年のソレーナは、ひときわ、意味のあるものになりそうです。御先祖様も、きっと喜んで手伝ってくださいますわ」
フィラーレは、そう言って、口元で口琴を鳴らし始めた。
至るところでたいまつに火がつけられた。

リラは息を飲んだ。
数え切れない数だ。
いつの間にか、氷の島にいるフィアイの民のすべてが集まっていた。
女も子供も、老人も、病人すらいた。
彼らは、夜を徹して働いた。
そして、夜が明ける前に鏡玉(レンズ)をリラの望む角度に動かし終えた。

*

空がみるみる白んでくる。
鏡玉(レンズ)の台座が音を立てて動き出す。
おそらく太陽エネルギーで稼働(かどう)しているのだ。
海を赤く染めて、朝日が浮かびあがってくる。
一基、また一基、朝日に染まった巨大な鏡玉(レンズ)が、氷の岸壁に光の焦点を結ぶ。
フィレーナが、リラが、フィラーレが、フィアイの人々が……身を乗り出すようにして、対岸の崖の一点を見つめる。
海から崖を遠まきにしているカヌーに乗った男たちも、いつもなら目を皿のようにして捜(さが)す魚や鯨(くじら)に関心はない。
ギャッピーの率いる雪上犬の群れさえ、一頭残らずぴんと耳を立て、対岸の崖に起こる異変を聞き漏らすまいとしているようだった。

やがて、七基、すべての鏡玉が崖の一点に光を集中させた。
凄まじい勢いで、蒸気が上がり始めた。
フィアイの人々から歓声が上がった。
フィレーナはだれかれかまわず肩を叩かれる。
フィレーナは何をされても頷くだけだ。
溶け出した水が、氷の崖を流れ落ち始める。
ちょろちょろと汗のようだ。
やがて……。
突然、滝のように水が吹き出した。
どよめきが上がる。
海に落ちる滝の飛沫に虹がかかる。
リラが呆然と呟く。
「うそ……」
フィラーレがそんなリラにほほ笑んで言った。
「あなたがそれじゃ困っちゃう」
リラは頷く。
「そりゃ、そうだ。けど、我ながら……驚いた」
そのとき。

ひくっ……。
雪上犬の耳が一様に緊張する。
人間の耳にはまだ聞こえない音を感じたのだ。
雪上犬の一頭が、吠え出す。
つられたように、他の犬も吠え出す。
まるで、何かを後押しするかのように吠え続ける。
「何がおこったんだい？」
フィレーナはギャッピーのほうを見た。
ギャッピーだけは、何事もなさそうに前足に顎を乗せ、横たわっている。
さらに犬たちは騒がしくなった。
飛びはねている犬もいる。
そのころになって、ギャッピーはおもむろに立ち上がった。
そして、静かにせんか……とでもいいたげにひと声、吠えた。
とたん……。
ぴしっ！　ぴしっ！
今度は、人間の耳にも確かに聞こえる音が空気を震わせた。
崖にひびがはいったのだ。
犬が吠えたのは、この音を耳にしたからだ。

ひびはみるみる広がって、崖の一部がついにたまらず、そげ落ち、ゆっくりと海中に没していく。
膨れ上がる波に、獣皮艇の一団が、蜘蛛の子を散らすようにして押し流される。
しかし、獣皮艇に熟達した男たちに、転覆するようなへまはいない。
崖の様子を窺い、再び接近していく。
轟音が空気をふるわせる。
立て続けに崖が割れずれ落ちる。
崖下から山のようなうねりが、わき上がり襲いかかる。
飲み込まれるその寸前をかわし、獣皮艇は逃げる。
その様子は巨大な生物をからかい、とびはねる蚤の群のようだ。
そして、波がおさまると懲りずに、また近づいていく。
怖いもの見たさなのか、いや、むしろ波乗りを楽しんでいるようにも見える。
ひときわ大きな亀裂音が響く。
崖を走る無数のひびわれが、氷の粉を吹き上げる。
対岸で見つめるフィレーナたちの頭上に吹雪のように吹きかかる。
崩れ落ちた崖のおこす飛沫が雨のように降る。
抜けるような青空と照りつける太陽の下、雪と雨が乱舞する。
「どうやらいけそう……」

リラはフィレーナの顔を覗き込み、親指を立てた。
確かに今のところはうまくいっているようだった。
やがて、太陽は昇りきり、直射日光が膚に熱く感じられる時間になった。
けれど降りかかる細かい氷片や水滴は切れるように冷たい。
「なんだか熱いんだか寒いんだか訳がわかんないね」
リラはぶるっと体をふるわせた。
「日射病と凍傷がご一緒しそう」
だが、だれも崖の対岸から離れようとはしない。
昼になっても、食事をとりに、家に戻る者はいなかった。
船が氷の中から蘇る瞬間を見逃したくなかったのだ。
けれど崖に閉じ込められた船は、一隻も姿を現さない。
氷の崖への鏡玉から送り込まれる光線は、さらに輝きと熱を増したようだ。
崩れ落ちる崖の量は、先刻から絶え間ない。
それでも船の舳先、帆柱一本すら表面には出てこない。
氷を透かして見える船影で予想した位置よりも、相当、深くに閉じ込められているようだった。
リラは、待ちくたびれて肩を竦めた。
「ばきばきどんどん、がしゃんがしゃん……氷の溶ける伴奏は派手だけど、出そうで出ない。

なんか……まるで、帝国の鉄玉遊戯場(パチンコ屋)だわ。あ〜あ……」

いきなり叫んだ。

「こらっ！　氷屋の親父(おやじ)、出ないぞ。……けちっ！」

リラの叫びがあまりに真に迫っていたので、フィレーナが驚いて聞いた。

「どうした……リラ。こっちがいくらむきになっても、自然の現象はどうにもならない……待つしかないさ」

リラは、我に返ってさりげなく言った。

「そりゃそうだ。溶かすは太陽。溶けるは氷の大自然。なるようになるしかないわよね」

だが、リラには叫ぶだけの理由があった。

リラは焦り出していた。

崖から船が現れるのが遅れると、困ったことがおこりそうなのだ。

携帯通信電算機が示す氷の島の緯度(いど)は、もう極北とはいえない。

地表が氷だから暑さは感じないが、本来の気温は汗ばむほどの陽気のはずだ。

人間がそう感じて、氷が我慢できるはずがない。

氷の鏡玉(レンズ)が溶けて、光の屈折が変わったらどうしよう……。

だが、今はじっと待つしかない。

フィレーナの言うように、ここまできたら、太陽光線と巨大な鏡玉(レンズ)と氷の崖の駆け引きに、もう、リラたち人間が割り込む隙(すき)はなかった。

リラは肩を竦めて苦笑した。
「けちといわれても、氷屋の親父だけに……私たちには冷たいか」
だが、まだまだ余裕（よゆう）のあったその顔が、次の瞬間、こわばった。
氷に食い込んでいた七つの光の焦点のひとつが、みるみるぼやけていくのだ。
「リラ……これって……」
フィレーナも変化に気づいた。
「あつ～っ……こんなのやっぱりありか……」
リラは、フィレーナには何も答えず、巨大な鏡玉（レンズ）の下に走って行った。
そして、呟いた。
「ありだよな。あんた氷だもんなあ……」
鏡玉（レンズ）の表面から蒸気が立ち昇り、水滴がさかんに落ちてくる。
鏡玉（レンズ）の台のあたりはすでに水びたしだ。
「溶けだしたんだね」
リラを追ってきたフィレーナが、鏡玉（レンズ）を見上げながら言った。
リラは落胆（らくたん）した顔を、見たくも、見せたくもなくて、鏡玉（レンズ）を見上げながら頷いた。
「本当なら光を屈折させるだけじゃ溶けはしない。……ここが北の果てのもっと寒いところならね。溶けるのはあっちの崖だけのはずだったのに」
「どうにかならないんですか？」

状況がわかったフィラーレが、リラに聞いた。
「どうにかって……」
「昨日の夜のように、鏡玉の角度を変えてみたら……みんなで力を合わせればなんとかなるかもしれません」
リラは首を振った。
「気持ち……ありがとう。でも、角度の問題じゃないの。鏡玉の表面が気温で溶けて凸凹になってるの。鏡玉自身が、役立たずになってく」
やがて、二台目の鏡玉の焦点がぼやけ出した。
それを合図にしたかのように、崖を照射していた光が次々に消えていった。
見守るフィアイの人々に呻きに似た声が広がった。
盛大に空気を震わせていたひび割れの音が嘘のように消えた。
岸壁の崩れは止まった。
「大失敗……あらら」
リラは明るさを装って言った。
しかし、たまらずがっくりついた膝は落胆を隠せなかった。
その頬に溶けた氷ではなく、涙が伝わっていた。
「どうしようもないんですか……」
フィラーレが二人に聞くでもなく呟いた。

「なにかやりようがあれば、リラはとっくにやってます。口より先に手足が動く……」
フィレーナは優しい笑みを浮かべながらそう言って、リラの肩に手をやり立ち上がらせた。
「だよね……」
リラは肩を竦め、こくりと頷いた。
「なあに……待てばそのうち溶けてくるさ。気長にね。……よくやったよ。リラは……ありがとう」
フィレーナはリラを抱きしめた。
フィラーレも優しく笑みを浮かべた。
「そういうことですね……そういうことなら……」
フィラーレは、口琴を取り出した。
「太陽は真上。いつもなら、ソレーナの祭りは最高潮の時です。祭りを続けましょう」
フィラーレは口琴を鳴らし始めた。
答えるように太鼓が響いた。
フィアイの人々は、歌い出した。
人々は、岸辺を離れ、集会場に集まってきた。
中央には太陽をかたどった彫刻のある柱が立っている。
女たちが、歌いながら、氷の大地に咲いていた花を撒き散らす。
踊りが始まった。



「……よくやったよ。リラは……ありがとう」フィレーナはリラを抱きしめた

いつ始まったかわからないほど自然に始まっていた。
底抜けに明るい笑顔がそこにあった。
それは、先刻までかたずを飲んで氷壁を食いいるように見つめていた同じ人たちとはとても思えない。
昨夜、不眠不休で氷の鏡玉（レンズ）の角度を変えた疲れも忘れたように、みんな、快活に祭りを楽しんでいる。
やがて、歓声が上がる。
海に出て、岸壁の周りにいた男たちの獣皮艇（カヌー）が帰ってきたのだ。
男たちの逞（たくま）しい交錯唱法（ヨーデル）が、波の上を駆ける。
女たちが優しい交錯唱法（ヨーデル）で答える。
フィラーレがにこやかに言った。
「喜んでください。大漁です……」
「ソレーナの祭りで魚が獲（と）れると、来年まで魚に困らないっていう言い伝えがあるんです」
彼らは、氷壁が溶けないとわかると、ただちに観察をやめ、いつものように、魚をとる仕事に戻ったのだ。
それぞれの獣皮艇（カヌー）には溢（あふ）れんばかり魚が跳（は）ねていた。
「魚を獲りに行った……？」
リラが意外そうに言った。

「それが、ソレーナの祭りの日の彼らの務めですもの」

フィラーレはさも当然なことのように軽く答えた。

「みなさん……もう、お仕事してたんだ」

「変ですか……?」

フィラーレが聞いた。

「お祭り熱心。お仕事夢中は悪いことじゃないけれど、先刻まで、氷が溶けるのに頑張っていたのに、ちと変わり身が早いというか……。気分転換がお見事というか……私なんて、これでも、ちょっと前のこと、いまだに根にもって、これでもしょげてる最中なんだ……ねえ」

リラはフィレーナに同意を求めた。

フィレーナは肩を竦めた。

「しゃべれるだけでもリラは元気さ……」

「ということは……ははは、フィレーナは声も出ないぐらいがっくりしている」

リラは、ことさら明るさを装って言った。

「私たちはがっかりしないの」

フィラーレは、にっこりほほえんだ。

その笑顔にリラのような無理はなかった。

「私たちはね、北の果ての自然の中で生きてきたでしょ。自然は気紛れで、地震や嵐や津波……予期できないことがいつも起こるわ。よいことも悪いことも私たちには占いはできても

本当の予期はできない。たとえ獲物（えもの）の豊かな年があっても、その次の年は不漁かもしれない。だからいつまでも喜んではいられないし、辛（つら）いことがあってもいつまでも悲しんではいられない。自然は気紛れで、明日は喜びを、明後日は悲しみを……だから私たちは、そのたびに、精いっぱい喜び、精いっぱい悲しむ。そのときその時を目いっぱい感じて、ただし、その気持ちを長くは引きずらない。それが、フィアイの民の性格かな……」

「そのときその時を、目いっぱい。後は野となれ山となれ。なんだか、私たち、奴隷（クレチア）に似ているね。でなきゃ、その日暮らしの浮き草暮らし（デラシーナ）……」

リラが呟いた。

フィラーレは首を振った。

「奴隷（クレチア）ではないと思う。私たちを支配しているのは人間ではないから……」

「支配しているのは自然？」

フィレーナがぽつりと言った。

フィラーレが頷いた。

「帝国では自然という名でかたづけられているけれど、それはたぶん、この世界を支配する無数の神のいとなみ」。

「無数の神？……」

「帝国の言う神ほど得体の知れない生臭いもんじゃないわ。それは、太陽や風や波や動物たち……だれにでもそれとわかるものすべて……そして、たぶん、私たちはその日暮らしでもな

いわ。自然は確かに気紛れだけど、大きな時間の流れの中のいとなみのしきたりは変わらない」

「いとなみのしきたりか……」

フィレーナは、喜々として魚の陸揚げを手伝うフィアイの子供たちを見つめた。

円柱を取りかこんで歌い踊るソレーナの祭りは最高潮だった。

「私たちは生まれて生きて産んで……」

フィラーレが言った。

「歌って踊って……かな?」

リラがほほ笑んだ。

フィラーレはほほ笑みかえして言った。

「そうね……それもある。そして、私たちは続いていく。私たちは、そんなしきたりにしたがっている。だから、こうやって生きてこれた。一日、一日、いろいろなことが起こる。喜んだり悲しんだり、さまざまに……でも私たちは、すぐに元の気持ちに戻る。また、元のしきたり通りの一日を繰り返す。それを何千年も繰り返してきた。なにが起こっても、がっかりしない。挫けない。諦めもしない。だって、いとなみのしきたりに戻れば、フィアイの民は生き続けていけることを知っているから」

「フィラーレさん……。船が氷から出てこない以上、私たちはここから動けない。氷の上で、フィアイの人たちと同じように暮らすしかないわよね」

　リラがフィラーレを見つめて言った。
「フィアイの人たちの生きていく方法はわかったわ。いとなみとかしきたりとか古風な言葉を使ってはいるけれど早い話が自然のままに従うってことよね」
「早い話がか……」
　フィラーレが肩を竦めた。
「そうよね……そう言っちゃったら実も蓋もないけど」
「実も蓋もあるように聞きたいの」
　リラはいつになく真剣な表情で言った。
「フィアイの人たちは、生まれながらにして厳しい自然の中で育った……。だから、それでいいのかもしれない。でも……フィラーレさん。あなたは帝国の暮らし……フィアイとは違う暮らしを知っているわ」
「望んで知ったわけじゃない。フィアイと帝国の間を通訳するためには、帝国の教育を受けなきゃならなかった」
　フィラーレが静かな口調で答えた。
　リラは頷いた。
「わかってます。それはわたしもフィレーナも同じ。望んだわけじゃないけれど、帝国の暮らしを知ってしまった。私たちは、よかろうと悪かろうと、帝国の暮らしに染まって生きていた。帝国の暮らしっていうと、なんか嫌なもののように聞こえるから言い換えるわ。人間の……一

リラは、少し間をおいた。
「なんて言ったらいいのか……そう、人間の文明というか……文化というか……私たちは、帝国人だろうが奴隷(クレチア)だろうが属国人だろうが……人間の作った文化に慣れちゃっているわ」
「リラらしくないな。なんだか理屈っぽくてさ」
フィレーナが呟いた。
「私らしくはないわ。今回の私は納得したいリラなんだ」
「何をそうムキになってるんだ」
「ごめん……むきにならして……」
リラは、フィレーナの言葉を封じるようにして話を続けた。
「フィラーレさん。あなたは本当はどう思っているの。自然のいとなみに従って生きるフィアイの暮らしと、いわゆる文化的生活と比べたら、人間にとってどちらが幸せだと思うのか。本当の気持ちを聞かせて」
フィラーレはリラを見つめ返した。
そして苦くほほ笑んだ。
「帝国は好きになれない」
たたみかけるようにリラが言った。
「わたしだって好きじゃない」
「でも、帝国ということではなく、人間の文化的生活ということなら……」

フィラーレは肩を竦めた。
「正直に言うわね」
「お願い……」
リラは、縋(すが)るような目でフィラーレに言った。
「とても、魅力的(みりょくてき)だわ……厳しい自然の中で暮らすフィアイに比べたら、たとえ帝国人に猿に等しい原始人だと蔑(さげす)まれ、いたぶられても、文化的生活は楽で心地よい」
「ええ……たとえ明日の生命もしれない奴隷(クレチア)の身でも、厳しくつらい自然の暮らしよりはましだと思う」
「リラ、何を言いだす気だ」
フィレーナは呆然とリラを見つめた。
「自然の中で自然のままに生きる。フィアイの人たちの暮らしは素敵だと思うわ。でも、それって、文明に慣れた私たちのたんなる憧(あこが)れじゃないのかって気もする。頭の中で観念的に憧れている幻なんじゃないかって気がする。フィレーナ……私たち、人間って、フィアイの人たちのような暮らしに戻れるの？」
「でも、ここにいる以上、そう生きるよりないじゃないか」
「仕方がないから生きるなんて嫌なの。確かに、船は出てこない。氷の上で流されていくしかない。フィアイの人たちの暮らしを続けるしかない。わかっているわ。でもこれが人間としての本当の生き方かどうか納得したいの」

「人間としての本当の生き方……？」
フィレーナはリラを見つめ返した。
「私は奴隷として育てられたわ。そして、フィレーナと出会って奴隷であることから抜け出した。奴隷は人間じゃない。人間以下だ。そう言われてる。だから、奴隷から抜け出した私は人間になれると思った。そうなろうと思った。お馬鹿さんの私でもね。でも、人間ってなに？人間って……」
フィレーナは答えられなかった。
リラは続けた。
「こんな小娘でもね。ちったあ考えるわ。フィレーナと一緒に、フィレーナと生きて、帝国にたいして役にも立たないけれど、けなげにさ、立ちむかってさ。それが、とりあえず、人間らしく生きるってことかな……なんて思ったりもした。でも、それからいろんなことがわかってきた。帝国がどんな成り立ちでできてきたか……なんてね。フィレーナのフィロセラがどんな国だったかもわかった。いろいろわかったら何が人間らしいのか、わけわからなくなっちゃった。人間はたぶん、より人間らしくなろうとして文明や文化を進歩させてきたのよね。帝国はそんな人間のいきついた先よね。そして、私たちは、帝国までの途中の文明人間。車の進行方向は、ほとんど文明文化帝国行き。そんな車に乗って生まれてきた私たちに逆戻りができるの？」
「僕たちには、フィアイの暮らしはできないというのか」

フィレーナが呟く。
「僕たちだけじゃなくて、ここまで文化文明した人間たち、みんなのことを言っているの。そりゃ、苦節うん年、波乱万丈の私たちなら耐えられる。私たちならフィアイの暮らしができないとは言わない。我慢をすれば……私たちはできるはずだわ。……でも、我慢することが人間らしく生きることなの？」
リラは、そこまで言って、ぺろりと舌を出した。
「ごめん、最近、知恵熱。いろんなことを考えちゃう。つまり、ここまで追い詰められて、そのうち、足元が溶けて流れて海の泡状態となれば、せめておしまいまで、ここの暮らしは人間としてまともだって納得して生きたいでしょ。ここの暮らしって、本当に人間らしいわけ……？」
「答えになるかどうかはわからないけれど」
フィラーレがリラに言った。
「私が帝国の北辺警備隊に帝国語を習いに行ったときのこと。私の中には確かに、帝国の文化へのあこがれがあったわ。そりゃ、フィアイの民を帝国人たちは人間扱いしていないってことはよく教えられていた。帝国語を習いに行ったフィラーレ（海の声）の娘は、帝国人の教師に遊ばれてまともには帰ってこれないって噂も聞いていた。それでもね、フィアイの里から出たことのない娘には、合成繊維の服や、柔らかい加工食品は、夢にまで見た文化だった。そして実際、警備隊のいる街に行って、冬でも夏の白夜のように明るい街路灯と薪を燃やさなくても、

釦を押すだけでいつの間にか温かくなる部屋を見たときは、フィアイの里に二度と帰りたくないと思ったわ。そして、血まみれになって獲物を解体しなくても、電子調理機に入れさえすれば柔らかく暖かい肉が食べられる暮らしって、二度と手放したくないって思った。なにより、魅力的だったのは、帝国の言葉を習っていろいろな電子本を読めたってこと。フィアイの里には昔の言い伝えが歌や口伝えで残されているだけで、本はなかった。わたしはかたっぱしから電子本を読んだわ。そして、この世界がどんなに広いかを知ったわ。私は夢中になった。帝国の生活に酔っていたといっていいわ」

「知らないことを知るって確かに酔えるよね。わたしも奴隷のころ、休憩時間の時は、いつも電子本読んでた。接待用奴隷だからそれなりの実用本でろくな本なかったけれど……どんなことだって知識は知識だ。知るのは楽しいよね」

リラはしみじみといった。

「そう……」

フィラーレはリラに頷いて、話を続けた。

「帝国の暮らしをできるなら、帝国人が私を、蔑もうが、玩具にして遊ぼうが知ったことじゃなかった。もともと、フィアイには、人間に差をつけたり、蔑んだり、慰みものにしようなんて感じ方がなかったから、相手からそうされても最初はピンとこなかった。人を差別したことのない人は差別されることに鈍感なの。人間に出会ったことのない動物は、人間の怖さを知らずに無警戒に近づいていくものでしょう?」

「そして、人間に滅ぼされた動物は多い……」

リラが呟いた。

「そうね……でも、今の話題は私のこと。……私たちフィアイは、雄と雌のいとなみも悪いことだとか罪悪感を持っていない。自然だと思っている。厳しい自然の中では、子孫を残すためにも、雪で閉ざされ何もできない時間を過ごす楽しみのひとつだとも思っている……だから、街で私と知り合いたい帝国人の男たちが何人か通りすぎていったけれど、それほど気にならなかった。

むしろ、帝国人が、私と知り合いながら、子供を作りたがらないことのほうが不思議に思えたわ」

フィラーレはそういって肩を竦める。

「ずいぶん思い切ったこと言ってくれるなあ。接待用奴隷より居直っちゃってる感じ」

「居直ったんじゃなくて、実際、居心地がよかったわ。私がこんな気持ちになっていたこと、今となっては、フィアイの人たちには秘密にしておきたいけれど……」

「それをなぜぼくたちに話してくれるの」

フィレーナが聞いた。

「自分のためかな……」

フィラーレはほほえんだ。

「あなたたちは帝国の暮らしに慣れていて、でも、ここで、フィアイの暮らしをしなければな

らない。リラさんの戸惑（とまど）いは、わかる気がする。そんな、あなたたちに話すことで、帝国の暮らしから戻ってきた、私自身の気持ちをもう一度、確かめたいのかもしれない……」

「フィラーレさんでも、ここで生活することを迷うことがあるの……」

「今となっては迷いなんかないわ。でも、自分の気持ちを確信はしたい。……あのころ、私は、帝国の生活って、単調で厳しいフィアイの暮らしに比べたら天国だと思った。帝国の生活を一度でも味わった女の子は、フィアイの生活に戻ろうとしないっていう。たとえ、営業接待女性になっても……」

「営業接待女性……？」

奴隷（クレチア）だったフィレーナには聞き慣れない言葉だった。

リラが言った。

「知ってる。街の浮き草地区によくいるんだけれど、接待用奴隷（エンターテインメントクレチア）のようなことをする一般の人。奴隷（クレチア）じゃないからお金を取る。帝国法で禁じられてるけど実際は野ばなしらしいの。接待といっても奴隷（クレチア）のように接待技術を教わっていないから……奴隷（クレチア）から見れば素人（しろうと）の職場あらしみたいなものかな。せっかく奴隷（クレチア）じゃないんだから、そこまで奴隷（クレチア）の真似（まね）する人って、わたしわからなかった」

フィラーレはふっとため息をついた。

「でしょうね……帝国じゃそんな女の人を、身をやつしたとかいうけれど……それでもフィアイの暮らしからみれば、女たちにとって楽でやさしい生活に見える……ともかくフィアイの女

たちにとっては魅力的に思えても仕方がないと思う。でも……」

「でも……?」

「これってとても、感覚的なことなの……だから、私だけのことなのかもしれない。ちょっと変わった帝国人とあったの。帝国の軍人じゃなくて民間人だった。帝国の教養層に属する優秀種……自然保護区の調査にきた学者だった。その人は、保護区の自然は素晴らしい。自然のままに生きるフィアイの暮らしこそ人間らしいって口癖(くちぐせ)のようにいったわ。……自然のままに育ったおまえは美しい……そういって、わたしと知り合いになった。あの人自身は、本気でそう思っていたんだと思うの。私を通りすぎていった他の帝国人よりずーっとやさしく、精いっぱい大切に私をあつかってくれていたようだった。わたしは、その人の通訳として、何度も保護地区の中を旅したわ」

フィラーレは、肩を竦めた。

「これこそ自然だ……ってね……おれは、大自然を抱いているってね……ご本人はとても感動していた。ただしおびえながらね……何におびえていたかって……それは風の音、遠くで聞こえる獣の声、せせらぎで跳ねる魚の水音……フィアイの暮らしの中で、いつも普通に聞こえ感じられるもの。それが、あの男にはとても不安なものに感じられたらしいの。彼は私といながら、頭のうえには近くに寄ってくる動物がいればすぐにわかる電探機(レーダー)を置き、片手にいつでも救助を呼べる携帯通信機、腰にはいつでも抜ける硝子剣(グラススオード)……そして、体には防虫薬をまんべんなくふりかけていた。あの男の言う自然を抱くって、そんなものだったわ。わたし、その男が

決していやじゃなかった。でも、私自身が、いちばん安心した気分になれる大地の上にいて、一緒にいる男が怯えているって、腑に落ちなかった。居心地が妙だった」

フィラーレは肩を竦めた。

「そのときから、あの男と一緒いるときは妙な気分だった。言わなきゃいいのに、あの男が、自然を素晴らしいとしつこくいうだけに、なおさら一緒にいる私は、落ち着かなくなった……なにをそんなに無理をしているの?……って感じ。でも、あの男は、無理をしている気はないと思い込んでいるんだから困ってしまう……私にはわかっていた。本人がどう思い込もうとあの男が……いえ、帝国人が怯えなしで一緒にいられるのは、街の中……風の代わりに電音機から流れる官能音楽、空気の香りの代わりに、末梢神経刺激芳香剤。見上げる天井には太陽や星や雲の代わりに、きれいだけれど硝子着色光……みんな、人間の作り出した環境……で、そんな中で、野原にいるときとは、うってかわって、あの男は元気だったわ。いつも私に……愛している、恋してる……そんな言葉を囁いた。……もちろん、あの男は同じ言葉を野原にいるとき盛んに言っていた。ただし、あたりに気配りながら、上の空でね……リラさん……?」

フィラーレは、リラにいきなり聞いた。

「愛だの恋だの……って何」

「え……あの……」

リラはしどろもどろになった。

「フィアイには、愛とか恋とかそんな妙な言葉はないの」

「妙かな」
「私は、調べたわ。愛とか恋とか……そんな言葉をね。で、それが、フィアイにとって当たり前の気持ちを意味する言葉だってわかった」
「当たり前の気持ち……？」
「自分にとって、いいなと思った男と一緒にいたい。その子を産みたい。これって当たり前でしょう。愛って言えば母性愛って言葉を見つけたわ。それだって妙な言葉だと思うの。子が親ばなれするまで子供を守ろうとするのは当たり前でしょう……フィアイにとって当たり前の気持ちを、いちいち愛だの恋だのわかりにくい漠然とした、ぼやかした言葉でいうなんて妙……まして、親ばなれして当然の歳の子まで、玩具のようにして手放さない頭のおかしい母親にまで母性愛なんて言葉を使うとしたらもう、当たり前とはとてもいえない……当たり前じゃないことまで当たり前を意味する言葉でぼやかしてしまう。愛や恋なんて言葉を使えば、なんでもぼんやりと納得されてしまう。フィアイは当たり前のことは言葉にはしない。言葉にすれば、本質がぼやけてしまうから……ぼやけたことで納得しようとする。いいえ、納得したつもりになる人たちは、なんだか妙だ。私は、だんだんそう感じだしたの。帝国人と一緒にいて、帝国の言葉に親しんでいると、どんどん自分がぼんやりしてくるような気がしたわ。帝国の持っている文明も文化も、私たちが自然の中で生きるのより、確かに人間を楽にしてくれる。でも、動物として人間として当たり前のことをぼんやりさせてしまう。食べ物は舌にやさしい……けれど本当の味じゃない。電気は明るいけれど、それは本当の夜じゃない。本当でないものの中

にいると、自分も本当でなくなる」
「それで……フィアイに戻ろうとしたの?」
　リラが聞いた。
「今まで私が言ってきたことは、聞いてて、頭でっかちで理屈っぽいでしょう?」
「なんとなくわかるけど……」
「具体的に、フィアイの生活に戻ろうと決めたのはね……」
　フィラーレは苦笑した。
「帝国人のその男が、自然保護区の記録を電子本にまとめたの。『野生のフィアイ』……自然科学文学の傑作だということで帝国では評判になったらしいわ。書き出しはね……その日、私は、風が悲しく泣くのを聞いた。粉雪は私の耳元にせつない北の詩をささやきながら降っていた。どう、思う……」
　リラは肩を竦めた。
「帝国人の芸術分野は期待できない……。表現方法が型通りで陳腐」
　フィラーレは首を振った。
「わたしには表現方法のことはわからないわ。ただわかっているのは、あの男は本当を書いていないってこと。嘘を書いているっていっていい。風は泣いたりはしない。粉雪は北の詩をささやいたりしないわ」
「そ……それはさ」

リラは、困ったように言った。
「下手とは言っても、それはあくまで文章表現で……」
「風が吹くとき私は風を感じるわ。でもそれは泣くとか悲しいとかそんな言葉で言い表せはしない。体で感じる何かを言葉で表せるなんて信じられない。粉雪は北の歌なんか歌わない。私は粉雪が降るのを空気の揺れで感じる。その時感じる何かを、せつないささやきなんて言葉で書いてしまうのはひどい……」
いつも、ほほ笑みを絶やさなかったフィラーレの表情に、怒りが見えた。
「あの男は風も粉雪もフィアイもそして、私のことも何にもわかっちゃいない。何も感じちゃいない。だから、あんな言葉で言い表せて満足できる。愛という言葉も恋という言葉も自然は素晴らしいという言葉もたぶんそれと同じ……何も感じ取れないから言葉で誤魔化し自己満足しているんだ……そう思ったら、わたしは、まるで、命のない鉄の人形と一緒にいるような気分になったわ。そして住んでいる街は、言葉という不確かで曖昧な合成樹脂で囲まれた牢屋……帝国って……文明って文化って、なまじ言葉が多すぎる。多すぎるからかえって本当のことを見つけられない、感じられない、本当のことは言葉がなくても感じられるもの。風や粉雪や愛や恋は、文明がなくても文化がなくても、いえ、そんなものないほうが感じ取れるもの……違う？」
一気にそこまで喋り続けたフィラーレにいきなり聞かれて、リラはふっと大きな息を吐いた。
「わかんない。でも、フィラーレさんは本当を見失わないために自然に帰ろうとした……でし

ょう? ほとんど哲学してる感じ」

フィラーレは、肩を竦めた。

「言葉で言うから哲学っぽい。言葉で言えるような哲学はあいまいでいいかげん。実はさらに理由はあるんですよ」

フィラーレは、なんだか人事のように口調を変えていった。

「そのころ、フィアイの別の村から来た女の子が子供をみごもったの。あの帝国人の子だったの。そして、意外なことに、あの男は、その娘に産むようにいったわ。フィアイの民と帝国人の混血は貴重な愛の結晶だといってね。……多民族や奴隷と帝国人の間にできた子は、黙って処理されるのが普通なのに、原始的なフィアイとの子は、なぜか帝国人種局で出産を認められたというわけ。もちろん、その娘は帝国が駄目だといっても産む気だった。街から逃げ出してフィアイの里で、産んで育てる気だった。フィアイの民は子供を大切にする。人種なんて気にしない。どんな子であれ子供は次の世代に続ける宝だと思っているもの。フィアイの女にとっては、子供を産み育てるのが女としての務めであり誇りなの。でも、あの男は愛するわれわれの子供は、こんな北辺の苛酷な環境では育てられないし満足な教育もできないといった。お腹のなかの胎児の時に、母親のお腹から取り出して人工子宮に入れ、帝国の人種研究所というところへ連れていくといった。帝国人はみんな、母体の安全と出産の痛みを和らげるためと、胎児の安全のために人工子宮を使うといわれてたわ。でも、フィアイにそんな方法はいらない。子供は母親が自分で産み育てるのが当たり前だった。娘は自分のお腹から産みたいと言い続け

たわ。でも、そんな原始的出産は危険だといって、あの男は聞き入れなかった。ある日、娘は薬で眠らされ、お腹の子供はいなくなり……そしてそれっきり子供は帰ってこなかった。人種研究所でどうなったのか、あの男は、何も言ってくれなかった。そして、娘には何も言わずに街から行方をくらました。それから、しばらくしてあの男の電子本が出たわ。『野生のフィアイ』の続編……これまた、結構売れたらしい。その本に書かれていたわ。……愛があってもどうしようもなかった……原始的人種フィアイと帝国優秀種との間は、人類と猿ほどの差があり、愛の結晶がまともに育つはずがなかったのだ。禁断の愛に破(やぶ)れた私は、涙が氷と化したような雪の中を歩いた。そして、わたしには殺伐(さつばつ)とした帝国の日常が待っていた。さらば、フィアイ。さらば、野生。さらば、わが愛……」

「……」

フィレーナとリラは声もなかった。

その娘がフィラーレ自身であることを、口にする気はなかった。

フィラーレは肩を竦めた。

「さらば……さらば。その言葉だけはフィアイにもあるわ……本を読んだ娘は、故郷のフィアイの崖から海へ飛び降りた。子供を産み子供を守り育てる……フィアイの女の生きる価値……子育ての途中で何かの病気や事故で子供を失うことはある。……それは、仕方のないこと。だれもとがめはしない。でも、産み育てる努力をする前に、あの娘は、フィアイの女の生きる価値をなくしそして、その子供はもういない」

フィラーレは、大きな息を吐いた。

そして、ほほ笑んだ。

「でも、フィアイの娘はね、泳ぎが下手じゃ、ない。ぶくぶくもがいているうちに獣皮艇(カヌー)に引きずり上げられた。彼の船だった」

フィラーレは、魚を陸揚げしている婚約者を見つめほほ笑んだ。

「彼は、言ったわ。子供をまた産み育てれば、フィアイの女の誇りは戻る。でも、フィアイの未来を予言し、帝国と話ができるフィラーレは、死んだら戻らない。フィアイはフィラーレがいないと困る……そして、私たち一緒になった」

リラが、ぽつんと言った。

「言葉はなかった」

「なし……帝国で言う教養はまるでない。帝国人のやさしいやりかたも知らない。ただがむしゃらで……獣皮艇(カヌー)が波に揺られて、二人とも海に落ちて……それでも離れずに……気がついたら、二人で岩場で……風に吹かれていた。これが、本当だなって感じた」

そして、リラとフィレーナの両方を交互に見て言った。

「帝国の暮らしとフィアイの暮らし、どっちがいいのかそれは選ぶ人次第。だから、私に、あなたたちへの答えはない」

リラは頷いてにっこり笑った。

「いいんです。聞いてみたかっただけだから……どっちにしたって、私たちはここで生きるし

けなの」

かない。だったら、ここで生きているって決めている確信犯さんの自信を参考にしたかっただ

そして、フィレーナに言った。

「フィレーナ……なにぼやぼやしてるの」

「え……？」

「祭りだぞ。踊らにゃそんそん……」

リラは、フィレーナの手を引きずるようにして、集会場の踊りの輪に飛び込んで行った。

＊

空に太陽の輝く間……ソレーナの祭りは、いつ果てるともなく続いた。

氷に閉じ込められた船のあの解凍失敗(しっぱい)も、踊るフィアイの人々の喜々とした表情を見ると、単なる祭りの余興にすぎないかのようだった。

数百年……いや、もしかしたら数千年もの間、自然の季節が変わらず巡(めぐ)ってくるように、毎年、営まれ繰り返されてきた祭りは、……たとえ、彼らの未来が大きく変わるかもしれない、船の解凍というこの事件に直面しても……微塵(みじん)もうろたえず、いつもどおりの祭りの高鳴りをフィアイの人々の胸に響かせていた。

やがて、夜が訪れ、闇が忍(しの)び寄ってきた。

氷島の南下は進んでいる。

夏の間は太陽がほとんど沈まない北辺の地で、あるはずのない闇夜(やみよ)がもうすぐ訪れようとし

ていた。

祭りは、相変わらず続いていた。

けれど、あたりはみるみる暗くなっていく。

その暗さも手伝ってか、いつの間にか、集会場の広場には、横になってうたたねする人の数が増えてきた。

前夜、鏡玉の角度を動かすために徹夜で労働したフィアイたちだから無理もない。やがて、フィラーレは口琴を鳴らすのをやめた。

「闇がくれば、私たちはそれぞれ、闇の中で祭りをする……」

フィラーレは、フィレーナたちにそう言ってから、集会場から恋人の男と連れ添って出ていった。

元気に飛び回っていた子供たちも、手拍子や歌で祭りに参加していた老人たちも、闇がくれば夜更かしはしない。

氷で作ったそれぞれの家族の家に帰っていった。

集会場は、恋人や相手のいない若者たちが、残っている。

けれど、そんな若者たちも、やがて、それぞれの相手を見つけ、三々五々、集会場から姿を消していった。

いつの間にか集会場の焚き火の周りには、数えるほどの若者しか残っていなかった。

そんな若者のひとりでもあるリラはぽつりとフィレーナに言った。

「祭りは古代、神の懐で、恋を見つけだし愛を紡ぎだす場所であった……なるほどね」
「なにが……なるほど……？」
フィレーナが聞くでもなく呟いた。
「帝国の図書館にあった娯楽の歴史で読んだの。祭りは神が仕掛けた愛の橋渡し……だそうな……確かに、街の舞踏場で恋を見つけたつもりになって、既製品のような愛のごっこをするよりは、よっぽど健康的で無理がないわ……でも、神さんって、不公平だよね」
「いきなり、何を言いだすんだい？」
「だって、そう思わない？　神様公認であっちゃこっちゃで恋、愛、来いなんちゃって……けど、夫婦ってことになってる私たちには、だれも声をかけちゃくれない。運命を操るのが神様なら、私たちが、夫婦やってること、ほとんど運命的よね。運命的に不自然なことやらされて……せっかくのお祭りにまで、恋や愛まで不自由……こりゃ……たまんないよなあ」
「リラ……」
フィレーナは、リラを見つめた。
「ん……なに？……真面目な顔しちゃって……」
リラは、こくりと首をかげてフィレーナを見返した。
「僕ら、たぶん、これから、ここでフィアイの人たちと暮らしていくことになるんだと思う」
「うん……他になさそうだよね。ほとんど、それも運命的かな？」
「僕は僕が女であることと……みんなに知らせようと思う」

「で?」
「僕らは女と女……夫婦じゃない。それが、みんなに分かれば、リラとこの土地の男の人たちの間に、恋や愛が生まれても不都合はない」
「うん、不都合ではないわ……」
リラは肩を竦めた。
「不都合ではないけれど、恋や愛が生まれるとは思えない。少なくとも私には……きっとね」
リラは、軽く溜め息をついた。
「たぶん、私は、文明になれすぎたんだわ。お祭りの気分で、気持ちがその気になって、その場にいたなんでもない相手に優しい気持ちになって、恋や愛を見つけるなんて、そんなに自然な動物にはなれない……私が、こんな時に恋や愛を見つけるとしたら、それは真似事。自棄になったか、あきらめたか……たぶん、優しい気分で恋や愛には酔えやしない……」
「恋や愛って……そんなに難しいものなのかな」
フィレーナがぽつりと言った。
「単純だと思う。そんなことわかっている。こんなふうに恋や愛が生まれて、家庭を作って、子供を育てて、それが幸せ……そう、思って生きる。そう思い切って、一生を過ごす。フィアイの人たちって本当に素敵な生き方だと思う。でも……」
「でも……?」
「私は、頭でっかち……それが恋や愛のなりたちだとは思えなくなっちゃった。愛とか恋とか

って……それなりの出会いがあって、それなりの葛藤があって、……もろもろあって……その道のりは、綺麗でなくてもいい。お互いにいがみあったり嫉妬したり、お嬢さんやおぼっちゃんの恋愛でなく、大人の打算でつき合う間柄からはじまったってかまいはしない。……でも、そんな中から、芽生えて育っていくもの……恋や愛ってそんなものだと……思うようになっちゃった」

リラは、フィレーナを見つめた。

「きっぱり、確信があるんだ。わたしには……恋や愛って……自然に発生するもんじゃなくてあーだ、こーだ……と、いろいろあって……そうやって作られていくものだってこと……そう、思い込めるようになった私なのに……」

リラは、ふっと笑った。

「いまさら、お祭り騒ぎで、健康的に、恋だの愛だの見つけろったって……そうはいくかの、わたしゃ、単純自然人じゃない。屈折文明人だもん。違う？」

フィレーナは、答えなかった。

答えられなかった。

リラは頷いた。

「やっぱ。神さん、不公平……」

リラはこめかみを人差し指で、軽く掻いた。

「フィレーナが男の子だったら、私たち、相当、波乱万丈で、恋人同士として、夫婦としても、

けっこう、様になっていたのにね」

そして、呟いた。

「こら……フィレーナ……どうして、女なんかに生まれてきたんだよう」

フィレーナは、リラが、恋や愛の話に託して言いたかったことがよくわかっていた。

たとえ、奴隷（クレチア）とはいえ、帝国、いや、人間の近代的な文明にさらされて生きてきた人間は、自然に対して、どんな憧れを持っていても、今さら、元に戻れない。

リラはそう言いたいのだ。

どんなに小川の清水がきれいにみえても、水を飲むときは、水道の蛇口（じゃぐち）に手が行ってしまう。

水道から水が出ていれば、現実にはどんなに汚染されていても、水質検査をしていない小川の清水よりは安心できる。

瓶詰め（びんづめ）のミネラル・ウオーターは、水道よりおいしいと喜ぶが、足元に流れる雪解けの天然水は、煮沸（しゃふつ）しなければ不安だ。

自然の素晴らしさを理解しているのは理屈であって、体は、自然になじんではくれない。

たとえば、フィレーナたち奴隷（クレチア）や異民族と帝国人の間には確かに差がある。

社会的な差別もあれば、今や体質さえ帝国人と奴隷（クレチア）の間には違いができてしまった。

しかし、それ以上の違いが、原始の暮らしを変えないフィアイの民と、文明にそまったフィレーナたちの間に存在している気がするのだ。

フィレーナもそれを感じていた。

弓と槍という同じ道具を使うのでも、殺傷の道具として武器を使いなれたフィレーナとフィアイの狩猟の名人とでは、弓や槍の使い方、いや、弓や槍を使う対象への意識が違う。

フィレーナの武器には自分の身を守るにしても大なり小なり戦う意識と殺意が漂う。

しかし、フィアイの武器には戦いはない。

最低限の生活の糧を得る狩りの意識しかない。

彼らには、相手に敵意や殺意を持って武器を向ける発想がないのだ。

相手と戦い、それを倒せというならフィレーナの腕は、おそらくフィアイのだれよりも勝ってるだろう。

だが、もし、大自然を駆ける獲物を獲るために、武器を使うとしたら、フィレーナは、フィアイの人々のように、巧みに弓や槍や剣を使えるかどうか自信がなかった。

フィレーナは狩猟道具としての武器の使い方をしらない。

そして、フィアイの人々にとってフィレーナのような武器の使い方は、今まで必要のないものだった。

自然の中だけで自給自足できるフィアイの生活の中では、文明の下で暮らす人間に必要な武器の類は、いらないものだった。

……考えてみれば、敵を倒し殺すための武器の使い方は、文明が生みだしたものに違いなかった。

そして、フィレーナが武器に熟達していること……そのこと自体が、文明に染まりきってい

ることに違いなかった。

フィレーナは、氷の海辺に横たわっているギャッピーに聞きたかった。

……ギャッピー、おまえの牙は、いままで人間との戦いに使われてきた。

だが、その牙は、本当は狩りのための使われるはずのものだったはずだ。

でも、ギャッピーは、生まれたときから牙を、好むと好まざるとにかかわらず武器として兵器として使い続けてしまった。

が、今、雪上犬のリーダー犬として狩猟につかおうとする時……戸惑いはないのか？……それとも牙は牙……狩猟としてだろうと兵器としてだろうと、相手をひきちぎり、咬み砕くのは一緒だと、ギャッピーは、割り切って簡単に使い分けることができるのだろうか……。

ギャッピーは、集会場の焚き火に背を向けてと海を見つめている。

その姿は、フィアイの人々の祭りをあえて無視しているかのようだった。

いや、もしかしたら、危険も緊張も、まして殺気など微塵も感じられないフィアイの祭りはギャッピーにとって、その存在を意識する必要もないものだったかもしれない。

他の雪上犬は、明らかに尾をふり、はしゃいでいる。

じゃれあって転げ回っている犬もいる。

宴のご馳走の残りを分けてもらい、腹いっぱいになり、満足気にうたた寝しているものもいる。

だが、ギャッピーは、ただ黙って夜の海を見つめている。

その後ろ姿が、ひしひしとつたわるその孤独が、フィレーナの問いかけへのなによりも雄弁な答えに思えた。

フィレーナはリラに言った。

「きついんだね」

「きついね……」

リラは頷いた。

「たぶん……もしかして、フィラーレさんの言っていた帝国人……子供のことをけっこう本人としては真面目に考えていたんじゃないかな。自然に生きるフィアイを大切にしようと、思ってたかもしれないよ……」

「そうかな……」

「そうだよ。そう思ったほうが、世の中、優しく見れるよ。でも、でもね。……帝国人は帝国人……文明人は文明人……フィアイの人たちとは一緒になれない。思い込みや理屈ではどうしようもないほど違いがある……帝国人は、文明がなきゃ生きられない。フィアイは自然がなきゃフィアイじゃない。でも、私たちは……文明に染まっているのにそれでも、ここで生きるっきゃないんだよね……けど、文明に染まった人間が、自然の中で生きるって、生きたことになるのかな」

そのときだった。

水平線が、ぼんやりと浮かび上がった。

「まだ朝日の昇る時間じゃない……私たちには……」
リラが呟いた。
「朝日じゃない。朝日はあんなに冷たい光じゃない」
フィレーナがかぶりをふりながら言った。
確かに、朝日なら、空全体が明るさを含みこむように、じんわりと、しかし、確実に世界全てを、目の前に浮かび上がらせていくはずなのに、その明かりは、水平線をほのかに差し示してくれるだけだった。
海の向こうから、明るさの正体が姿を現した。
月だった。
月の光は、決して、強くはない。
しかし、その日の月あかりは、北辺のそれとは違っていた。
その明るさは降るように輝いていた星の輝きをにぶらすに十分だった。
若者たちは、呆然と夜空を見上げ、声もでない様子だった。
その夜は、彼らの見慣れていた星と月だけのおぼろな夜のあかりの存在感とは違い過ぎていた。
いつもの夜より、あまりに明るすぎた。
若者たちの間にどよめきが起きた。
明るすぎるその理由が水平線から姿を現したのだ。

もう一つの月……。
そして、さらにもう一つ。
三つの月が、夜のくっきりとした暗闇を、寝呆けた払暁前の空のように、曖昧な闇に変えてしまった。
かつては一つしかなかった月に、二つの人造の月が加わり、原始の夜は、昼との境のしまりを、緩めてしまっていた。
だが、北辺のフィアイの地には、軌道の関係で人工の月が出てこなかった。
こんな夜は噂には聞いていたとはいえ、彼らにとって初めての体験だった。
氷の島は、人工の月が姿を現すほど南に流されてきたのだ。
「これが、南の夜の空なんですね」
いつの間にか、フィラーレが二人のそばに来て、夜空を見上げていた。
「いきなり電影映写館の扉が開けっ放しになったみたい……」
リラが呟いた。
リラにとっては見慣れた夜空のはずなのに、北辺の澄み切った空と比べれば、異様に曖昧で落ちつかない明るさに思えた。
「これでは白夜のできそこないだわ……なにもかもがあやふやでぼんやりしている」
フィラーレの声は沈んでいた。
「空が……いいえ……すべてがなにかに侵されて、呆然としているみたいです」

空を見上げるフィアイの若者たちも、気持ちは同じらしい。

初めは驚きで見開かれていた彼らのまなざしにも、落胆の色がただよい、うつろに空を見上げるばかりだった。

彼らにとって人工の月は、文明の光とも言えた。

だが、それを好ましいとはだれも思っていないようだった。

「空がこんなにしまりがなくてみっともないなんて……」

リラが溜め息まじりに言った。

「いまさら、気がつくなんて……」

「ずーっと僕らはそれに気がついてはいなかった」

フィレーナが呟いた。

「気がついた私たちは、それが平気だった文明にはもう戻れない……かな？」

リラは肩を竦めた。

「そう、思い込ましてくれるならこの空もありがたいけど」

そういいながらも、フィレーナ自身、あまりにぬるく明るい夜空に、いごこちの悪い気味悪さを感じていた。

そのときだった。

そんな空の変化にも無関心に横たわっていたギャッピーが、いきなり立ち上がった。

そして、低い唸り声をあげた。

それは、何者かへの警告と、その者に負けまいとして自らの勇気をふるい立たすための唸りだった。
フィレーナは、かたわらにはずしてあった剣に手をやった。
それは、ギャッピーのそんな唸り声を聞いたときに、フィレーナが必ず見せる条件反射のようなものだった。
フィレーナは、剣をもってギャッピーのそばに駆け寄った。
「ギャッピー……何が……？」
ギャッピーは唸り声を上げながら、岸の向かい側の氷壁を睨みつけている。
フィレーナは身構えながら、ギャッピーに言った。
「あそこには凍った船しかいないはずだ。他に何があるというんだ」
ギャッピーは、唸り声を止めた。
だからといってギャッピーの様子は尋常ではなかった。
総身の毛が逆立った。
ギャッピーは得体の知れぬ恐怖に襲われていた。
必死で恐怖に立ち向かおうとしていた。
ギャッピーの様子がフィレーナにわからないはずがない。
フィレーナは、剣の柄に手をやった。
そして、氷壁を見据えた。

なにもいるようには見えなかった。
だが、次の瞬間……。
何かが起こった。
何が原因なのかはわからなかったが、フィレーナたちの目の前で起きたことは、壮大だった。
一瞬のうちに、氷壁全体が細かいひびにおおわれたのだ。
さらにひびによって砕かれた氷片が、飛び散っていく。
まるで、それは氷壁全体が白い炭塵に変化して爆発したようだった。
粉雪のような氷片が、吹雪のように対岸のフィレーナたちにふりかかった。
フィレーナたちは、吹雪になぎ倒された。
だが、氷片自体はあまりに細かく、さしたる衝撃も打撃も感じられなかった。
まるで、冷たい羽毛に包まれて、柔らかく大地に寝かされたような感じだった。
ただ、目をこらし何かを見ようとしてもあたり一面が白く、何も見えなかった。
やがて、白い氷片のベールが収まったとき、頭上には虹が見えた。
……夜に虹……?
フィレーナは呆然と立ち上がった。
リラは訳もわからず呟くだけだ。
「こんな綺麗なのあり……?」
虹は一つではなかった。

頭上の空一面を幾重にも重なり、まるで、空のすべてが極光色に輝いていた。
さらに、三つ輝く月の周りには、虹が何重も取り巻きそれぞれのスペクトルを誇っていた。
「月の虹だわ」
フィラーレが言った。
「月の虹?」
「太陽の代わりに月の光が作る夜の虹のこと……私も見るのは初めて……」
リラがなるほどと言うように頷いた。
「そりゃ、空気中に水分や塵があって、都合よく光が当たれば、虹はできるわ。それが、太陽じゃなくて月でも理屈は大丈夫。理屈はそうでも綺麗は綺麗……」
だが、月光の虹に感動していられるのは一瞬だった。
さらに信じられない光景が目の前にあった。
先刻まで目の前にあった氷壁が跡形もなく消え、そこに、氷に閉じ込められていた船が浮かんでいた。
その数は二百……月光の虹を背にして大艦隊が浮かんでいた。
虹は艦隊の再生を祝福しているようだった。
「なぜだ……」
フィレーナが呟けるのはその一言だけだった。
「なぜかの理由は、私が後で調べるわ……でも、今は……そんなことより……」

リラの頬を涙が伝わり落ちた。
「船は解凍したわ……やったね！」
リラはフィレーナに抱きついた。
フィアイの人々の歓声が沸きあがった。
一度家に戻ったフィアイの人々もいつの間にか集会場に集まってきていた。
フィラーレが口琴を鳴らし始めた。
それは、フィレーナとリラが聞く新しい旋律だった。
楽器が鳴る。
それも新しい音拍だった。
歌声が響く。
新しい歌詞だった。
踊りが始まる。
新しい振りつけだ。
祭りが再び始まった。
それは、フィアイの人々にとって、夏至の祭りであるとともに、その日から船出の祭りでもあった。
それは船が蘇える日を待ち望んで、長い間フィアイの人々が用意し練習していた祭りだった
今、フィアイの新しい祭りが始まった。

そして、夜空に輝く虹は、人工の月が作り出した曖昧でぼんやりした夜が、自然の夜に対して意地になって精いっぱい見せてくれた華麗(かれい)な夜だったかもしれなかった。

第3章

波濤(はとう)を越えて

曖昧な光を投げかける三つの月が、朝焼けの紅色に溶けていく。
月の虹の中に浮かび上がっていた船団が、朝の光にしっかりと影を持って実体化してくる。
一言で二百を越える船といえても、それは壮大な眺めだった。
氷壁のあった入江にひしめき埋めつくすといっても言いすぎではなかった。
しかも、その一隻一隻が、帆船でありながら何百人乗りなのか見当もつかないほど大きかった。
どの船も、フィレーナとリラをフィアイの土地に導いたあの帆船の、数倍の規模があった。
それぞれの帆柱は、まるで塔のようにそそりたち、その高さを誇っていた。
それが、海に浮かぶ船の集団だと思わなければ、まるで目の前に大きな街が一つ現れたような感じだった。
「やっぱり、夢じゃなかったんだよね」
リラは確かめるようにフィレーナに聞いた。
「ああ……夢じゃない。夢じゃないことが夢みたいだ。うん」

フィレーナは頷いた。
「な～に？　訳のわかんないこと言ってないで行こう」
リラがフィレーナの手を引いた。
「え……？」
「船は見るもんじゃないわ。乗り物でしょう？」
フィアイの獣皮艇が、次々と船団に向けて漕ぎ出していく。
フィラーレが、恋人の漕ぐ四人乗りの獣皮艇から手を振っている。
フィレーナとリラは、フィラーレの獣皮艇に便乗して、船団に向かった。
船団に近づいてみると、さらに船の大きさが想像以上なことに驚かされた。
船体は、遠くから見ると黒い材木でできているようだが、よく観察すると、木材と言うよりも、羊歯や蔦のようなものが何の法則性もなく複雑にからみあっていて、人間が作ったものというより、植物が自然に密集してできあがった壁のように見えた。
そして、海面に触れている部分は細かい気泡が一面についていた。
「これが、フィウイ？」
リラがフィラーレに聞いた。
「ええ、とても藻の一種にはみえないけれど、確かにフィウイだわ。でも、フィウイでこんな大きな船ができるなんて信じられない」
リラは頷いた。

「うん。そして、これが、みんな、生きているなんてね……灯台の資料には、そう書いてあったけれど、実際、こうやって生きている証拠を見るまでは信じられなかったわ」
「生きている証拠？」
フィレーナが聞き返した。
リラは、海面の気泡を指差した。
「あの泡は、たぶん酸素。この船が呼吸している証拠なんだわ。植物は光合成で、二酸化炭酸を吸って、酸素を吐き出すんだって……私、これから、偉そうに説明しちゃいますけれどね。これ、灯台の資料の受け売りですからね。突っ込まないように……」
リラは、携帯通信電算機を開いた。
「今は、冷凍から戻ったばかりだから、呼吸が鈍いけれど、そのうち活発になるわ。資料の能書きによると、この星が出来上がった大昔は、この星には酸素はなかったんですって。でも、何かの拍子で、フィウイのような藻が生まれて、二酸化炭素で汚れた空気を、光合成で酸素に変えていって、海中に巻き散らし、他の生物が生まれるような海にしたわけ。さらに、能書き……この星の酸素が、人間の過剰な森林伐採で危機に瀕し回復不能な現在、唯一、望みを持てるのは、フィアイのような海中植物によって作られる酸素しかない。おまけに酸素のたっぷり入った海は浄化作用があって、海に流れこんだ汚い水をきれいにもしてくれるんだって」
フィレーナは何気なく言った。
「こんな船が、何千何万も海を走っていたら、海はずっときれいになるだろうな」

そして、もう一度繰り返した。
「こんな船が何千何万もか……」
「走らせたらいいんですわ」
フィラーレが、言った。
「え……？」
「もともと、この船は、あなたの国、フィロセラで作られたものです。あなたには作る資格がありますわ」
フィレーナは困ったとでも言いたげに肩を竦めて言った。
「そりゃ、そうかもしれないけれど……資格、三角だけで船が作れるなら、丸はいらない……なんてね」
リラは頭を抱えた。
「あーあ。お聞き苦しいもの聞いてしまった。フィレーナは船が出てきたんでちょっと、舞い上がっているのです。こんなひどいだじゃれ、わたしも初めて聞いたわ」
そして、フィレーナに言った。
「あなたは黙って丸を探せばいいの」
「丸？」
「正解。それもフィロセラ丸……資料によればこの船団に、そう言う名の船があるはずなの。この艦隊の旗艦ですって。その中にこの艦隊に対してあなたがしなければならない正解が詰ま

っているはずだわ」

「リラさん」

フィラーレが、真顔で言った。

「あなたたちの言っていること、どこまでが冗談なんですか」

リラは首を竦めた。

「さかいめなくて、ごめんなさい。私も黙って探します。いいえ、黙っていても見つかります。なにしろ、この中で一番大きな船らしいから」

そうは言ってもカヌーを漕げるフィアイの男たちが総出で探したにもかかわらず、船腹にフィロセラと書かれた目的の船を見つけたのは昼すぎだった。

最も大きい船といっても、船団には巨大な船が多く、近くから見たのでは、どれが一番大きいか判断がつきにくかったからだ。

五本の帆柱の旗艦フィロセラは、船と言うより、浮かぶ城といっていいほど巨大だった。

獣皮艇で近づいたフィレーナは、城壁のような船腹を見上げ、呆然と呟いた。

「これに乗るっていうのかい?」

リラも、ぽかんと口をあけたまま呟いた。

「確かに、象に蚤だね……でも、とりあえず、乗りかかった船には違いない」

乗るというよりよじ登るという表現が適切だった。

フィレーナは、絡みあっているフィウイの隙間にすがりついて、まるでロック・クライミン

グをするように昇っていった。

そして、やっとのことで甲板に出たフィレーナは、下で待つリラたちに綱を投げ、フィラーレの恋人の獣皮艇に乗っていた四人みんなが、甲板に立ったときには夕暮れが迫っていた。

船の上はあまりに広く、扉（とびら）がいくつもあり、どこから船内にはいったらいいのか見当もつかなかった。

「あそこを見て。たぶんあそこ」

リラが、扉の一つを指差した。

扉の前に、硝子（ガラス）の女性像が立っていた。

「どうしてあそこ？」

フィレーナが聞いた。

他の扉の前にも、それぞれ硝子の像が立っていた。

それらは、勇者の形や動物や魚や花の形などさまざまだった。

「これも受け売り……当てになんないわよ……海洋民族では、船は女性として表現されるんですって。船のことはね、彼って呼ばずに彼女っていうの……だから彼女に聞いてみようよ」

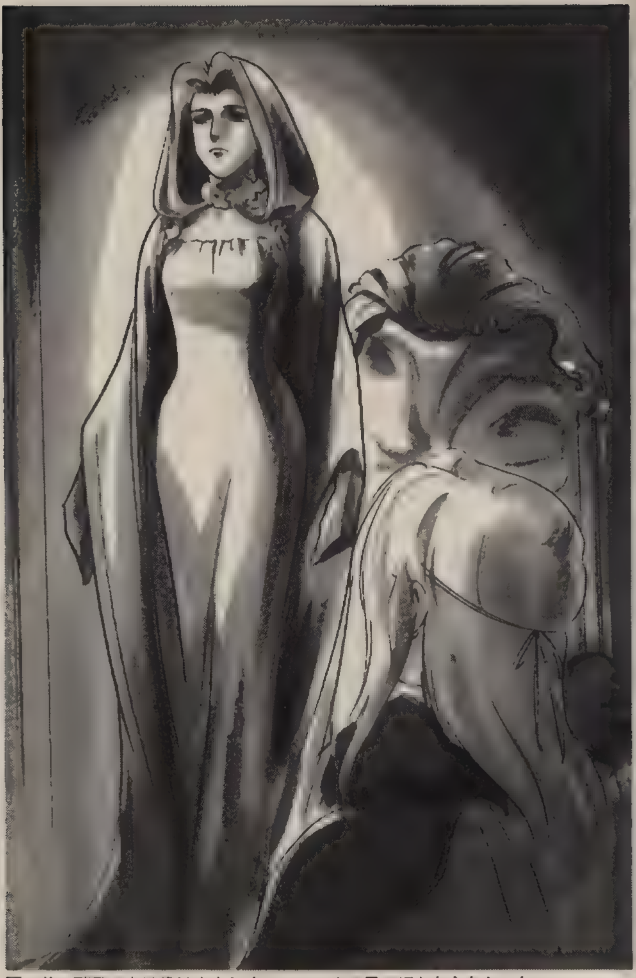
フィレーナとリラは、女性の硝子像の前に立った。

像の台座には、こう書かれてあった。

「四百五十代フィロセラ王妃（おうひ）……フィロセラ大国暦（れき）二千……年か……」

リラが手早く携帯通信電算機で計算して付け加えた。

「フィロセラが滅びる五年前ってことね」
「五年前！……」
フィレーナは、じっと硝子の像を見つめた。
「どうしたの……」
そこまで、言いかけてリラは、息を飲み込んだ。
フィロセラが滅亡する五年前に王妃になった女性……。
フィロセラ滅亡の歳に生まれたのがフィレーナだ。
「その人が……？」
フィレーナは頷いた。
「ああ……たぶんね。……似ているかな。僕に……」
「きれいだね……よかったね」
リラはなんとなくうつむいてしまった。
リラは自分の母親の顔も、いや、名前すら知らないのだ。
そんなリラに気がついてフィレーナは、涙でかすんで見えてくる硝子像をふり払うように、明るく言った。
「ま……いいさ。親はなくとも子は育った」
フィレーナはリラの気持ちを思って感傷を捨てることにした。
そして、硝子像の後ろの扉を見て言った。



扉の前の硝子の女性像はまさしくフィレーナの母にほかならなかった

「リラ。どうやらリラは正解だった」
「え……？」
「お決まりの鍵さ」
扉の浮彫りには、剣の形をしたくぼみがあった。
リラは目を輝かして頷いた。
「だね！」
フィレーナは、くぼみに自分の剣をはめ込んだ。
扉全体が、青白く光り、音もなく開いた。
扉から奥へ通じる通路が照明で照らしだされた。
「入ってよろしいってことね？」
リラが言った。
フィレーナはほほ笑んで頷いた。
それでも一応危険を避けるため、フィラーレとその恋人は甲板に残ってもらい、中にはリラと二人だけで入ることにした。
通路の奥にもう一つの扉があった。
そこにも剣の形をしたくぼみがあった。
剣を入れると扉が開いた。
そこは、灯台の中にあったような書庫だった。

フィレーナが入っていくと中央に人影が浮かび上がった。
人影はフィレーナに語りかけた。
「フィロセラの勇者よ……よく、我らの艦隊を解き放した」
それは立体投影機の映像だった。
映像の人物は、フィレーナの知っている男だった。
その映像はフィレーナが会ったときよりも遥かに若かったが、確かに見覚えのある人物だった。
デビス帝国の首都ボーで、フィレーナに剣を手渡したウトに違いなかった。
「ここまで辿りついたあなたに、もう何も言うことはない。このフィロセラ艦隊はあなたのものだ。帝国撃破を望むなら、この艦隊はあなたの強力な味方になるだろう。この艦隊は、生命のある船で構成されている。もうお気づきだろうが、この艦隊が氷の中から出てきたのは、太陽の光線を受けて活性化したフィウイが再び成長を開始したからだ。この船はフィウイの光合成作用を効率よく熱量に変換する装置がつけられている。もちろん、そのきっかけは、鏡玉で集められた夏至の太陽光線だ」
リラが呟いた。
「でも、北の果てじゃない夏至の太陽では、目覚めさせられなかった」
リラは携帯通信電算機で素早く計算を始めた。
「氷の鏡玉で集めた光はせいぜい、寝ぼけまなこにさせたぐらい。だけど、それでも、船は目

覚めちゃった」
リラは携帯通信電算機の鍵盤をはじいてほほ笑んだ。
「……そか……足りない分を人工の月の光がおぎなったんだわ。寝ぼけまなこで、また、眠りかけたお船のほっぺたを三つの月がたたいちゃったんだ……納得ぅ……ね？」
リラは立体映像のウトに思わず話しかけた。
「と言っても、答えちゃくれないよね……立体映像じゃ」
映像のウトは、記録された通りのことを話し続けている。
「一度目覚めたら、乗員を確保しさえすれば、海と太陽のある限り、フィロセラ艦隊は動き続けることができる。操船技術そのほかの必要事項は、この書庫に収納されている。この艦隊は帝国を撃破するためにフィロセラの全智全能、全勢力をかけて作られた。だが、艦隊の完成した現在は、まだ帝国には海の上に出てわれわれを攻撃できる能力がある。兵力において、武器において、ありとあらゆる面で残念ながら、フィロセラに勝てる見込みはない。だが、何十年か後には、事態は変わるはずだ。帝国は自然の理に反した人種の進化をもくろんでいる。その結果、海は、帝国人種にとって、もっとも苦手とする禁断の場になるだろう。そのときこそフィロセラ艦隊の出撃するときだ。彼らは海に出てこれない。海はフィロセラの世界になる。そして、海から帝国を叩く。さらにその可能性と希望は、海を越えた大陸ドラコニアにもある。そのとき、海を渡れるのはわれわれの艦隊だけだ。われわれはフィロセラ艦隊の出撃する日が必ず来ることを……。そして、フィロセラが勝利する日が来ることを確信している」

リラがぽつんと言った。

「帝国を撃破。フィロセラの勝利かあ……なんか時代はそんな場合じゃない気がするんだけれどな」

フィレーナは呟いた。

「二十年以上前の話さ」

そのときだった。

いきなり、ウトの映像が揺れ、重なるようにもう一人のウトが現れた。

別の時に録画されたウトだった。

ウトは、緊張した表情で語りかけてくる。

「緊急事態だ。しかも最悪の事態といっていい。帝国は艦隊の存在に気づき、フィロセラ攻撃を開始した。無念だがフィロセラ滅亡は必至だ。幸いにして、艦隊の凍結地点は知られていない。フィロセラは滅亡する。フィロセラの王子フィレーナ……ならびに海水浄化装置模型はなんとしてでも守らねばならない。願わくば、いつの日か幸運が味方し、この艦隊が、王子フィレーナにより解き放され、フィロセラ再興が果たされんことを……」

そこまでいってウトの映像は消えた。

フィレーナから溜め息が漏れた。

「フィロセラの王子……フィレーナか……」

「あの人、フィレーナが女だってこと知らなかったんだ」

「僕を秘密ごと連れて逃げてくれたのは、ゼナじいさん。ウトさんは、浄化装置……この剣だった」

「いずれにしろ、フィロセラの末裔は艦隊を蘇らせたわ」

「もうフィロセラはいい」

「え……」

「問題は、僕らが……フィアイの人たちが……人間が……この星で生きられるかどうかだ。もしもこの艦隊がそれに役だつんだったら、僕はそのために使うよ」

フィレーナは、きっぱりと自分自身に頷いた。

「でも……」

フィレーナは、ふーっと、大きく息を吐いた。

「でも、この艦隊を本当に役立てることができるんだろうか……？」

「あらら……」

リラは、肩を竦めた。

「こら、フィレーナ。元気だせ。元気……。どうも最近、溜め息と、疑問台詞が多すぎるぞ」

「まあね。……自分一人のことなら、どうでもなりそうだけど、人類だの生存だの……しゃべるにも辞書が必要そうなややこしいことが、問題になるとすると、ちょっとは慎重にならされちゃう。困ったもんだね」

「読めない辞書を読もうとするとややこしくなる。自分なりの語学力でやるしかないわ。

私たちは、ないものを望んだってどうにもならない。持てるものしか、武器はないんだから……」

「持てるものしか武器はない。確かにね」

「少なくとも、私たちには船がある。少なくとも、氷の上に乗っかって、どこに流されていくのかわからない波まかせの人生とは、おさらばできそうよね」

「波まかせじゃないとしても、船でどこかにいけるとしても……陸地に行けば帝国との喧嘩は避けられない。戦いを知らないフィアイの人たちは、帝国の餌食になるだけさ」

「せっかく、船があっても行くとこなし？」

「行くとこなし？」

フィレーナとリラは、顔を見つめあった。

二人はふっとほほ笑んだ。

同じことを考えていたのがわかった。

そして、同時に声に出した。

「ドラコニア……」

フィレーナは強く頷いた。

「ウトさんは、言っていた」

「うん」

「可能性と希望があるって……」

「うん、うん。リラもしかと聞いたぞ。海を越えたドラコニア大陸って……」
「ドラコニアに行けば、何かが見つかる。そこは、僕らとフィアイが住めるかもしれない」
リラはフィレーナの言っていた言葉を繰り返した。
「可能性と希望……」
「ドラコニアに行けたら……それが見つかるかも」
「見つかるわ。見つけるわ。任せなさい」
リラは自分の胸を叩いた。
「ウトさんが、船の操縦法はこの船の書庫にあるって言ってた。だったらドラコニアの位置の手掛かりだってあるはずよ……わたしゃ、またまた当分、本の虫だな。これじゃ、わたしの頭は、よくなる一方だわ。悪いね。フィレーナ。差をつけて……」
「ひがまないよ。リラが、本を調べている間は僕も助かる」
「あん？……」
「少なくとも、本を読んでりゃ、口が閉じてる。静かだもんね」
フィレーナは、にっこりと笑った。
「それ、どういうことよ。わたしのさえずるような声が、うるさいってこと？」
リラが、つっかかって見せる。
最近、二人の間で少なくなった漫才が、始まりそうだった。
フィレーナは、そんなやりとりをもっと続けていたい気がした。

だが、それでは、立体映像とはいえ生真面目に話しかけてきたウトに対して、申し訳ない気がする。

ウトが期待したフィロセラの再興を、きっぱり否定してしまっただけに、なんとなく不謹慎だと思う。

フィレーナは、ほほ笑みが浮かぶ顔を引き締めて言った。

「遊んでる場合じゃないよ。リラは調べる人。僕は、やらなきゃならないことがある」

リラにもフィレーナが、やらなければならないことがわかっていた。

リラは頷いた。

「だね、おやんなさい。いくら、私が、船の動かし方を見つけたって、ここにある船、全部をフィレーナ一人で動かせる筈ないものね」

「ああ、僕はこの船を僕の船なんて思ってない。この船が動くか動かないかは、フィアイの人達次第だ」

リラは袖をまくり上げた。

「急がなきゃ。みんながいざ、動かしてくれるって段になって、動かし方がわかりませんじゃ私が、恥かいちゃう。調べを始めるわ」

*

その日から、リラは、船の書庫から一歩も出なかった。

夜……。

集会場に、フィアイの民の代表者たちが集まった。
フィレーナの話を聞き終えた、フィアイの最年長者の老婆は、一同を見渡してからゆっくりとしゃべり始めた。
「われわれは、北の果て、氷の海に生き、ちっぽけな獣皮艇とはいえ、船を自在に操り、日々の糧のほとんどを、海から得るフィの民じゃ。風と波と船の扱いは、生まれたときから慣れている。たとえ、大きな船とはいえ、新しい機械じかけでなく、帆に風を受け波の上を走る昔ながらの船ならば、操ることは、この世界のだれよりも向いているじゃろう。だが……わしらには、長い間、守り続けてきたおきてがある」
老婆は、フィレーナの剣を見つめて言った。
「わしらは、戦うことはしない。あんたたちが武器と呼ぶ道具は、わしらが、生きていけるだけの糧を得るための道具じゃ。相手を傷つける道具ではない」
「わかっています」
フィレーナは頷いた。
「僕は、あの船で帝国と戦ってくださいと言っているんじゃありません。ドラコニアという名の大陸が、この海のどこかにある。船でそこに行けば、フィアイの人たちの今まで通りの暮らしが、続けられる土地が見つかるかもしれません」
老婆は、フィレーナを見つめほほ笑んで言った。
「確かに見つかるかもしれん……けれども、フィアイの古い言い伝えにこういうものがある。

船が地に足をつけたとき、争いが起こる」
「船が地に足をつけたとき、争いが起こる？　どういうこと……？」
　フィレーナは、フィラーレに聞いた。
　フィラーレは、首を振った。
「聞いたことないわ。そういう言い伝えは……」
「若い者が知らなくても仕方あるまい」
　老婆はほほ笑みを絶やさず言った。
「フィアイが、船で他の土地に行くこともなく、今の北の果てに住みついてから何千年も経つからのう。だが、大昔から、北の果てのような、獲物の少ない苛酷な土地に、好んで住みつく訳はない。海の民は、もともと、船に乗り、理想の土地を求めて世界中の海を渡っていく性質がある。新天地を求めて、いつでも飛び出していく出たがりの民じゃ。土地を耕して、その土地にしがみつく陸の民とは、まるで違う。だがな、われわれにとって新天地といっても、新しい土地の発見といっても、そこには必ず、元から住んでいる人々がいる。彼らにとっては、わしらのような船でやってきて、その土地に住みつこうとする民はやっかいで邪魔なよそものにすぎない。わしらがいくら仲よく暮らそうとしても、仮に、住みつく土地の代わりに代価を支払ったとしても、よそものはよそもの……しかも、わしらのように戦いを避ける民はめったにいない。ほとんどが、力ずくで、土地を奪おうとする連中だ。だから、土地に永住するものにとってよそものの船が来ると言うことは、戦いを意味する。そして、わしらにとっても、船が

地に足をつけたとたん、船は海をわたる道具から武器に変わる」
「でも、わたしたちは戦いを好まない」
フィラーレが言った。
「そのとおりじゃ。海の民が戦わずして、永住できる理想の天地……それは、戦う相手のいないところ……人のいないところ。人の住めないような苛酷な土地……だからフィアイの里のような北の果てしかなかった。だが、そんな土地に住んでいたからこそわれわれは、海の民の中で、最も長く幸せに安全に生きのびることもできたんじゃ。海の民は本来、船さえあれば広い海に出たがる民族じゃ。しかし、それだけに他の民と戦うことも多くなる。それを防ぎ、わしらの暮らしから戦いを遠ざけるには、海を渡るような大きな船を持たぬこと……そうやってフィアイの民は生きてきた」
「しかし、今度という今度は戦いを避けても、われわれは滅びる」
男が立ち上がって言った。
それは、フィラーレの恋人だった。
フィレーナは、その男が、まともに口を開くのを初めて見た。
猟に出掛けるとき以外は、いつも、そう遠くないところからフィラーレを見守っていたこの男は、フィレーナがフィラーレと話すとき、必ず視界の片隅にいた。
いつの間にか、フィレーナがフィラーレにとって、フィラーレと話すとき、この男の姿がどこかにないと落ち着かない気分にすらなっていた。

だが、日に焼けた赤銅色の逞しい体のこの男は、寡黙でただの一度も、フィレーナと面と向かって話したことはなかった。

だから、いきなりしゃべり出したこの男の話す声や言葉に、いささかの驚きと新鮮さを感じた。

男の声は、無理をして声を出しているように見えないのに、集会場に集まった人々の隅々にまで届く凛とした声だった。

「この氷の大地が溶けて消えれば、船に乗って戦おうが戦うまいが……われわれは滅びてしまう。われわれは、滅びの日を迎えるために生まれてきたのではない。われわれは生きるために生まれてきたのだ」

老婆は、ほほ笑みを絶やさず頷いた。

「そのとおり。このままではフィアイの民は、氷と一緒に消える運命にある」

男は、続けた。

「われわれは、船があれば、海に漕ぎ出す海の民だ。われわれは戦いを好まない。だが、船があれば、船とともに進む。船とともに生きたい」

老婆が言った。

「戦いが避けられなくてもか」

「戦いがあるかどうか、それは行ってみなければわからない。だが、船と海と望みがある限りわれわれは海に漕ぎ出す。おれは、船に乗りたい。海の果てに行ってみたい」

「戦いはしない。そのフィアイのおきては破られるのか」
「船があれば海に出る……それもフィアイの変わらぬピッツ（生き方）だ。船がありながら、海に漕ぎいでぬフィアイはもはやフィアイではない。違うか？」
老婆は立ち上がった。
そして、まるで、儀式のように、抑揚をつけて言った。
「確かにそのとおりじゃ。だが、今までは戦わぬのがフィアイだった」
「戦うというのではない。われわれは船で海を行くというのだ」
男も抑揚をつけた口調で答えた。
老婆は頷いた。
「われわれ、海に出ず老いた者はやがて消える。しかし、フィアイの未来は、若きものとともにある。若きものが決めるがよかろう」
男は頷いた。
「おれは、海に出たい。みんなはどうだ！」
間髪をいれず、集会場の若者の一人が叫んだ。
「海に出たい！」
「おまえだけか？」
男の声が響いた。
たちまち、他の男が叫んだ。

「馬鹿を言うな。フィアイは、おまえだけじゃない」
「おれはフィアイだ」
　別の一人が叫んだ。
　男は頷いた。
　そして、叫んだ。
「海へ行くか」
「海へ行く！」
　答えが集会場に広がっていく。
「海を渡るか」
「海を渡ろう！」
　答えが集会場に渦巻く。
「フィアイは、海へ！」
　一同は唱和する。
「フィアイは船と……！」
　老婆は、フィレーナにほほ笑んだ。
「と……いうことじゃ」
　フィレーナは思わず言った。
「ドラコニアに行っても、フィアイの人たちに、戦いはさせません」

老婆は笑顔で首を振った。
「いいんじゃよ。あんたがそれを気にせんでも。若い者たちは船に乗りたい。広い海に出たい。それだけじゃ。それが、フィアイのビッツじゃ。わしゃ、なんとなくうれしいよ」
「と、いうことで……」
男が盛り上がっている集会場の雰囲気とはうって変わった冷静な表情で、フィレーナに言った。
男がフィレーナに声をかけたのは初めてだった。
「あんたの船をお借りしたい。大切に使うつもりだ」
「もちろん。自由に使ってくれ」
「ドラコニアという大陸に、可能性と希望がある。あなたはそう、言ったね」
「真実はわからない。でも、帝国の支配する大陸に行くより、わからないだけ、可能性があると思うんだ」
男は頷いて言った。
「ドラコニアに行こう。大昔、フィアイの民は、戦わずにして北の果てに平和な地を見つけた。われわれも、その大陸で、そんな土地を得られるかもしれない」
「ああ……僕もそれを願っている」
男は、フィレーナを見つめて初めてほほ笑んだ。
「フィレーナ。あんたはいい男だ。フィアイの人間でなくても、フィラーレが安心していられ

る男だ……」
　男はフィレーナの手を握った。
「おれの名は……フィンドナ……」
　フィレーナは、海洋民族に伝わるその意味を呟いた。
「海の風……」
　フィラーレがほほ笑んで頷いた。
「ええ……彼は、その名のように、海の風を読むのが得意……。風の吹き方を見れば、その日の波の動きが手に取るようにわかるの。
　でも、やっと自分の名をあなたに言ってくれたわ」
　そういえば、フィラーレすら、男の名を、フィレーナに告げたことがなかった。
「フィアイの男は誇り高くてね。相手を男として認めなくては、自分の名を相手に教えないし呼ばせもしない。話しかけもしないの」
「認められたのか。僕は男として」
　フィレーナは、溜め息がでそうだった。
　いくら隠しているとはいえ、今まで、フィレーナを女と疑った男がどれほどいたろう。
　それほど、自分には女らしさのかけらが見えないのだろうか。
　今は、女と見破られても構わないとすら思っているのに……。
「あなたが、フィアイの人たちを助けるために、帝国と戦ったときも、男として認めようとし

なかった」
「どうして……」
「人をあんなに殺せる男は、女も大切にしない。女を大切にしないのは、男ではない。フィラーレを任せられない」
「もし、おれが死んだらおれが見込んだ男にフィラーレの幸せを頼む」
「フィラーレさんを任せられないって……？」
「あ……それって……ちょっと……」
フィレーナは、慌てた。
フィラーレは、吹き出した。
「気にしないでいいの……。しきたりみたいなもの」
「しきたりにしたって、勝手に死んだ後の相手を決めるなんて……フィラーレさんの気持ちを……女の人の気持ちを無視していない？」
フィラーレはふっと溜め息をついた。
「文明に慣れた恋愛からみればそうでしょうね。でもね、自然は生にも溢れているけれど、死にも溢れている。いつ死が訪れるかわからない。こんな世界で最大の愛情は、自分の死んだ後にも愛する相手の幸せを考えること……」
男は真顔で言った。
「おれは、やたらな男を男とは認めない」

あまりに真剣な顔なので、フィレーナはどう答えていいのかわからない。
「ありがとう……といっていいのか……」
「わたしはうれしいな」
フィラーレはいたずらっぽく笑った。
「フィンドナは、私と一緒になってから、だれにも自分の名を呼ばせなかったの」
「おれが男と認める男がいなかったからだ。だが、おまえは、船を解放し、しかも、われわれのために船を使おうとしている。他の民なのに、おれたちの民を気づかってくれている。おまえは、いい男だと思う」
「他のだれよりもまず、あなたを選んでくれたのがうれしい」
フィレーナは苦笑するしかない。
「なんだかだしにされているみたいだね。のろけの……」
「かもしれませんね」
フィラーレは嬉しそうだった。
「のろけではない」
フィンドナは、あくまで真面目な表情だった。
「もし、あんたさえ認めるなら、あんたが先に死んだら、あんたの妻の幸せは、このおれが命懸けで守る」
「え……？」

フィレーナはフィンドナを見詰め返した。
「あんたさえよければだが……」
フィンドナはもう一度言った。
……フィレーナは、そのとき、男がなぜフィレーナを男として認めたかわかった気がした。
フィンドナは、もしかしたら船出に死を覚悟(かくご)しているのかもしれなかった。
男が何かを覚悟した目を、闘技士(バトラー)だったフィレーナは見慣れていた。
今の今までフィラーレを託す男を認めなかったこの男が、フィレーナを選んだのはそれが理由の気がした。
フィレーナはだから、リラには悪いと思ったが、フィンドナにこう言った。
「僕が先に死んだらリラを頼むよ」
そう言いながら、フィレーナはフィラーレが、とてもうらやましい気がした。

*

「だれか……私の噂(うわさ)をしているのかな……いや……寒いからかな?」
リラはくしゃみをしながら、書庫の本を次々に調べていった。
そして、帆船の操船法をフィアイの言葉に訳していった。
操船法を聞いたフィンドナは、信じられないとでも言ったように首をふった。
巨大な船体でありながら、操作はきわめて簡単な帆船だった。
数百人を乗せることのできる大きさでも操船は、十人もあれば可能だった。

船を動かす動力装置はなく、前進も後退もすべてが風の力を利用して行われるように作られていた。

まるで、帆が一枚で走る軽量帆船（ヨット）のように、一枚の帆の操作で、五本の帆が連動して風を受けた。

しかも、それは、機械ではなく、強度のある藻フィウイを素材にしたロープと歯車で梃（てこ）と滑車（かっしゃ）の簡単な力学を使い、巧みでありながら単純に連動されていた。

精巧な工学機器はほとんど使われていないから、故障しても部品がないからといって動かなくなる心配はほとんどなかった。

フィウイと簡単な工具があればすぐに加工できる部品で構成されていた。

仕組みは、子供が作る模型の帆船のように単純だったのだ。

錆（さ）びたり疲労する金属は一切使われていず、金属を思わせる部分はすべて強化硝子か、通電性硝子と絶縁硝子の組み合わせでできていた。

御丁寧（ごていねい）に各艦に、対熱陶器（とうき）で作られた硝子炉（ろ）があり、壊（こわ）れた硝子の部品もすぐに溶かし再生出来るようになっていた。

さらに、艦内に明かりや熱を作り出すエネルギー源は、フィアイの藻が光合成で起こす化学反応を基にしていたから、太陽光線を受ける限り、無限に作り出されると言ってよかった。

しかも、それらの電気系統が故障しても、船の基本的な操船にはなんら支障ないように作られていた。

なによりも驚いたのは、船体のどこに打撃を受け損害を受けても、沈むことのないバランスのよさ……仮に、帆柱をすべて壊されても、船体そのもので波や風を受けて動けるほど軽くできていた。

おそらく、フィウイが光合成によって作り出す酸素が、船体の至るところに、バランスよく放出され、船体を保つ膨大な浮力を作り出しているに違いなかった。

操船法は、ただちにフィラーレとフィンドナによって、フィアイの人々全員に教えられた。

それは女も子供も動くことができるなら老人すら覚えられるほど簡単だった。簡単にできないとしたら、操船自体よりも風と波の動きを読み、いかに効率よく迅速に海の上を進めるか、風に対する帆の向き、波に対する舵の向きをどうするかだった。

こればかりは、経験と訓練がものを言う。

数カ月にわたって実際の操船訓練が行われた。だが、それも、日常を自然の中で生きてきたフィアイの人々にとって、文明に慣れた人間ほどの苦労はいらなかった。

風や波、雨や雪、そして気温、すべての気象現象が生活に影響するフィアイの民は、もともと、天候を見るのに敏感だった。風や、波を読むと言うより、風や波が彼らを動かしているという表現が適切なほど、フィアイの人々は敏感に反応して帆を操れるようになった。

むしろ、苦労させられたのはフィレーナだった。

戦闘に対しては、並はずれた動物的な勘を持っているフィレーナも、相手が、人間のようにはいかなかった。
フィアイの人々についていくのがやっとという有様だった。
とうとう、見るに見兼ねたフィンドナがフィレーナに言った。
「人には、向き不向きがあるようだ」
フィレーナは頷くしかない。
「おまえはいいやつだ。だから、いいやつのままでいてほしい」
「このままじゃ悪いやつか？」
「悪いやつとは言わん。だが、足でまといはみっともよくはない」
「はっきりいうね」
「おまえは、船を解放し、皆から尊敬されている。尊敬され続けていてほしい。尊敬されるはずの男が、みっともないと、今までおまえを尊敬していたやつの自信が失せる。まさかのときにおまえが頼りにならないと思い、動揺する。これはいいことではない」
フィレーナはうなずくしかない。
「おまえは、もう船が動く理屈は十分、わかっているはずだ。おまえは、もう指図するだけでいい。後は、われわれがやる」
フィンドナは、安心しろとでも言うように、フィレーナの肩を叩いた。
「でも、僕は、きみらの指導者でも長老でもない。いくら船を解放したからと言って何もしな

いで、あんたたちが一生懸命動かしている船に便乗する気はないよ」
「おまえはいいやつだ」
フィンドナはもう一度言った。
「何かをしたいならば、おまえの得意なことを教えてやってくれ」
「得意なこと……？」
「戦いのやり方。武器としての槍や弓の使い方」
フィレーナは、フィンドナを見返した。
「僕はフィアイの人たちに、戦いは、させたくはない」
「戦う気はない。だが、船が行った先、ドラコニアで戦いがなしで済むとも思えない」
「見つからないっていうのかい。人間のいない平和な土地が……」
フィンドナは頷いた。
「人間がいない土地は、人間にとって住めない土地だ。
フィアイの里は、他の人間には住めないはずの土地だ。
そこにまで帝国軍はやってきて、わずかな食べ物を得るためわれわれに戦いを仕掛けた。
他の人間が数千年も入ってきたことのない、人間の住めない土地にまで来て食べ物のために戦う。
人間はそんなことを始めるまで、おいつめられている。
他の大陸だからと言って、同じ星だ。

どこの土地だからといって人間が追いつめられていることには変わりないだろう。
われわれ、フィアイは戦う気はない。
だが、相手はどうだ？」
「わかった」
フィレーナは頷いた。
そして、次の日から、フィアイの人々に武器の使い方と戦い方を教え始めた。
だが、フィレーナは、フィンドナが言った言葉を繰り返さねばならなかった。
「人には向き、不向きがある」
フィアイの民は、フィレーナが思った通り、まるで戦いに向いていなかった。
槍の練習をする。
練習だとわかっていても、槍を突き出す瞬間、相手が人間だと思うだけで、目を閉じてしまう。
弓の練習をする。
的はわらの人形だ。
だが、人間だと思うだけで、指が顫え矢はあらぬ方向へ飛んでいってしまう。
フィレーナは黙って戦いを教え続けた。
だが、気持ちは決めていた。
フィアイの人々に戦闘はさせられない……。

もしも、戦いが起こるようなことになれば、何万人のフィアイがいようと彼らは戦えない。
犠牲（ぎせい）が増えるだけだ。
戦うのは僕一人だ。
僕一人しか戦えない……。

*

帆船フィロセラの書庫に眠っていた資料のすべてを調べ終えたリラは、艦隊の全貌（ぜんぼう）を知り、いまさらながらそう呟いた。
「こりゃ、えらい艦隊だ……」
艦隊の総数は二百四十……。
各帆船には最小の帆船でも五百人は乗船できる。
総員十五万の兵を乗せ、半永久（えいきゅう）的に、海を航海できるのだ。
食料を魚類に絞（しぼ）り、フィウイの藻から発生する酸素を求めて船の回りに集まってくる魚を考えれば、艦隊の進むところ漁場ありで、食料もさほど困ることがない。
しかも、それぞれの帆船は、おのおの五十を越える小帆船を収容している。
戦いが海上で始まり、小帆船を発進させれば二百四十の艦隊は即座に一万を越える大艦隊に膨（ふく）れ上がるのだ。
体質的に海を苦手にする帝国は、おそらく、たいした艦隊をもっていないはずだから、あきらかにフィアイの民とフィレーナは世界最大の艦隊を持っていることになる。

「でも、海の上にいてこその艦隊だもんなあ」
帝国軍が海に出てこない限り、戦いにはならない。
もし、フィアイに十五万の兵士がいたとして、帝国に上陸させても、帝国軍が相次ぐ反乱で疲弊（ひへい）したとはいえ、まだまだ何百万人はいる。
各地に点在しているとはいえ集結されたらとても、陸戦での勝ち目はない。
帝国軍がわざわざ海にでも出てこない限り、まともな勝負にならないだろう。
だが、戦場を苦手な海の上にするような馬鹿な作戦を、帝国がとるはずがないのだ。
「やっぱり、ドラコニアより他に行き場はないんだわ」
リラは、ドラコニアの資料を探した。
そして、精密な海図を見つけた。
ドラコニアは。そこにしっかりと描かれていた。
海図によれば　この星の南半球の極点付近を覆（おお）っている巨大な大陸だ。
だから、この星のどんな地点からも、海を南に下りさえすれば、距離と時間の差こそあれ、いずれは辿り着くことのできるはずの大陸だった。
太陽の位置から計算した現在の氷の島の位置から、ドラコニアの一番近い場所は、順風下の帆船の速度で、ほぼ一カ月の距離だった。
ただし、大陸の内容については一切の記載がなかった。
ウトの言う可能性と希望が、いったいなんなのか、具体的な資料はなかった。

海図にはドラコニアの海岸線だけが、詳細にえがかれ、灯台の位置も描かれていたが、内陸部は全く空白だった。

海図は海洋王国フィロセラのものだ。

この星の海を股にかけて走り回ったフィロセラが、大陸の海岸線しか知らないのは、いかにも不自然だった。

きっと、大陸の情報は、山のようにあったに違いない。

だが、それが綺麗、さっぱりないとすれば……だれかが、意図的に消したとしか思えなかった。

……なんのために、どうしてそんなことをしたのか……。

帝国にも帝国機密があるように、これは、フィロセラの機密事項なのだろうか……。

いずれにしろ資料は何も答えてくれない。

手掛かりになりそうなのは、灯台だけだ。

それに氷の島の状態は、けっして楽観出来るものではなかった。

氷の溶けていく速さはどんどん進んでいる。

単純計算では、完全に溶けるまで数年を要するかもしれないが、それは、あくまですべての氷が水になって消えるまでの時間だ。

その前に、氷の島の形を支える氷が溶け、島は割れ、砕け、人間が住めるような状態ではなくなってしまう。

携帯通信電算機で予想してみると、一年も経たないうちに、島はふたつに割れるという結果が出た。
しかも、それは、ゆっくりと割れるのではなく、まるで地震のようにある日、突然やってくるだろう。
そして、海に崩れ落ちた氷は、膨大な量の海水をおしわけ、巨大な津波になって、二つになった氷の島を洗い流すだろう。
おそらく、島の上に乗っている、フィアイの人々の被害ははかりしれない。
最悪の場合、生存者が一人もいない場合も考えられる。
その日は、そう遠くない明日に迫っている。
「行ってみるしかない……ドラコニアに……灯台を目安にして……でも、きっと帝国の大陸よりはましだわ。なにしろ、フィロセラの言う可能性と希望のある土地なんだから……。うん」
リラは、自分で自分に頷いた。
フィレーナをここまで導いてきたのはやはり灯台だった。
灯台を海洋民族はフィホーパーと呼ぶ。
……海の希望という意味だ。
今はその言葉を拠り所にするしかない……。
リラはそう思うのだった。

＊

そして……。
その今がやってきた。
十隻の帆船が、錨を上げた。
フィアイの人々の歌声が、入江にこだまする。
船出の歌だ。
十隻の帆船には、フィンドナがえりすぐった操船者が、男女を問わず三十人ずつ乗っていた。
やがては、二百四十隻ある帆船の船長になるかもしれない候補者たちだ。
目的地は、いうまでもなくドラコニア……。
氷の島の人々がドラコニアに移住できるかどうかを、調べる航海だ。
リラの計算による航海の予定は四ヵ月。
氷の島が溶け、人々が危険にさらされる前に帰ってこなければならない。
四ヵ月が許されるぎりぎりの期間だった。
十隻の船は、小回りがきき、速度のでる中型帆船が選ばれた。
先頭を行く旗艦は、フィレーナとリラをフィアイの土地へ導いたあの帆船が選ばれた。
船の名は「フィレーナ」。
「僕の名前はもういいよ。だいいち、ろくに操ることもできないんだからね。この船にぴったりする別の名前をつけてくれないか……」

フィレーナは、フィアイの人々にそう提言したが……。

「別にあんたの名前を意識しているんじゃない。フィレーナの意味は海の魂……これほど、われわれの旗艦にふさわしい名はないんじゃないか？」

フィンドナがそう答えた。

フィアイの人々も口々に賛同した。

もちろん、フィンドナの言葉とは裏腹に、その気持ちは、「フィレーナ」の名の中に、フィアイの地に船をもたらした若い勇者を思わない者はいなかった。

彼らにとって「フィレーナ」は「海の魂」という単なる言葉でもはなく、もちろん、船の名でもなく、フィレーナ本人の意味だった。

その証拠に、フィアイの人々が用意した、旗艦「フィレーナ」の旗は、海を背にした狼が描かれていた。

いうまでもなくそれは「狼のフィレーナ」と呼ばれていたフィレーナを象徴し彼の連れている狼犬ギャッピーをモデルにしてデザインされたものだった。

以後……その旗のたなびくところ、フィレーナあり……という印に使われるようになった

その旗は、やがて「海の狼」とあだなされるようになった。

今、旗艦「フィレーナ」の帆柱に「海の狼」がたなびいている。

フィレーナ、リラ、フィラーレ、そしてこの航海の指導者フィンドナが旗艦に乗り込んでいる。

そして狼犬のギャッピーも、フィレーナのかたわらにつき添っていた。

旗艦「フィレーナ」は帆を精いっぱい、風に膨らませ、九隻の帆船を引き連れ外海に向かう。

わずか数か月の訓練だというのに、操船者の腕は確かだった。

入江に浮かぶ、氷の破片を巧みにかわしていく。

十隻の船団は外海に出た。

そこは沿岸では想像もつかないうねりと風の支配する世界だった。

その中で、赤い汚潮と青い海が、まだらに重なり合って互いの勢力部分を競っていた。

ある日は見渡す限り紺青の海があるかと思うと、空まで腐り落ちてきそうな臭気ただようどす赤い海の日もあった。

海は今まさに、清澄と汚濁が戦っていた。

すでに帝国のある大陸は汚濁が支配している。

残された海が汚濁に支配されれば、だれの目にも生命の滅亡は明らかに見えた。

海は、その姿で、この星の今を語ってくれていた。

船団はそんな海を南へ向かってひたすら進んだ。

南の果てに、フィアイの人々にとっても、フィレーナにとっても、未知の世界であるドラコニアが待っているはずだった。

可能性と希望が、この海の向こうに本当にあるのか……。

だれもが願いを込めて水平線を見つめていた。

第4章

海狼、吠える

デビス中部高原地方ジャンガー。

硝子の城……その皇帝の間で、今日も七人の皇帝種は、まるで、ひとごとのように淡々と今後の予想を話していた。

「もし、フィレーナが、ドラコニアに辿り着けば……」

皇帝種の一人が溜め息まじりで言った。

「フィレーナが望むと望まざるとにかかわらず、帝国に匹敵する力を持つことになるでしょう。今、海の上には彼らしかいない。フィレーナは、海の覇者というわけです」

最年少の皇帝種が答えた。

皇帝種たちは、それぞれに、話し出した。

「陸の覇者、帝国と海の覇者フィレーナ……決戦の条件は揃ったわけだ」

「フィレーナにその気があればですがね」

「その気がなければ……」

「彼らはフィロセラの船に乗って、浮き草のように海をさ迷う流浪の民を続けることになるで

しょう」
「いつまでかね……」
「地上の脅威、つまり、われわれ帝国が滅亡するか、もしくは帝国を滅ぼせる確信を持てるまで、彼らは地上に近づこうとはしないでしょう」
「それまでは海と陸とで睨み合いですか？」
「それは困る。そのままずるずると時が過ぎていけば、この星の許容人口は減るばかり……もはやこの星は、だれが継ごうと回復不能なほどに、疲弊してしまう」
「それに、もしも、われわれの超皇帝種に人類を継ぐ資格が認められたときは、フィレーナは、反体制のきわめて危険な存在になります」
「フィレーナに人類を継ぐ資格があろうとなかろうと、決戦は急がねばなりません」
「いずれにしろ、フィレーナが、ドラコニアで見たもので、どう決意するかです」
「帝国にとっても、最後の戦いが近そうですな」
　一人が無表情に言った。
「しかし」
　両性の皇帝種が、呟いた。
「最近のわれわれの話題に、超皇帝種はほとんどでてこない。本来、超皇帝種はわれわれの最大の期待なのに、われわれはまるでもう見捨てているかのようですな」
　最年長の皇帝種が、両性を見返して言った。

「あなたこそいつも、皮肉な目で、われわれを見ている。まるで、人類の一員でないように、高みから見ている。あなたは、超皇帝種を見捨てるというより、すでに人類を見捨てているかに見えますね」

両性の皇帝種の顔にいつもの皮肉な微笑は消えていた。

「わたしは雌雄両性です。男でもなく女でもない。人類というものの中にある最大の差……性別を克服し、人類そのものを見つめられる種として生まれてきた。けれど、それは、机上の理屈だ。そうでしょう？　雌雄の差のない人類を、そもそも人類と呼べますか？　そんな私に、人類を愛し、見守れといえますか？」

皇帝種のみんなが両性を見つめた。

皇帝種が言うはずのない台詞だった。

人類を存続させる、それが、皇帝種の生まれたときからの使命だった。

その方法に疑問が出てきているにしろ、かれらの存在の基盤にあるのは、人類に対する愛だったはずだった。

それが、帝国の人類愛だった。

そして、その帝国人の中で、今望みうる最高の進化の形である皇帝種の中から、彼らの人類愛を疑う言葉が出てきたのだ。

両性の皇帝種は、自分を見つめる他の皇帝種のとまどいがわかっていた。

「私は今、人類と呼ばれる生物の滅亡の時を観察しているつもりです。だからといって、人類

を消したいと思っているわけではない。観察する対象を殺したいと思う学者はいない。どんな境遇に追い込まれても、生き続ける能力を見せて欲しいと思う。しかし、それは、強力な病原菌を見つけた細菌学者に似ています。彼らは病原菌を駆逐する方法を試しながら、どこかで感じているそうです。病原菌よ、こんな方法で消えてくれるな。もっともっと強くあって欲しいと……今の私はそんな気持ちなのかもしれない。これも愛ですかね……？」

皇帝種たちはしばらくの間、沈黙した。

皇帝種のだれもが、多かれ少なかれ、両性の皇帝種の持つ人類への感じ方に、身に覚えがあるような気がしたからだ。

そして、だれもが思う。

……人類の滅亡の時に、観察者でいられる人間は人類と呼べるだろうか……

気を取り直したように、一番若い女性の皇帝種が口を開いた。

「われわれが、超皇帝種よりフィレーナのほうを話題にするのは、きっと意外性があるからですわ」

「確かにね……観察するには興味ぶかい。フィレーナと違い、超皇帝種がどんな人類になるか、われわれには予想がつきますからね。どちらにしろ、私たちは、今となっては、観察者です」

両性の皇帝種はにこりともせず言った。

＊

南部海岸地方は静かだった。

ほとんど戦闘は起こっていなかった。
戦闘を逃れ南部海岸地方に流れ込んでくる難民の数も、南部海岸地方に辿りつく前に、帝国軍や暴徒化した他の反乱軍の餌食になり、さほど多くはなかった。
なにより、帝国軍が南部海岸地方に進軍してこないのが、戦いのない理由だった。
「明らかに帝国上層は、われわれを、生かそうとしている。帝国はわれわれをフィレーナのために残しておきたい訳だ。どうやらあんたの言っていることは本当だな。当分退屈が続きそうだね」
広げられた南部海岸地方の地図を前にして、バンニルは大きく伸びをしながらネストに言った。
「だが、ここにフィレーナが現れれば、そのときが戦いの始まりだ」
ネストが言った。
「そして帝国とフィレーナたちのどちらが人類を継ぐか……その答えが出る」
オルカが吐き捨てる。
「どちらにしろふざけた話だ。おれたちの反乱はこの星の人減らしのために利用されていたちゅうことだからな……」
この星の人口を減らさなければ、すぐにも人類は滅びる……。
ネストとテスの知っている限りの帝国機密は、すべて、バンニルとオルカに伝えられた。
「夢も希望もないとはこのことだな。奴隷の解放も自由も、帝国を倒しての天下盗りも、肝心

の人間が滅びちまうんじゃ、どうにもならない。おれは何のために、帝国と戦ってきたんだ」

バンニルは苦笑した。

「しかし、まあ、すてたもんでもない。あんたにはまだ可能性がある。フィレーナが勝てば、同じ異人種のあんたにも、この星を継ぐ資格のある人種ということになる。だが、この人のような帝国人は、戦いに勝とうが負けようが、人類が生き伸びるための捨て石にすぎないことになる」

そして、ネストに言った。

「捨て石同士、少し話さんか？」

＊

バンニルの天幕から見える南部海岸地方の海は、今日も汚潮で赤く染まっていた。

「ここもだんだん青い海が見られなくなった」

バンニルは、硝子杯にいれた酒をネストに勧めた。

「酒は当分飲まないことにしている」

「未来のない優秀種のくせに健康を気遣うのか」

「ここまできたら生きて、この顚末を見届けたいんでね」

バンニルは、ネストに勧めた酒を一気に飲んで言った。

「ま……おれも、同じようなもんだ」

「帝国人だったのか？」

「おれは流策士だ。おれを雇ってくれるやつがいれば、そこに流れていって、戦いに勝てる作戦をたてる。そこに敵も味方の関係はない。さまざまな状況で戦いに勝てる作戦を作れるかどうかがおれの興味だ。状況が不利ならば不利なほど、作戦をたてるのは面白い。たぶん、おれは戦いが好きなのかもしれない。ただし、どれもこれも、おれが戦う戦いではない。他人の戦いだ」

「あんたは自分のものではない戦いの作戦をたて……わたしも自分の戦いではない戦いを仕組む……策士も闘技作家も同じか……。確かに、私も、ただたんに戦いが好きなだけかもしれない。戦いに、参加しているように見えても、他人の生存を賭けた戦いに首を突っ込み他人の生を弄んでいるだけかもしれん」

バンニルは苦い笑みを浮かべた。

「われわれは、今度の戦いでも、結局は傍観者にすぎん。いや、今度に限らずいつでも傍観者だった」

「われわれはただの傍観者かね……」

「それがな……」

バンニルが呟いた。

「人類がどうなろうとかまわんが、勝たせたくてたまらんのだよ。フィレーナに」

「確かにそういう気にさせる子だ。あいつは……」

「なぜかな……？」



「ここもだんだん青い海が見られなくなった」バンニルはネストに語りかけた

「これも、結局は、野次馬的なひいきにすぎないのか……」
「わからん、ただ、あいつと関わると自然に考えてしまうことがある。あいつと関わっている自分とは何か……この世界における自分とはなにか……おれはそれを考えずにはいられない。すくなくとも、ある事柄に関して自分の存在を意識することは傍観者の態度じゃない。フィレーナは関わった相手を、どうやら傍観者の位置だけに置いておかないやつのようだ」
「フィレーナの何が、われわれをそうさせるのかね」
「さあな……」
「厄介なやつだ。フィレーナってやつは……ともかく、傍観者を傍観者にしておかないフィレーナと、訳のわからない存在のおせっかいな中年に、乾杯だ」
　バンニルは、自分の硝子杯に酒を注いだ。
「あんた……」
　ネストがぽつりと言った。
「人間が好きなんだな」
　バンニルは、酒を飲み、ふっと笑った。
「あんたもな……」
　ネストは肩を竦めて答えた。
「かもしれん」
「なぜだろうな……？」

「殺しと戦争の筋だてを考える闘技作家と策士が、人間が好きなどといったらさぞやひんしゅくを買うだろう」
「確かに……」
「しかし、事実かもしれん。おれたちの存在はひんしゅくものか」
「ひんしゅくでも、存在は存在だ」
とりとめのない会話をかわしながら、二人は、フィレーナの現れる日を待ち望んでいるお互いを知り苦笑していた。

*

戦いこそなかったが、食料不足の栄養失調と医薬品の欠乏で、「狼のフィレーナ」軍に病人は少なくなかった。
駐屯地の、野外天幕には数え切れないほどの病人が横たわっていた。
そんな中で看護に駆けずり回る女たちの一団がいた。
看護を指導しているのはテスだった。
テスは、戦いで夫や子供を失い、なにもすることもなく呆然と日々を送っている女達、ひとりひとりに呼び掛け、病人の看護を始めたのだ。
……なにもしないよりは、何かをしていたほうが気が紛れる……
そんな気持ちで始めた女たちがほとんどだったが、それがしだいに何もすることのない女たちの生きがいになっていったのだろうか……その数はみるみる増えていった。

それは、「狼のフィレーナ軍」にとっても別の効果をもたらした。

何もすることのない女たちと、兵士たちがいれば、当然のように風紀は乱れ、血を見るような痴話喧嘩が絶えない。

それは意味のない暴動にまで膨れ上がることもある。

さらに、病気が蔓延し、親のわからない乳のみ児が生まれ捨てられる。

食料難と、人間の増加……風紀のびんらん……それは、戦時下の「狼のフィレーナ」においては命取りになりかねない問題だった。

……だが、女たちにやりがいのある仕事があれば、女は馬鹿な男ほどはめをはずさない。

風紀は自然と正されるだろう……。

それが、心理病理観察看護人としてのテスが、女性の心理を前提にしたという建前のもとで、参謀のオルカやナスカに訴えた意見だった。

意見は取り入れられ、看護につく女性には最低限の食料を軍が保証することになった。

女性たちが看護につくようになると、みるみるうちに風紀のびんらんは姿を消していき、ささくれだった戦時下の空気が和らいでいった。

不潔の極みだった病院収容施設は清潔になり、伝染病も少なくなっていった。

それは、テス自身が驚くほどの劇的変化だった。

帝国内の病院は医学全能の場所だった。

医学で助からない生命は切り捨てられた。

だが、医薬品と医者の不足した南部海岸地方では、看護が医学を越えた効果を見せたのだ。生命を見捨てない看護の姿勢が、戦いで疲弊した人々の間に生命を尊重するという姿勢を生みだしつつあった。

「おれには、どうしてもわからない」

ある日、看護の手を休め赤く汚濁している海をぼんやりと見つめているテスにラズルは聞いた。

「なにがです？」

「どうして、あんたはこんなことに夢中になれるのか」

「不思議ですか？」

テスは、ラズルの言いたいことがわかっていた。

「人類は滅びかかっている。人の数を減らさなければ、さらに状態は悪くなる一方だ。まして、あんたもおれも、生きのびる進化から見捨てられた優秀種だ。それが、助かる見込みのない病人をなぜ助けようとするのか……滅亡寸前の世界から見たら、目くそが鼻くそを助ける、ほとんど茶番にひとしい一人よがりの芝居とは思わないのか……」

「一人よがりじゃ、いけないですか……？」

テスはラズルを、悪気のないいたずらっぽい子猫のような目で見つめ言った。

「え……？」

「滅亡寸前の世界から見たら、一人よがりです。それがわからないわけじゃありません。これ

でも、私なりにずいぶん考えたんです。私は、なぜ、この世界に生まれてきたのかって……でも、そうやって考えることって意味がないっていうことに気がついたんです。だって、滅亡寸前の世界に、やがては見捨てられる優秀種として生まれてきたのは、わたしの責任じゃない。生まれたくて生まれたわけじゃない。それは、ラズルさんだって、他の人たちだって同じでしょう？　でも、どんな世界に生まれようと、私は私です。かけがえのない私一人です。私は人のためではなく、私のために私を生きたい。わたしは、そう思うわたしが好きです。だから、たぶん、私と同じように自分を生きたい生命が消えていくのを見捨てられない。見捨てなければいけないのかもしれないけれど、見捨てられない。それが私だって気がします。世界が滅亡しようとしまいと、わたしは今を、私のために使いたい。いけませんか？」

「いや……おれは、あんたの気持ちを聞きたかっただけだ」

「なんだかんだ、理屈っぽいことといっても、結局、私、好きなことをやっているんだと思います。人を看護するのは嫌じゃない。自分でも好きなんだなあって思います。きっと、人間が生きているってことが楽しいんです。私って、結構、人みしりする傾向なんですけれど、意外と人間が好きなんだと思います」

「人間が好きか……」

「ええ……ラズルさんは好きじゃないんですか？」

テスは、ラズルの顔を見つめた。

ラズルは、その時突然思った。

……この女を守りたい……人類が絶滅しようと、世界が滅亡しようと……そのためならおれも生きていける……

ずいぶん、勝手で、一人よがりで、唐突な思いだと、自分でもあきれた。

だが、その気持ちは、ラズルの胸に、曖昧ではなく確かなてごたえとしてある。

自分の気持ちの中に、確かに存在するものを、いくら一人よがりだからといって、理屈で消せるものではなかった。

「人間を好きか？……どうかな……」

テスにたいしてそれだけ答えるのが精いっぱいだった。

テスは、そんなラズルからふっと目をそらし汚濁した水平線を見つめた。

「でも……それは、わたし自身のこと……今のままでは……」

いくら、病人の看護が充実したところで、今のままでは、どうにもならないことも事実だった。

この星の状態自体は、日一日と悪くなっている。

海を見ていればそれがよくわかる。

星の人口許容度はますます落ち、食料は減り、空気の汚染度も増す。

我慢し切れなくなった帝国は、人類の後継者としてのフィレーナを諦め、人口整理のために、あの得体の知れない爆弾を打ち込んでくるかもしれない。

そうでなくても、南部海岸地方の食料難はぎりぎりまできている。

看護の女性のための優遇措置は、いつ打ち切られても不思議はない状況なのだ。
そうなれば、すべては元のもくあみ……看護は文字通り、テスの一人芝居に終わってしまうだろう。
戦時下における人道的な一瞬の余興にすぎなくなる。
今のままでは遅かれ早かれそうなってしまう。
今のままではいけない。
今のままを変えるのは……。
まだ、会ったことはないが、資料を読みつくしてまるで旧知の親友のように思える女性……
フィレーナの姿を、テスは海の向こうに追っていた。

*

……これが、可能性……これが希望……
フィレーナは呆然と立ちつくしていた。
氷の島を出帆してから二カ月。
帆船「フィレーナ」は確かにドラコニア大陸に辿りついた。
楽な航海ではなかった。
訓練されたとはいえ外海は初体験の乗員たちだ。
航海中、二度の嵐に襲われ、半数の船を失った。
いや、沈むはずのない設計の船だったから、失うというよりはぐれたと言ったほうが、適切

かもしれない。

はぐれた船は今も、南の海のどこかをさ迷っているのかもしれないが、ともかく、大陸に辿りつけたのは、半数の五隻だった。

この現実は、フィレーナとリラたちにひとつの結論をもたらした。

それは、氷の島が溶けた後、フィアイの人々がすべて船に避難し、船上で自給自足の生活し生きていく……その可能性が消えたことだ。

海は予想以上に苛酷で、わずか十隻の船団ですら掌握できないのに、二百四十もの大艦隊が無事に航海を続けられるはずがなかった。

しかも、その航海は当てのない航海だ。

半年もたたぬうちに、ちりぢりバラバラになるのは目に見えていた。

やはり、一つの民が生き抜くには、動かない大地が必要だった。

だからこそ、日増しにドラコニアへの期待が膨らんでいったのだが……。

数日前、赤茶けた海岸線を見つけたときには、「フィレーナ」の乗員たちは躍りあがって喜んだ。

だが、その喜びも、長くは続かなかった。

海岸線に沿っていくら進んでも緑は見えなかった。

高感度望遠鏡で、いくらさがしてみても、緑はおろか、人影も、動物の影すら見あたらなかった。

五隻の船は、分散して、海岸周辺を探索することにした。
どの船からも、なんの連絡もないまま数日がたった。
やがて、旗艦「フィレーナ」の前に唯一、人造のものらしい建物が見えてきた。
それが灯台だった。
灯台は、赤茶けた砂浜にとり残されたようにぽつりと建っていた。
明らかに、フィロセラ型の灯台であり、位置からしても、リラの見た海図に描かれた灯台の一つだった。
フィレーナとフィンドナは相談の上、上陸を決めた。
氷の島に帰らなければならない時間は迫っていたし、せめて、フィアイの人々が、永住できるかどうかの手掛かりは欲しかった。
リラが、航海の途中、フィロセラの書庫で見つけた資料をもとに、携帯通信電算機を改造した環境汚染感知機によれば、その海岸の空気は、帝国の海岸部とほとんど変わらなかった。
つまり、かなり汚染されているといってよかった。
フィレーナやリラのように空気に対する抵抗力の強い人間には、さほど影響はないが、通常の人間より純粋度の高い空気を必要とする帝国人には、かなりつらい空気に思えた。
「すくなくとも、帝国人が苦手の海を渡ってまでして来る土地じゃないわ」
リラは、帝国の歴史にドラコニアの名が、全く出てこないのを納得したように言った。
だが、そこまでは納得していたリラも、砂浜の砂を分析したときは、呆然と呟くしかなかっ

た。
「嘘……まるで生命反応がない……」
この星、この空気の中なら、どんなに無機質に見える砂浜でも、なにがしかの生命反応があるはずだった。
どんな苛酷な場所でも、バクテリアの類なら、この星に住めない場所はないはずなのだ。
リラは、海岸を見渡した。
海は、気のせいか、帝国の海岸で見たどの海よりも赤く汚濁して見えた。
「死の海岸だわ……」
リラの口からそんな言葉が漏れた。
灯台の扉は、いつものように、フィレーナの剣を鍵代わりにして簡単に開いた。
灯台の中には、埃にまみれた電算装置が無造作に置かれてあった。
リラは、携帯通信電算機を使って点検した。
「眠っているけど、お腹がいっぱいになればお目覚めするとおもうわ」
リラは帆船「フィレーナ」の電力発生装置と灯台の電算機を繋いで稼働させた。
灯台の電算装置に、漫画の女の子の笑顔が浮かんだ。
そして、明るい女の子の声がきこえた。
「はい、今日もお仕事、がんばって……私とあなたの秘密の言葉、お願いね。はい」
……こんな時に、どういうつもりだ……

フィレーナは、唇を噛み締めて画像を睨みつけた。
リラは肩を竦めて言った。
「怒らない。怒らない。この電算機をつかっていた人の趣味なんだから。いわゆる、暗い幼女愛好家……。昔、電算機を使う人にはよくいたタイプらしいわ」
リラは、電算機に向かって……。
「はい、秘密の言葉って通過暗号でしょ……どうせ探り出してあげるけど、とりあえず、こんなのでどうかな……」
リラは、接続した携帯通信電算機からフィレーナと打ち込んだ。
画面の女の子がにっこり笑った。
「はい、これでじょぶじょぶだいじょうぶ……お仕事、がんばって……」
女の子の姿が消え、操作盤のような画像が現れた。
「あらら、ずいぶん、簡単な通過暗号……この電算機の係の人、あまり秘密を守ろうって気がないみたい」
リラは、操作盤の点灯機の部分に画面の指示印を持っていき、鍵盤を叩いた。
画像が瞬時に変わった。
先刻とはうって変わった真面目な声がした。
「灯台撤退にあたりドラコニア全土の灯台の通過暗号をフィレーナに書き換える」
「ごめん、意識的に、フィレーナにしたのね。初心者にも簡単にわかるように……」

そして、ドラコニアの地図が写し出された。
「以後、ドラコニア全域は、禁断地区に指定され、何人も立ち入りを禁止される」
「禁断地区……？　どういうことなんだ」
フィレーナは、画面にむかって言った。
「この電算おじいが教えてくれるわ」
リラが、携帯通信電算機の鍵盤を押した。
電算機の声が聞こえてくる。
「二千十一年……人工の月の利権を巡って北大陸で始まった全世界的戦争は、ドラコニア大陸に波及しむしろ北大陸よりも貧困と開発途上国のひしめくドラコニアを舞台にした戦争に変質し最終段階を迎えた」
フィレーナが呟いた。
「二千十一年……いつの年代なんだ」
「年の数え方なんてその国次第、目安なんかない。ともかく、ここにある電算機からすると、それほど遠くない昔だと思う。北の大陸って、今の帝国の大陸のことだと思う」
電算機の声は、冷たく簡略に事実を伝えようとしていた。
「ドラコニア大陸には、不安定な国家が無数にあり、しかもその量、実に世界の三分の二をしめる核兵器が各国に保有設置されており、その使用は時間の問題である。一度使用されれば堰をきったように各国で使用され、それは、ただちの核の全面使用に通ずる。核の全面使用はこ

の星の滅亡を意味する」
「核？」
フィレーナが聞いたことのない兵器だった。
「知らない。でも、ろくでもない兵器でしょう。超爆弾のような……」
リラが肩を竦めた。
電算機の声は続いた。
「フィロセラは秘密裏に開発したウイルスを、ドラコニア大陸に散布することにより急速な終戦をはかり、核によるこの星の危機を回避することにする。なお、このウイルスは人体の免疫抗体を破壊するもので、その効力は一日でドラコニア全土の生命を死滅させることが可能である。周知のとおり、ドラコニア大陸は人口増大ならびに環境破壊の極にあり、このままでは、星全体に与える影響は致命的なものになる。この機会に、ドラコニア大陸より、環境破壊の要因なるもの……すなわち、人間をしばらくの間、退去させるべきだとフィロセラは判断した。退去とは除去と同意である。
現在、ドラコニア大陸の土地の八割は、フィロセラの企業によって買い占められており、大陸の大陸に関する権利はほぼフィロセラが有しているといっていい。
そのうえに、借り住まいしているに過ぎぬ各国家の横暴を、これ以上フィロセラは許すわけにはいかない。
人道上の問題を云々（うんぬん）するむきには、この星全体の人類の生命とドラコニア大陸在住の人間の

数を秤にかければおのずから答えはでよう。
なおウイルス散布後は、そのウイルスを急速に消滅させるため、強力な殺菌兵器を使用する。殺菌の効力はほぼ九十九年と見られ、その間、ドラコニアは、禁断地区として何人も立ち入ることを禁止する。その間、ドラコニア大陸は容易に廃棄できぬ核兵器の投棄場として機能するものとする」
フィレーナはもうなにもいいたくなかった。
ともかくフィロセラの計画は実行され、ドラコニアは死滅した。
さらに、電算機は新しい事実を伝えた。
殺菌兵器の効力は予想以上に強力で、一度兵器の洗礼を浴びた土地は、再び生命を生み出すまで何年を要するか不明だというのだ。
その追いうちに、フィレーナは肩を竦めるだけだった。
ともかく、大陸は今、人間の住める大陸ではない。
この大陸をそんなふうにしてしまったのは、フィロセラなのだ。
いや、空に鈍く輝き夜を曖昧にした二つの人工の月も……人類生存のために、懸命にこの星の人口を減らし、無茶としか思えない進化を続けている帝国も、みんな、フィロセラが生み出したものなのだ。
「凄い国なのですね……フィロセラは」
フィラーレが呟いた。

「凄い国だね。その国の血を引いているのが僕だ」
「だから……？」
フィンドナが聞いた。
「だからって……いいの？　こんな僕で……」
フィレーナが言った。
「フィロセラって国を知らずに、フィレーナを先に知ってよかった……だって、あなたはあなたですもの……ね」
フィラーレはフィンドナに同意を求めた。
フィンドナは頷いた。
「フィレーナはフィレーナだ。フィロセラという国を知っていたら、会う前から嫌っていただろう。だが、フィレーナはいいやつだ。そいつの国がどこかで、いいやつか悪いやつかは計れない。これは、おれには驚きだ。もしかしたら、帝国にもいいやつがいるかもしれない」
「僕は……僕か」
フィレーナが呟いた。
「まずフィレーナです……それから生まれはフィロセラだけど……これ、つけたしです」
リラが陽気に言った。
フィンドナは頷いて言った。
「だから、フィアイの教えは正しい。戦わないほうがいい」

「けれど……ドラコニアには住めるところはなさそうだ」
「なにが、可能性よ、なにが希望なのよ……失礼しちゃうわ」
リラが肩を竦めた。
「可能性……希望……」
いきなり、電算機から女の子の声が聞こえた。
リラは目を丸くした。
「へえ、意外とよくできているんだ。私の声に反応してくれた。おちゃめだね」
画面の中の女の子は、明るく踊りながら語りかける。
「可能性と希望……フィロセラのために、はい、がんばって……!」
画面に操作盤が映った。
……カノウセイ……ト……キボウ……
操作盤にフィロセラ語が出た。
操作盤の操作棒の絵に、指示印を持つていった。
画面が点滅した。
続いて、激しい地鳴りがした。
一同はあわてて灯台の外に飛び出した。
灯台の地下から海岸線にむかって、砂浜を崩して、巨大な割れ目が走っていく。
割れ目はみるみる口を開けていく。

割れ目の地下には人工的に作られた巨大な格納庫があった。
そして、そのなかに収納されていたのは……。
「なんなんだ、これは……」
フィレーナの声は、泣き出しそうだった。
そこには数え切れぬほどの爆弾が並んでいた。
「これが、可能性と希望……」
電算機の女の子ははじきだされる数字の間で明るく踊っていた。
「ドラコニア大陸は、この規模の核爆弾基地が三百か所ありまーす。すべてをあわせると、この星を百二十六個吹き飛ばすだけの威力がありまーす。これだけあればだれにも負けませーん。見せるだけでもみんな逃げちゃうでしょう。逃げようとしても逃げる場所なんかありませんけれどね。だ、か、ら、……フィロセラは負けません。がんばって！　ね……」
そして、ドラコニア大陸の核基地を示す地図が、映し出された。
「おのれはどこまで馬鹿じゃ……幼女愛好者め」
リラは、電算機の点灯機を切った。
「この電算機は、まともに入っているデータを、馬鹿な女の子が話しているように変換しているの。待っててね。先刻の真面目なおじさんに戻すわ」
「もういいよ」
フィレーナが言った。

「どうせ、言っている内容は同じだろう？」
「そりゃそうだけど……こやつ、なめちょる。許せん」
フィレーナはくすくすと笑い出した。
「ほんとうにもういいんだ。……可能性と希望か……この星を百個も壊せる……大した可能性だ。夢と希望の大盛り爆弾か……」
フィレーナは突然、腹を抱えて笑い出した。
リラは慌てた。
「やだ。フィレーナ。ぶっとんじゃったの？」
フィレーナは笑いを堪え切れないふうで答えた。
「大丈夫。使う気もない爆弾でぶっとばされちゃたまらないよ……」
そして、真顔になってからフィンドナに言った。
「今、この星で人間が住めるのは、帝国のいる北の大陸しかない。帝国か僕たちか、どちらかが諦めなければならないとしたら、僕は逃げない」
フィンドナは頷いた。
「そうなるだろうと思っていた」
「だけど、フィアイの人たちに戦わせはしない。戦うのは無理だ。このまま船団にはドラコニアの周りで、一時的でもいいからとりあえず人の住めそうな島を見つけてください。氷の島が溶けて壊れるときに、避難できればいいんです。あくまで、永住するのは北の大陸なんだか

ら……」

「戦うのね、帝国と……」

リラが聞いた。

「戦うのは帝国とじゃない。……僕を、いや、人間をここまで追いつめた何かと戦うんだ。僕たちは生き残る。こんな馬鹿げた世界に生み出されて、生きられなくてどうするんだ」

旗艦「フィレーナ」はその日のうちに、他の船と別れ、ドラコニアから氷の島に向かった。

その舳先で、赤濁した海を見つめるフィレーナの横顔にもう迷いはなかった。

＊

「ドラコニアの海岸線で、異常な電気反応がありました。ドラコニアの核基地の一つが、とうとう開かれたようです。もっとも、すぐに、閉じられましたが……」

最年少の皇帝種が溜め息まじりで呟いた。

皇帝種のそれぞれが話し出した。

「フィレーナですね」

「他にいますか」

「核基地をすぐに閉じたということは、フィレーナは使用する気がない……」

「やはり、戦うことより海を、さ迷う道を選んだのですか？」

「核兵器なしで帝国と戦うとしたら、よほど無謀か……さもなければ、われわれの期待するように、フィレーナはきれいな戦いを望んでいる。この星を滅ぼさぬ形で戦おうとしている。そ

うだとしたら……」

一同は、互いの顔を見合った。

「少なくとも、精神的には、人類の明日を託すにふさわしい人間です」

「困りましたね」

「そこまで見逃し育ててきたのは私たちではないですか」

「われわれも超皇帝種を急がねばなりません……この星に残された時間はそうはない」

「では……？」

「ええ……始めましょう。フィレーナと帝国の戦いを……」

皇帝種たちはいつもと同じ口調でそう言った。

＊

その日の未明、帝国軍に指令が発せられた。

……現在、進行中の戦闘をすみやかに停止し、南部海岸地方反乱組織「狼のフィレーナ」掃討を開始せよ……

南部海岸地方にもっとも近い南部帝国軍を指揮するラビナ司令官は、帝国南部に分散していた帝国軍を集結させ、「狼のフィレーナ」の占領地域に突入した。

他方面の帝国軍は、いったん、首都ボー付近に集結、わずか一日で、いまや屯ろしているにすぎない首都の反乱暴徒を掃討消滅させ、首都から南部海岸地方までの道をまるで地ならしでもするように、進撃を開始した。

それは、徹底した掃討だった。
その後に、反乱暴徒の疑いのあるものは、誰一人、生き残っていなかった。
一足早く「狼のフィレーナ」の攻撃を始めた南部帝国軍は、「狼のフィレーナ」軍の徹底した抵抗を受けた。
南部帝国軍の管轄は、南部海岸地方を含む広大な地域だ。
制圧すべき反乱軍も「狼のフィレーナ」だけではなかった。
長期にわたった他の反乱暴徒との戦いに、南部帝国軍は疲弊しきっていたし士気も弛緩していた。
それに比べ「狼のフィレーナ」軍は、南部海岸地方制圧後は、これといって、大きな戦闘はなかった。
さらに、他の反乱組織のように、勢力を拡大する気もなかったから、戦いのない間は防衛線の強化に全力を上げていた。
しかも、その戦闘法は地の利をいかし、一瞬のうちに攻撃を仕掛け、気がついたときには姿をくらましている瞬間遊撃戦法だった。
戦いの始まった数日は、南部帝国軍の被害は惨憺たるものだった。
一日の戦死者は軽く万を越えていたが、「狼のフィレーナ」側の死者で確認できたのは、十人もいなかった。
いくら、白熱光線による戦闘で屍体の蒸発しやすい戦いとはいえ、あまりに大きい損害の差

ははっきりしていた。
ラビナ司令官の脳裏をよぎったのは、二十年以上前のフィロセラ攻防戦だった。
彼は、あの戦いに下級士官として参加していたという極秘の経歴があった。
あの時も帝国軍は、フィロセラを海岸の小都市を滅亡させるために、想像を絶する被害をこうむった。
しかし、今度の「狼のフィレーナ」はあの時のフィロセラの数倍の兵力と、数百倍の広さの土地を占領しているのだ。
しかも、そのほとんどが海岸線に沿っている。
帝国人の体質の変化は著しく、海水を全く苦手にしている。
二十年前のフィロセラ攻撃の時も、海からの攻撃を帝国ができさえすればあれほどの損害を受けず、楽に攻略できたはずだった。
二十年前ですらそうだったのだ
今、海を背にした反乱軍と戦えば、どれほど損害をこうむるか、想像するだけで背筋が寒くなった。
首都ボーから来る帝国の合流軍を待てば、圧倒的な数の差で、「狼のフィレーナ」を踏み潰すことができるが、それでは、今まで帝国の僻地である南部で反乱と戦ってきた南部帝国軍の苦労はむくわれない。
それどころか、帝国軍本隊を待てば、あくまで南部は南部帝国軍で処理すべきだったと非難

さえ受けるかもしれない。
帝国軍人としても、他軍の力を借りることは潔いとはいえない。
南部帝国軍出身の軍人は今後、帝国軍部内でどんな誹謗を受けるかわからない。
ラビナ司令官は、古い性格の軍人だった。
自分は辱めを受けても、部下の名誉だけは守りたかった。
そして、南部帝国軍が自力で「狼のフィレーナ」を倒すには、禁止された超爆弾の使用しかなかった。

*

超爆弾の使用……それこそが、「狼のフィレーナ」の参謀、バンニルたちの一番恐れていることだった。
「狼のフィレーナ」が取った瞬間遊撃戦法は、戦果よりも超爆弾の威力から、極力、損害を防ぐためでもあった。
そして、もう一つの目的もあった。
首都ボーから、帝国の大合流部隊が南部海岸地方に向けて進んでいる情報は、届いていた。
地面をならすような物量による徹底した攻撃には、いかなる瞬間遊撃戦法も勝ち目がないのはわかっていた。
合流軍が南部海岸地方に入ってくれれば、どんな攻撃も自殺をするようなものだった。
だから、「狼のフィレーナ」が生き残る作戦があるとしたら合流軍が来る前に手をうたねば

ならない。

その手段が瞬間遊撃戦法だった。

この作戦だと、敵にこちら側の数が知れにくい。

南部帝国軍は「狼のフィレーナ」の本隊がいると信じて、こちらの総攻撃を恐れ、兵を分散させずに、固まって行動するだろう。

その間に、一人でも多くの人間を南部海岸地方から脱出させる。

それがバンニルのたてた「狼のフィレーナ」の生き残りのための策だった。

だが、それが可能なのは、帝国の大合流部隊が来るまでの話だ。

そして、合流部隊が来れば、「狼のフィレーナ」は確実に掃討されたという証拠を残して消えるつもりだった。

そうでなければ、帝国は瞬間遊撃戦法を恐れ、いつまでも「狼のフィレーナ」の残党狩りを続けるだろう。

「狼のフィレーナ」に関わりあいがあろうとなかろうと、南部海岸地方にいる多くの人間がその犠牲になるのは目に見えていた。

「狼のフィレーナ」が掃討されるときは、少数の軍勢で、いかにも全軍が玉砕したかのように派手に見えなければならない。

バンニルが、「狼のフィレーナ」最後の土地に選んだのは、皮肉にも昔、フィロセラがあったあの海岸だった。

確かに、海に囲まれた旧フィロセラの土地は攻めるに難しく、守りやすい場所だった。
「狼のフィレーナ」軍は旧フィロセラに即製の要塞を作った。
そして、そこには病で動けない患者たちも運びこまれた。
テスの率いる看護の女たちも集められた。
もちろん、患者にまで玉砕をしいるつもりはなかった。
反乱軍が完全に玉砕した後、患者とおんなたちが見つかるような中央部のわかりやすいところにいれば、戦いの終わった後だけに、帝国軍は冷静になり、病人と女たちを、反乱軍と間違えて虐殺するような危険は少ないと考えたのだ。
それは、病人と女たちが、戦場の中で、たけり狂った帝国軍と遭遇するより、何倍も安全であることを、心理病理観察看護のテスも同意したうえで決めたことだった。

＊

「やはり、やつらはフィロセラを最後の砦にするつもりか……」
……旧フィロセラに反乱軍の要塞が作られた……
その情報を受けた南部帝国軍のラビナ司令官の脳裏に、消そうとしても消せないフィロセラ攻防戦の記憶が重くのしかかっていた。
そして、その日一日、軍司令部の司令官室に閉じ籠もって出てこなかった。
翌朝、充血した目で司令官室から出てきたラビナ司令官は決意していた。
……明朝……わが愛する南部帝国軍兵士のため、私は私の一存で、帝国令を破り、超爆弾を

使用いたします。この責任はわが身一人のものであります……わが南部帝国軍に栄光あれ……
口元でぶつぶつ唱えているのは、用意した遺書の文章だった。

＊

その日、帝国の大部隊が南部海岸地方に到達した。
それを合図にしたかのように、「狼のフィレーナ」の瞬間遊撃戦法は影をひそめた。
大部隊は、なんの抵抗も受けず、一日で南部海岸地方の中部まで進軍した。
南部帝国軍の苦戦が嘘のようだった。
このままでいけば、明日の夕方にも、旧フィロセラに達しそうな勢いだった。

＊

夜……。
旧フィロセラの要塞は深い霧に閉ざされていた。
それでも三つの月の光は霧にこもり、夜だというのにあたりを乳白色に浮かび上がらしていた。
海に突き出した埠頭の上に二人の男が立っていた。
バンニルとネストだった。
「フィレーナはこの埠頭の上で、灯台の光を見たそうだ。そして、光に導かれて北へ旅立った」
バンニルが言った。

「そして、われわれもここにいるってわけか」

ネストが呟(つぶや)いた。

「もう一度会いたかったが、明日の夜から、おそらく戦いが始まる。あんたは別に、つき合う必要はないぞ」

バンニルが言った。

「つき合う必要がなくてここまでつき合ってしまった。だが、ここから先は海……ここまで来たものは最後までつき合わせてもらうよ。……どれぐらいわれわれは頑張(がんば)れるのかね」

ネストが聞いた。

「少なくとも、フィロセラがここで頑張れた以上は持たす。たわいなく負けたんではここで滅びたフィロセラにも悪いだろう。流策士『はぐれ蜘蛛(ぐも)のバンニル』の名も泣かせたくないしな……」

「頑張れるかね。そんなに……」

「あちらが、訳のわからん爆弾を使わなければ頑張れる」

「爆弾か……それを使えばつまらん終わりだ……演劇としてもね……」

「演劇か……あんたの人生は、面白い演劇だったかね」

バンニルが聞いた。

「本を書いたやつのできが悪いが、共演者には恵まれたようだ」

「そう、どんなに策が悪くても、戦う奴(やつ)次第で面白くなる作戦もある」

「もう一度……会いたかったがな」
今度はネストがそう言った。
海の上から歌声のようなものが聞こえてきた。
二人は歌声の方向を見た。
霧の中を、まるで月のように大きさの滲んだ光がこちらに向かってくる。
やがて、霧をやぶるようにして黒い巨大な影が現れた。
中央にそそり立つ主帆……光はそのうえについていた。
流れる歌が、北辺の海洋民族フィアイのものであることを二人は知らない。
埠頭の先、霧の中にふわりと人影が浮かび上がった。
「ここにいるよ……僕は」
フィレーナは「狼のフィレーナ」に戻ってきた。

＊

翌朝……。
旧フィロセラは炎に包まれた。
超爆弾が炸裂したのだ。
同じころ、南部帝国軍の司令官室で超爆弾使用の責任を取り、自決したラビナ司令官の遺体が発見された。
旧フィロセラに到達した帝国軍本隊は調査を開始したが「狼のフィレーナ」の要塞は跡形も

なく蒸発し、一体の屍体も確認できなかった。
超爆弾使用は確かに帝国令違反だった。
しかし、帝国軍内部にそれを責める声はなかった。
彼らもまた戦いに疲れており、一瞬のうちに敵を消滅させる超爆弾を使用したラビナ司令官の英断を陰で賞賛するものもいた。

＊

皇帝種の一人が溜め息をついた。
「超爆弾の使用は予想外でした」
「それだけ、帝国軍指令階級の心も追い詰められているのでしょう」
「ともかく、フィレーナは動き始めました」
「われわれも追い詰められねばならない」
そのとき、両性の皇帝種が入ってきた。
「超皇帝種が完成しました。われわれの人類生存の切り札。われわれ以上の人類がね」
そう告げた両性の皇帝種の顔に、いつもの皮肉な笑いはなく全くの無表情だった。
そして、硝子の城の、超皇帝種とは別の研究室に、ひとりの青年が眠っていた。
年齢は四歳……しかし、体は人体の最盛期ともいえる十八歳だった。
奴隷の幼児を、進化研究のため、急速に成長させた実験用の青年だった。
青年の名は、フィス。



フィレーナとの闘技試合で殺されたフィコスの息子は不気味な急成長をとげていた

出身は地方都市ドラ……その父親は四年前の闘技試合で殺された。
そのときの対戦者の名はフィレーナ……だった。

エピローグ

汚濁した波をけ散らすように帆船が行く。
「海の狼」の旗が汐風にたなびく。
旗艦「フィレーナ」を先頭に、二百を越える帆船が進んでいく。
旗艦「フィレーナ」には、ネストがバンニルが、オルカが、ナスカが　乗っていた。
そして数か月前まで、「フィロセラ」と呼ばれていた船団最大の帆船には、テスとラズルと看護の女たち……そして患者たちが収容されていた。
更に、他の帆船には「狼のフィレーナ」の兵士達……。
「狼のフィレーナ」は超爆弾の炸裂する夜明け前に、旧フィロセラから帆船による撤退を終えていた。
そして、行き先は……。
フィレーナは、船の上で再会した「狼のフィレーナ」の面々を前にして、静かな口調で言った。
「僕は帝国と戦う。つきあってくれますか？」

だれも、異存はなかった。

その日から、「狼のフィレーナ」は、「海のフィレーナ」、もう一つの呼び名は「海の狼」だった。

行く手の波は、大きく激しく揺れていた。

第8部　完

帝国地図


N
W
E
S
北極点
フィアイの里
北デビス山岳地帯
汚潮海域
ドラ
デビ中部高原地方
ジャンガー
首都ボー
汚潮海域
西部海岸地方
大砂漠
南デビス山岳地帯
フィアイの氷島
ルシベ
大艦隊
デビ
旧フィロセラ
狼のフィレーナ里
解放地区
南部海岸地方
世界変更線
灯台
核基地
ドラゴニア大陸
(絶滅の大陸)
絶滅地帯
南極点

あとがき

……フィレーナのフィナーレがやってきます……。

そんな恥ずかしくつまらないだじゃれを、いつか「あとがき」に書こうと思っていました。

「永遠のフィレーナ」の雑誌掲載の第1回目が、１９８４年でしたから、ほぼ、十年にして、いよいよその時が近づいたようです。

「永遠のフィレーナ」の文庫の第1巻目のあとがきに、

……フィレーナが、この先、どんな運命をたどるか、作家である僕にもわからない。僕の作った主人公たちは、いったん生み出され動きだしたら、ひとり歩きして、作家の目論見通り動いてくれないのが普通だから、作家自身がはらはらどきどきしながら、見つめていかなければならない……ぼくは、こんな内容のことを書いた覚えがあります。

そして、この8巻目を書き終えた今、フィレーナがほぼ十年がかりで、この作品の作家である僕に何を書かせようとしていたかが、この僕にも見えた気がします。

十年という月日の間、ぼくたちのまわりの世界はずいぶん変貌しました。

ベルリンの壁はなくなり、ソ連はばらばら……などと、大風呂敷をひろげるように、現代史の年表をめくる気はありませんが、街の片隅で細々と原稿を書いている怠け者の作家にも十年という時間の変化は、確かに打ち寄せています。

十年は、「フィレーナ」と僕をどう変えたか、そして、辛抱強く付き合ってくださった読者の皆さんの十年は、どうだったのか……。

作家が怠け者ゆえに、ずるずると十年間付き合ってくれたフィレーナは、今、剣を抜いて、作家の僕に迫ります。

「僕がなんなのか。何のために存在しているのか……いいかげんに答えをだしてください」

でも……無責任な作家は答えます。

「フィレーナ、君は十年も生きてきたんだ。その答えぐらい自分で出せよ」

「そういうことなら……」

フィレーナは、今まで僕に見せたことのないさわやかな笑顔を浮かべて言います。

「僕は僕のフィナーレを、自分で見つけるよ」

そう、そして作家である僕も、読者のみなさんも、この作品にかかわった十年間の自分なりのフィナーレを見る時が来たようです。

フィレーナの戦いのフィナーレは、もう、目の前です。

1993年9月の熱い日
首藤剛志

アニメージュ文庫

永遠(えいえん)のフィレーナ 8

海(うみ)の狼(おおかみ)



首藤剛志(しゅどうたけし)

'49年8月18日、福岡生まれ。脚本家・小説家。19歳でシナリオデビュー。「魔法のプリンセス　ミンキーモモ」などのシリーズ構成を務める。小説家としては「ゴーショーグン」と本シリーズが代表作。



高田明美(たかだあけみ)

3月31日、東京生まれ。キャラデザイナー・イラストレーター。「クリィミーマミ」「うる星やつら」のキャラデザインを経て、「機動警察パトレイバー」のキャラデザインを務める。

1993年10月31日 初刷　　N-084
Printed in Japan

著　者　首藤剛志(しゅどうたけし)
発行者　山平松夫(やまひらまつお)
〒105-55 東京都港区新橋4—10—1
発行所　株式会社　徳間書店
電　話　03(3433)6231(大代)
振　替　東京4—44392番
印　刷
製　本　大日本印刷株式会社

〈編集担当　吉田勝彦〉

★この本を読んでの感想を上記までおよせ下さい。また著者へのお便りもお待ちしています。

ISBN4-19-900001-1

首藤剛志関連作品リスト

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
狂気の檻
覚醒する密林
時の異邦人
はるか海原の源へ
幕末豪将軍
美しき黄昏(たそがれ)のパバーヌ
永遠のフィレーナ1～8
都立高校独立国上下
いつかきっとピーチブック(ミンキーモモ)
それからのモモ(ミンキーモモ)
夢の中の輪舞(ロンド)(ミンキーモモ)
ラインハルトとヤン(銀河英雄伝説)

カバーイラスト＝高田明美
カバーデザイン＝真野　薫
カバー印刷＝真生印刷(株)

デビス帝国に滅ぼされた海洋国家フィロセラの王女フィレーナは、奴隷の闘技士として育てられた。自らの運命の導くままに帝国の神殿を破壊したフィレーナの噂は帝国中に広まり、各地に非帝国民の反乱軍が乱立した。その後、南部海岸地方でNo.1の反乱軍を率いるようになったフィレーナは、単身極北の地に向かう。そこでフィレーナは氷づけのフィロセラの艦隊を発見し、この艦隊とともに未知なる大陸へ乗り出す決心をする。

9784199000010
1910174004201
ISBN4-19-900001-1
C0174 P420E (0)
アニメージュ文庫　定価420円(本体408円)